小山市文化財調査報告書　第2集

乙女不動原亀田遺跡第二次発掘調査

昭　和　52　年　5　月

小　山　市　教　育　委　員　会

あいさつ

間々田乙女不動原地域一帯は、埋蔵文化財包蔵地として周知されている地域であり、これまでに表面採集の結果、縄文土器片や土師器片が散布していました。

昭和４９年より5ケ年計画によって、同地域は、区画整理事業が施行され、道路造成が行われております。

遺跡の保存について、乙女区画整理組合と協議し、道路線上にかかる遺跡については、記録保存の措置をとるため、市教育委員会において発掘調査を行うことになりました。

既に第一次調査が終了し、今回第二次調査の整理も済みここに調査結果がまとまりましたので報告書を刊行いたします。

不十分ではありますが、埋蔵文化財の理解のため、又郷土小山の文化遺産を後世に伝える資料として、ご活用いただければ幸いです。

最後に、本調査にあたりまして、御協力願いました関係者の方々に、心から感謝申し上げます。

昭和５２年３月

小山市教育委員会

教育長　慶野恒徳

例言

1　本報告書は、小山市教育委員会が、昭和５１年度に実施した、乙女土地区画整理事業に伴う第二次緊急発掘調査の報告書である。

2　発掘調査期間は、昭和５１年８月２日から昭和５１年９月１３日まで延４１日間行われた。

3　本報告書の住居跡実測図は1／80に、土器、石器実測図及び拓本は1／3　に原則として統一してある。その他は任意の縮尺となっているが、スケールを付してある。　尚平面図及び　土層図中の土器、石器、瓦を明示するため、附号を用い●印は土器、▲印は石器、■印は瓦とした。

4　本報告書の資料の整理・原稿作成は、遺物整理に参加した各員によって分担した。尚、分担者名は文末に明記した。

5　本報告書の図面の作成、浄書　及び　編集は、各員の協力・了解を得て三沢正善が担当した。遺構、遺物の実測、トレースは、鈴木敏中、山本茂樹、小林照教、岡屋英治、長野康敏、以上の日本大学学生の協力を得た。

6　本報告書の資料は、すべて小山市教育委員会で保管している。

7　本報告書の作成にあたり、栃木県教育委員会・文化財専門委員会・市区画整理課・乙女土地区画整理組合の御協力をいただきました。

8　発掘調査方法につきましては、立正大学坂詰秀一氏、日本大学竹石健二氏、県立郷土資料館館長尾島利雄氏に御教示、御援助をいただきました。

乙女不動原亀田遺跡第二次発掘調査

小山市文化財調査報告書第２集

本文目次

序　文　　小山市教育長　慶　野　恒　徳

例　言

第１章　序説

第１節　周辺の遺跡と立地 …… 9

第２節　調査の経過

1. 発掘調査に至る経過 …… 13

2. 発掘調査方法 …… 13

3. 発掘調査日誌 …… 14

第２章　遺構・遺物

第１節　住居跡と遺物 …… 20

第２節　その他の遺構と遺物

1. 縄文時代の土壙 …… 39

2. 溝状遺構 …… 40

3. 性格不明遺構 ……

第３章　乙女不動原亀田遺跡の地質調査

土質試験 …… 58

第４章　遺構・遺物の総括 …… 60

第５章　まとめ …… 63

図版目次

図版 1　遺跡景観（航空写真）

図版 2　遺跡全景　1.遠景　2.近景

図版 3　遺構　住居跡　1号住居跡及び5号土壙群、2号住居跡遺物出土状態

図版 4　遺構　住居跡　2号住居跡遺物出土状態、2号住居跡　3号住居跡

図版 5　遺構　住居跡　4号住居跡、4号住居跡遺物出土状態、5号住居跡

図版 6　遺構　住居跡　3・4・5号住居跡、1号土壙、3号遺構

図版 7　遺構　住居跡　2号住居跡、溝状遺構、1号土壙、2・4号遺構
2号遺構遺物出土状態、4号遺構土層断面

図版 8　遺構　住居跡　5号土壙群、5号C土壙、4号住居跡、6号土壙

図版 9　遺物　1・2号住居跡出土土器

図版10　遺物　2・4・5号住居跡出土土器

図版11　遺物　3号住居跡出土土器

図版12　遺物　1号土壙、2号遺構出土土器、2・3・4号遺構出土瓦

図版13　遺物　グリッド出土土器

図版14　遺物　グリッド出土土器、板碑，土玉等

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 9
第２図　遺跡付近の地形図 …… 10
第３図　A地点遺構分布図 …… 16
第４図　A地点粘土範囲 …… 17
第５図　A地点D－７－５．９グリッド層序 …… 18
第６図　B地点遺構分布図 …… 19
第７図　１号住居跡出土遺物状態及び実測図 …… 20
第８図　１号住居跡土器実測図 …… 21
第９図　１号住居跡Pit 及び炉の実測図 …… 23
第１０図　２号住居跡出土遺物状態及び実測図 …… 24
第１１図　２号住居跡土器実測図 …… 25
第１２図　２号住居跡土器実測図 …… 26
第１３図　２号住居跡Pit 実測図 …… 28
第１４図　３号住居跡出土遺物状態及び実測 …… 29
第１５図　３号住居跡出土土器拓影 …… 30
第１６図　３号住居跡Pit 実測図 …… 32
第１７図　４号住居跡出土遺物状態及び実測図 …… 32
第１８図　４号住居跡実測図 …… 33
第１９図　４号住居跡出土土器実測図 …… 34
第２０図　４号住居跡Pit 実測図 …… 35
第２１図　５号住居跡出土遺物状態及び実測図 …… 36
第２２図　５号住居跡出土土器実測図 …… 37
第２３図　５号住居跡Pit 実測図 …… 38
第２４図　１号土壙実測図 …… 39
第２５図　１号土壙出土土器拓影 …… 39
第２６図　１号溝状遺構出土遺物状態及び実測図 …… 40
第２７図　１号溝状遺構土器実測図 …… 41
第２８図　２号遺構出土遺物状態及び実測図 …… 41
第２９図　２号遺構出土土器実測図及び瓦拓影 …… 42
第３０図　３号遺構遺物出土状態及び実測図 …… 43
第３１図　３号遺構出土土器及び瓦拓影 …… 44

第３２図　４号遺構遺物出土状態及び実測図 …… 45
第３３図　４号遺構出土土器実測図及び瓦拓影 …… 46
第３４図　５号ＡＢＣＤＥＦ土壙実測図 …… 48
第３５図　５号土壙出土土器実測図及び瓦拓影 …… 49
第３６図　６号土壙実測図 …… 50
第３７図　石器実測図 …… 51
第３８図　グリッド出土土器拓影 …… 53
第３９図　グリッド出土遺物実測図 …… 54
第４０図　グリッド出土遺物実測図及び板碑、古銭拓影 …… 56

発掘調査団の編成

1　団　長　　慶野恒徳　小山市教育委員会教育長

2　副団長　　栗原玉心　小山市教育委員会教育次長

〃　　町田清作　小山市文化財専門委員会委員長

5　調査団事務局

田中仁一　市教委社会教育課長
稲葉英男　〃　文化係長
須藤邦夫　〃　文化係主事
梅山俊和　〃　〃
籠谷邦子　文化係臨時職員

3　調査主任　三沢正善　小山市教育委員会社会教育課嘱託職員
〃　　福田定信　小山市市史編さん室主事補

4　調査委員　竹井佐久三　市文化財専門委員会副委員長
尾島利雄　委員
柳川　宏　〃
石川　学　〃

6　調査補助員

初山孝行、芹沢清八、金子直行、青木頼子以上国学院大学生、鈴木敏中、山本茂樹、小林照教、岡屋英治、長野康敏、掛礼　宏、天野義直、渡部幹昭、圷　淳子、野口純代、鈴木ハマ子、渡辺健二、笠井敏彦、以上日本大学生、森田久男（法政大学卒業生）、藤巻正信、高橋正敏、関口武司、須賀京子、三浦和信以上の日本大学卒業生の協力を得た。

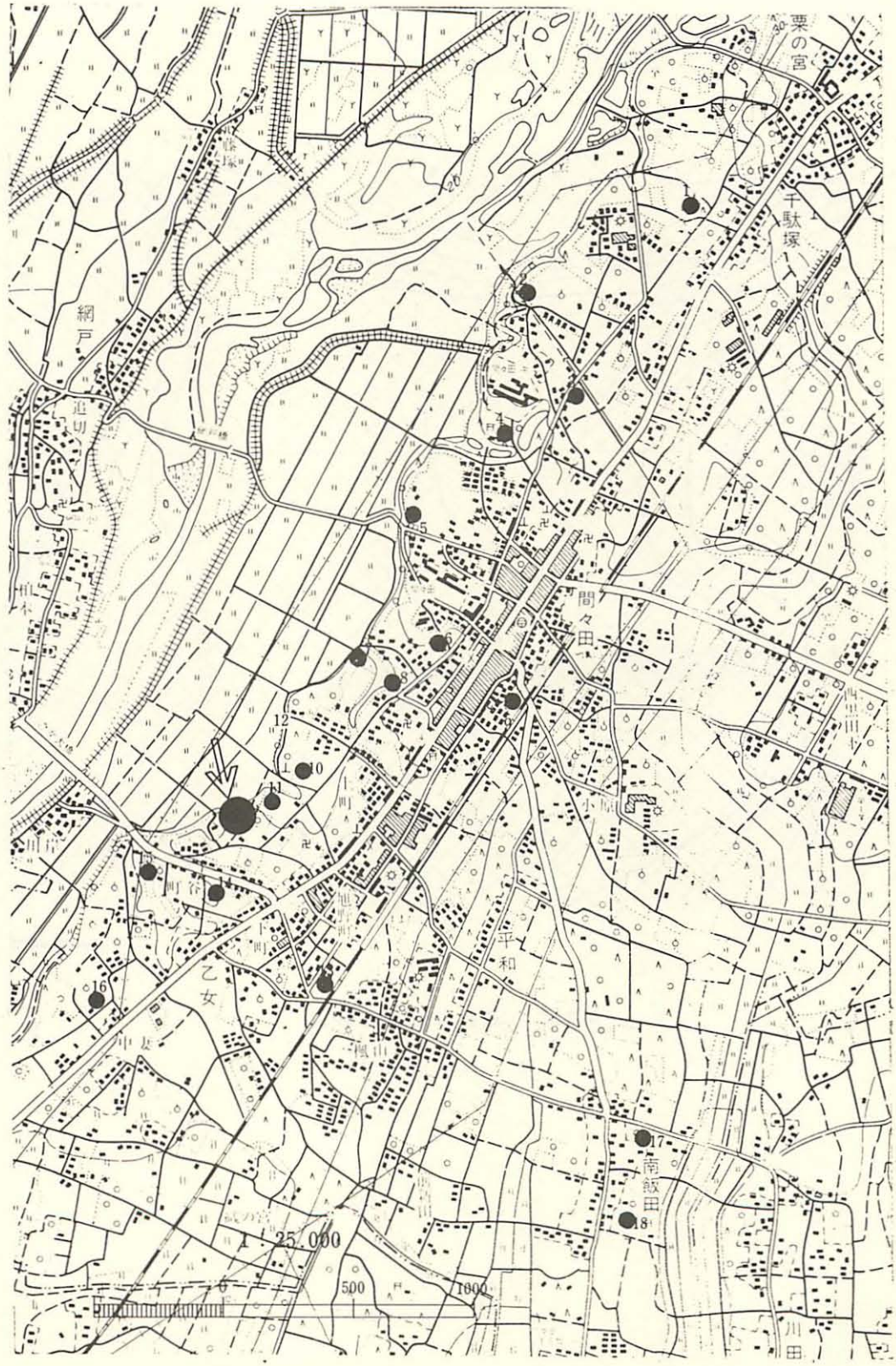
7　調査作業員

東洋大学、千葉工大学、宇都宮大学、東京家政大学、白鷗女子短大、昭和薬科大学、小山高校、

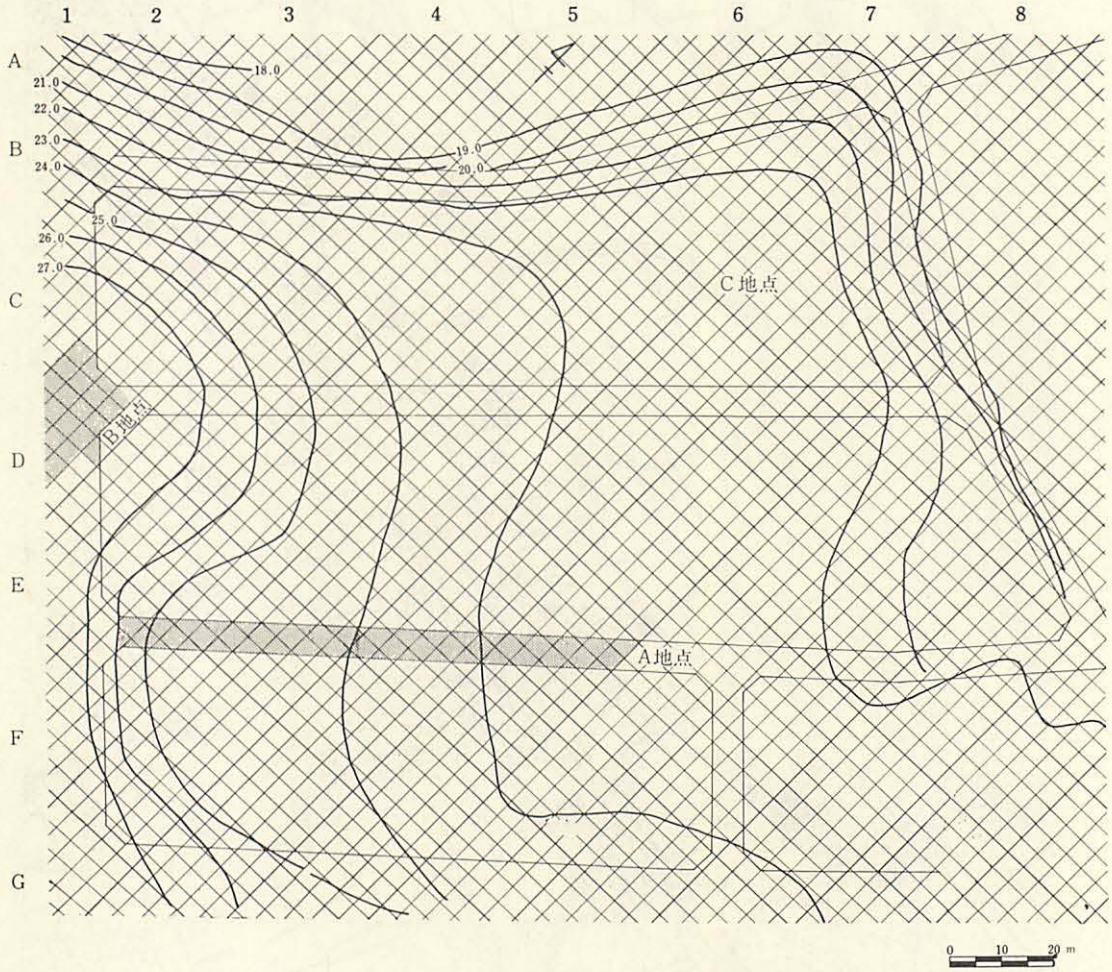
栃木工高校、石橋高校、足工大附属高校、古河第三高校、以上の大学生、高校生の協力を得た。

8　遺物整理参加者

鈴木敏中、山本茂樹、小林照教、長野康敏、岡屋英治、森田久雄



第1図　遺跡付近の地図



第2図　遺跡付近の地形図

遺跡番号	所在地	遺跡名	現状	立地	種別	備考
1	千駄塚・浅間東373	千駄塚	神社境内	台地	古墳	円墳、県指定
2	千駄塚	栗林古墳群	栗林	段丘	古墳群	円墳30基
3	間々田6丁目	間々田中学校東	畑	〃	集落跡	
4	〃	八幡塚	松林	〃	古墳	円墳
5	〃	間々田小裏	畑	〃	集落跡	
6	間々田2丁目	間々田小前	〃	〃	〃	
7	〃	不動原北A	〃	〃	集落跡	
8	〃	不動原北B	〃	〃	集落跡	
9	〃	間々田北	〃	台地	集落跡	
10	乙女	不動原南	〃	〃	集落跡	第一次調査により、縄文中期、古墳時代前期の集落跡が確認されている。
11	〃	不動原	林	段丘	窯跡	
13	間々田	間々田駅南	畑	平地	集落跡	
14	乙女町谷	八幡宮北	〃	段丘	集落跡	
15	〃	神明神社	境内	〃	古墳	円墳
16	乙女慢1140の3	びわ塚	林	〃	〃	〃
17	南飯田	南飯田北	畑	台地	集落跡	
18	〃	南飯田南	〃	〃	〃	

第 1 表

第1節　周辺の遺跡と立地

乙女不動原遺跡は、小山市大字乙女1417番地外17筆に所在し、栃木県遺跡地図366として登録されている。（註1）不動原遺跡を旧地名亀田と呼ばれており、古くから瓦が出土する事で知られていた。（註2）地元の人々は、不動原遺跡を公坊屋敷という名称で呼んでいる。小山市中心を南流する思川は、宇都宮市を貫流する姿川、壬生町を貫流する黒川、栃木市を貫流する巴波川といった、いくつかの河川が合流して利根川へと注いでいる。本遺跡は、東北本線間々田駅から南東0.6㎞に位置し、思川河岸西方0.7㎞の思川河岸段丘上の北東へ張り出す舌状台地の中腹から先端にかけて位置している。舌状台地の長さは200m、巾150m であり、標高27mで現水田面との比高差は11mである。発掘調査前は、標高24～25m付近に草木がおい茂っていた。台地の北西斜面は急斜面であり、梨畑・梅畑があり、南東斜面は、比較的緩斜面であり現

在畑地である。周辺の遺跡としては本遺跡から北東3㎞に県指定の千駄塚古墳・北東4㎞に粟宮古墳群・北北東2.5㎞には、栗林古墳群、南西2㎞にびわ塚古墳といった多くの古墳・古墳群が存在する。

古　墳　種　別　表

町村名	円　墳	前方後円	形状不明	方　墳	柄鏡式	上円下方	計
間々田	173	7					180
桑	59	4					63
大　谷	43		1				44
絹	33	2	1			1	37
小　山	23	1	3				27
豊　田	19	4					23
穂　積	12	3			1		16
中	16						16
寒　川	6	2					8
生　井		2					2

第　2　表

紀元二千六百年記念古墳調査（註3）は、昭和16年以前に調査を行った古墳分布図である。古墳種別表を調べると（　第2表　）間々田地区は、円墳173基、前方後円墳7基・計180基となっている。他地区と比較してみると最も多くの古墳が存在する事が分かる。小山市では過去数回古墳の発掘調査を行っているが（註4）、集落跡の発掘調査は　第一次不動原遺跡の縄文中期、古墳前期（五領式）を主体とした集落跡の調査 及び 今回の第二次不動原亀田遺跡の弥生後期、古墳前期～後期（五領～鬼高式）を主体とした集落跡調査だけであり、小山市内の集落跡の把握、古墳と集落の関係等を今後の調査によって解明していきたい。

註1　栃木県教育委員会編　「栃木県遺跡地図」　1975年

註2　坂詰秀一「栃木県小山市不動原瓦窯跡」　日本考古学年報17　1963年

註3　下都賀郡教育会編　「紀元二千六百年記念古墳調査」　1941年

註4　大和久震平「桑57号墳発掘調査報告書」　小山市教育委員会　1972年

（三沢）

第２節　調査の経過

１　発掘調査に至る経過

乙女不動原亀田遺跡は、小山市乙女土地区画整理事業の昭和５１年度道路造成工事区域内にあるため、小山市教育委員会は、市文化財専門委員会と土地区画整理関係各位と共に現地調査を行った。その結果遺物散布状態から、奈良～平安時代にかけての集落跡であると判断された。遺跡の保存等について、県教育委員会文化課、市教育委員会及び県都市計画課、市区画整理課、乙女土地区画整理組合等関係者によって協議を行ってきたが、道路造成工事の計画変更は困難であり、借換地も済んでいる状態のため記録保存の方法によって処置することになったので、市教育委員会が組合からの委託を受けて緊急発掘調査を行うことになった。期間は、昭和５１年８月２日から８月３１日の１カ月間とし、調査対象区画は、昭和５１年度道路造成工事部分を行うことになった。調査の目的は、集落跡及び遺物を主体とした当時の歴史的背景を明らかにすると共にその記録の完全な保存を図る。　更に市史編さん等学術資料に供するものである。　　（稲葉）

２　発掘調査方法

乙女地区は、近い将来住宅地になる事から立正大学坂詰秀一助教授及び県文化課と話し合った結果、乙女地区全体にグリッドを設定して、各ブロックに区分して発掘調査を行うことになった。今回の調査は、道路敷地内の発掘調査であったが、以上のことからして乙女不動原遺跡全体に南北・東西に２０ｍの基準杭を設定し、その基準杭を一区とし、その中を４ｍ単位の方眼を区画した。グリッド番号は、縦軸をアルファベット、横軸をアラビア数字で記すことにした。４ｍ単位の方眼はＡ図のように左から１～２５までのアラビア数字を用い、グリッド番号はＡ－１－１という方式を用いた。今回の調査は、原則として道路敷地内であったが、土を寄せる必要上道路敷地内左右２ｍ多くの幅を取ることとし、遺構が道路敷地外に延びても拡張しないことになっていたが、遺構の性格を知る必要上、２号遺構、４号遺構は、道路敷地以外の拡張を行った。

Ａ図

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

３発掘調査日誌

8月2日～5日　草刈りの後、南北を主軸に4m×4mのグリッドを遺跡全体に設定する。グリッド番号は、縦軸をアルファベットとし横軸をアラビア数字という方式を用いた。

8月5日～8日　A地区遺構確認調査を行う。本遺跡の土層堆積状態を知るため、B－9－9グリッドの試掘を行った結果、表土25cm、Ⅱ層黒色土20cm、Ⅲ層ローム漸移層、ローム層であるが軟かいローム層20cmの下層に黒色バンド層が30cm、そして堅いローム層と続く。遺物はⅡ層の黒色土に多い。A地区で確認された遺構は、溝状遺構と性格不明遺構1、E－6－9グリッドで表土下30cmで粘土ブロックが見られた。

8月8日～14日　C地区遺構確認調査を行うC地区は、窯跡の範囲および工房跡を確認するため1m幅のL字型で確認調査を行った。確認された遺構は、住居跡と推定されるもの約15軒、溝と思われるもの約5本、他に土壙、ピット等である。推定4m×4mの方形の粘土の範囲が2カ所で確認された。出土遺物として縄文土器片、弥生土器片、土師片、土師器で復元可能な土器は4個体、（坩、甕等）である。又、瓦、古銭等が出土している。

8月14日～18日　B地区で遺構確認調査を行う。確認された遺構は、住居跡2軒、溝状遺構1、性格不明遺構2である。出土遺物は、縄文後期土器片、弥生後期土器片、土師器片（五領～鬼高式）、板碑等である。8月16日C地区遺構平面、土層断面を実測する。8月18日A地区で確認された遺構の写真撮影を行う。

8月17日～18日　A地区で確認された遺構の拡張を行った結果、新たに住居跡、土壙・性格不明遺構が確認された。

8月19日　A地区で確認された第1号土壙の土層断面および平面を縮尺20分の1で実測する。第1号土壙は、縄文時代の袋状土壙であることを確認する。第1号溝状遺構の土層断面を実測する。第2号遺構の調査を行う。

8月20日　第3・4号遺構の平面プランを確認する。第1号溝状遺構の平面形を実測する。

8月21日　第5号遺構の平面プランを確認する。午後からC地区の埋めもどしを行う。約1/4

8月23日　第3号遺構の土層断面、平面形を実測する。

8月24日　第4号遺構の土層断面を実測する。その結果土層の堆積状態や平面プランを見ると井戸と思われる。深さは、確認面から約2m50cmである。午後からC地区埋めもどしを行う。約1/3

8月25日　C地区埋めもどしを終了する。

8月26日　雨のため作業中止、A、B、C各地点の土器洗い、注記を行う。

8月27日　第1号土壙、第1号溝状遺構、第3号遺構の写真撮影を行う。2号住居跡を確認する。第5D号土壙の土層断面、平面形の実測と写真撮影を行う。

8月28日　2号住居跡の床面を調査し、その結果五領期の完形土器5個体を確認する。

8月29日　2号住居跡土層断面を実測する。第5E号土壙土層断面を実測する。第4号遺構の

平面を実測する。

8月30日　2号住居跡床面を精査し主柱穴および支柱穴を確認する。第5ABC号土壙の土層断面・平面を実測する。第2号遺構土層断面の実測を行う。

8月31日　2号住居跡平面形の実測を行う。

9月　1　日　第2号遺構平面形の実測を行う。第5F号土壙の土層断面・平面形の実測を行う。1号住居跡床面精査し主柱穴・支柱穴・炉を確認する。

9月2日　1号住居跡平面形の実測を行う。

粘土ブロックの出土しているグリッドの土層断面を実測し、粘土の範囲を確認する。

1・2号住居跡、第2号遺構、第4号遺構、第5号遺構の写真撮影を行う。A地区で確認された遺構の全体図50分の1で実測する。

9月3日　雨のため作業中止、土器洗い、注記を行う。

9月4～6日　B地点遺構平面確認を行った結果住居跡3軒が確認された。

9月7日　3号住居跡、4号住居跡床面調査、3号住居跡は攪乱が激しい。

9月8日　5号住居跡床面調査、3・4号住居跡土層断面の実測を行う。

9月9日　雨のため作業中止、図面整理を行う。

9月10日　3・4号住居跡の床面精査。その結果主柱穴、支柱穴、炉を確認する。5号住居跡土層断面の実測を行う。

9月11日　3・4号住居跡の平面形の実測を行う。5号住居跡の床面精査。その結果柱穴を確認する。カマドは確認できなかった。

9月13日　5号住居跡平面形の実測を行う。3・4・5号住居跡の写真撮影、B地区で確認された遺構を全体図50分の1で実測する。　（三沢）

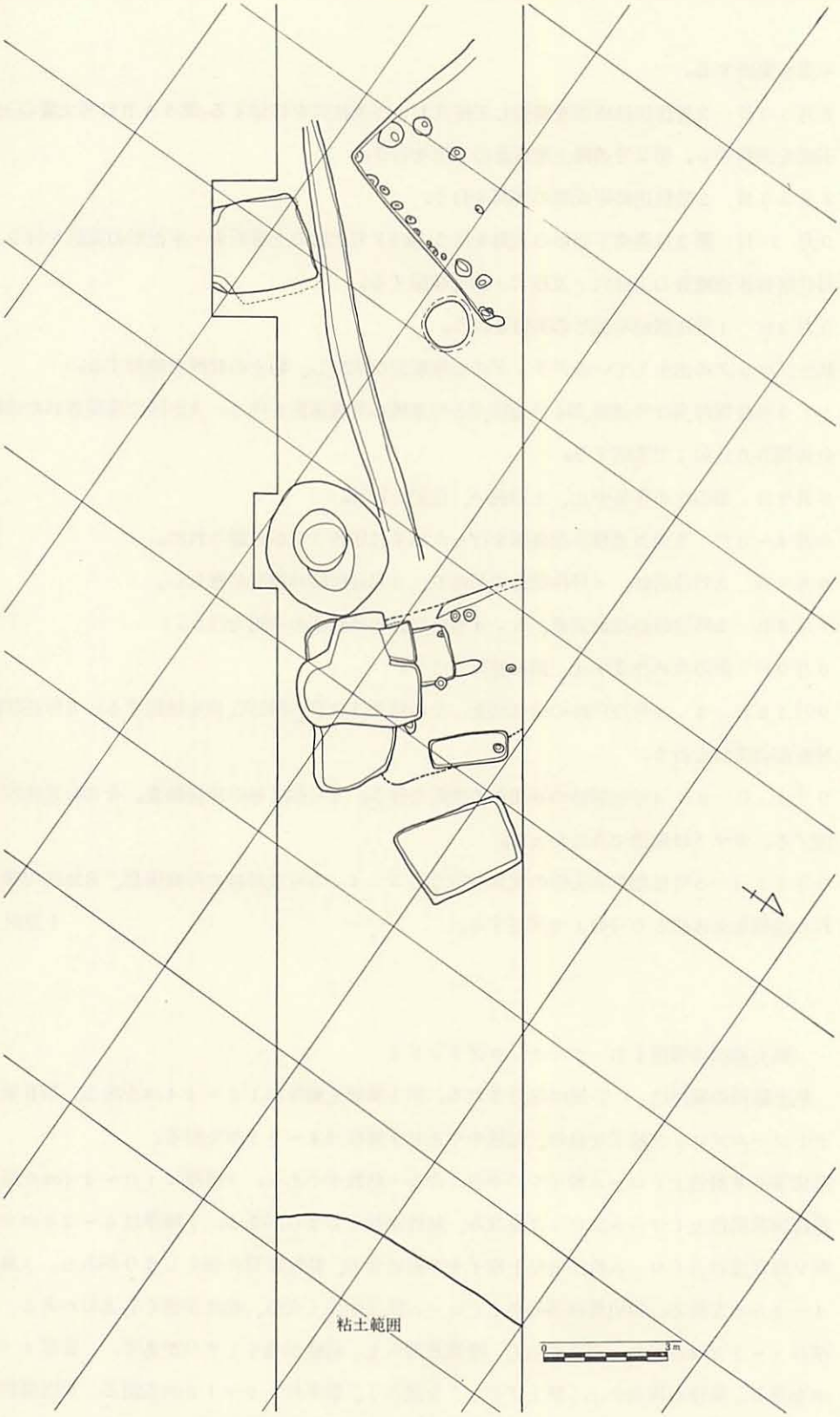
粘土範囲の層序（D－7－5・9グリッド）

粘土範囲の層序は　10　層に区分される。第Ⅰ層表土層厚は16～44㎝を測る。第Ⅱ層黒色土（ロームブロック粒子を含み、粘性ややあり）層厚は4～39㎝を測る。

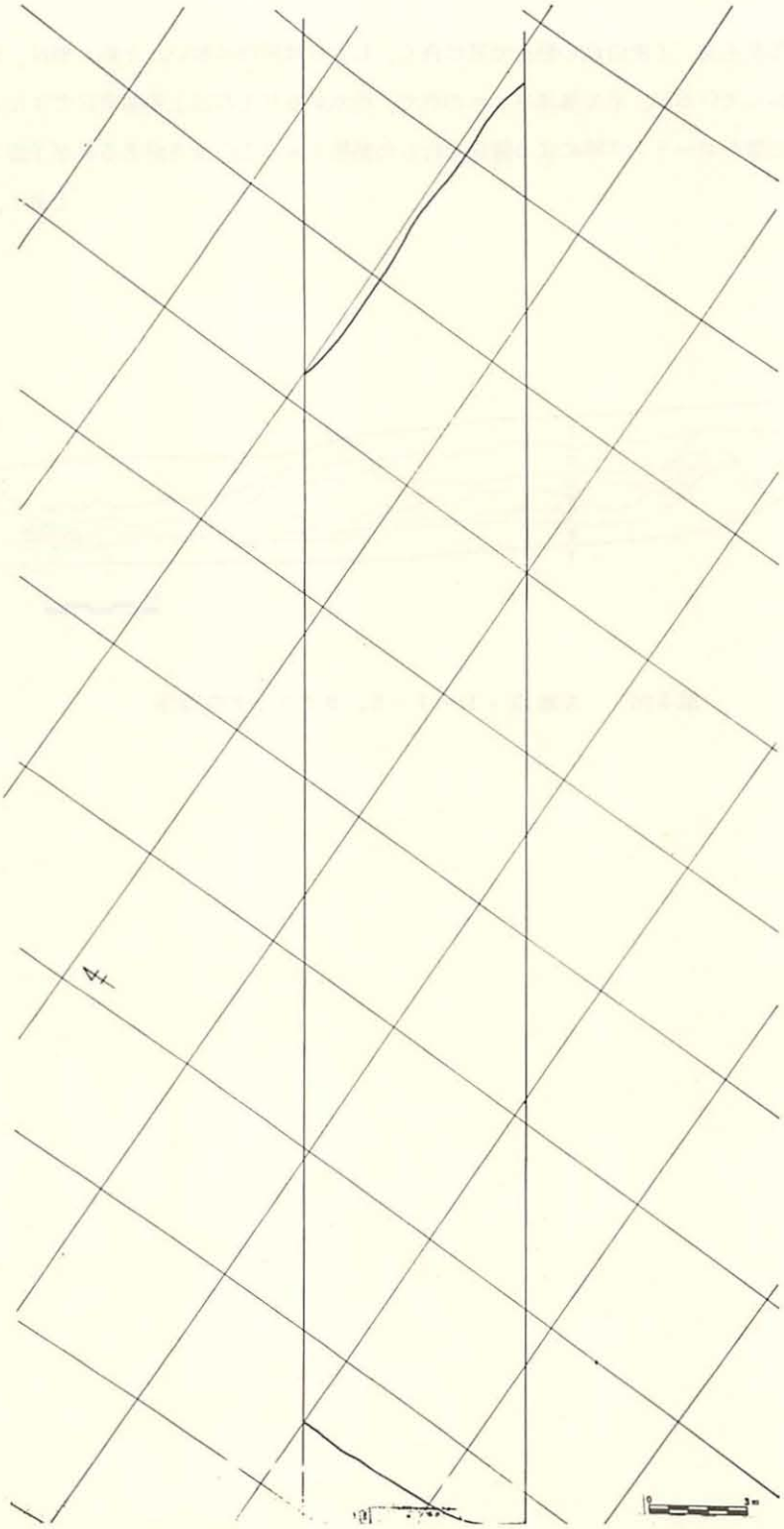
第Ⅲ層暗茶褐色土（ローム粒子をやや多く含み・粘性ややあり。）層厚は10～44㎝を測る。

第Ⅳ層黒褐色土（ロームブロックを含み、粘性が強くしまりがある。）層厚は4～26㎝を測る。

第Ⅴ層黄褐色土（ローム粒子と粘土粒子を多量に含み、粘性非常に強くしまりがある。）層厚は4～20㎝を測る。第Ⅵ層暗茶褐色土（ローム粒子を多く含み、粘性が強くしまりがある。）層厚は4～13㎝を測る。第Ⅶ層粘土　暗褐色混入土、粘性が強くしまりがある。　層厚4～18㎝を測る。第Ⅷ層黒褐色土（粘土ブロックを混入）、層厚は10～18㎝を測る。第Ⅸ層粘土層（黄褐色の粘土で質は悪くパサパサしている。粘性はあまりない。）層厚は16～52㎝を測



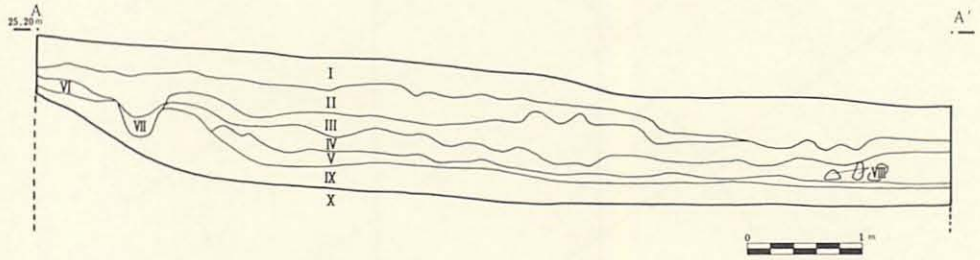
第3図　A地点遺跡分布図



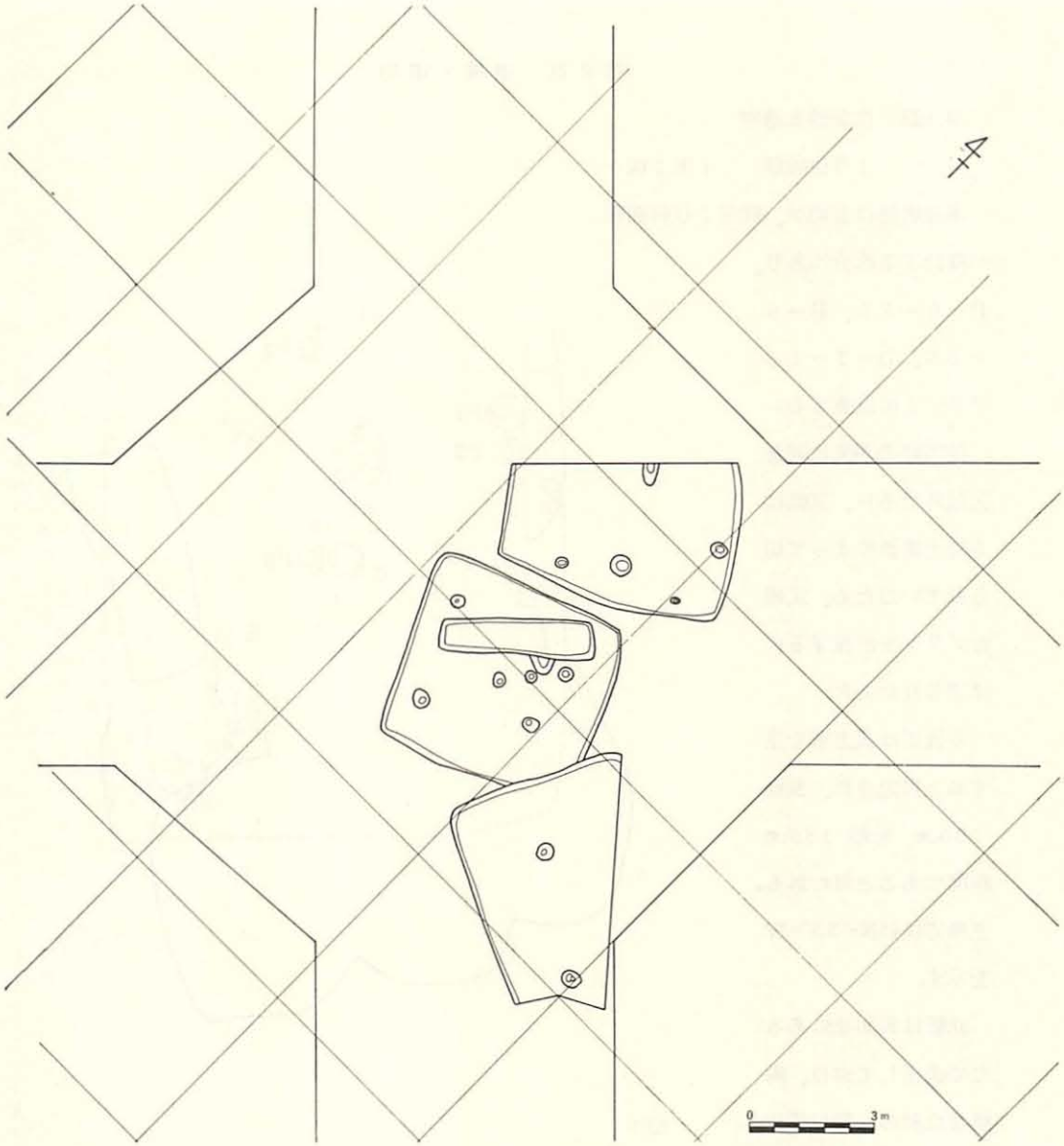
第4図　　A地点粘土範囲

る。　第X層粘土層　（灰白色の粘土で質は良く、しまりは非常に強い。）粘土層は、東西にゆるやかに傾斜しているが、第X層深さ１ｍの所で、浄水がありそれ以上の調査はできなかった。ただし粘土の層をボーリング棒による探査を行った結果１ｍ以上の深さがある事が予想される。

（金子、森田）



第５図　　Ａ地点・Ｄ－７－５，９グリッドの層序



第6図　　B地点遺構分布図

第２章　遺構・遺物

第１節　住居跡と遺物

１号住居跡　（第７図）

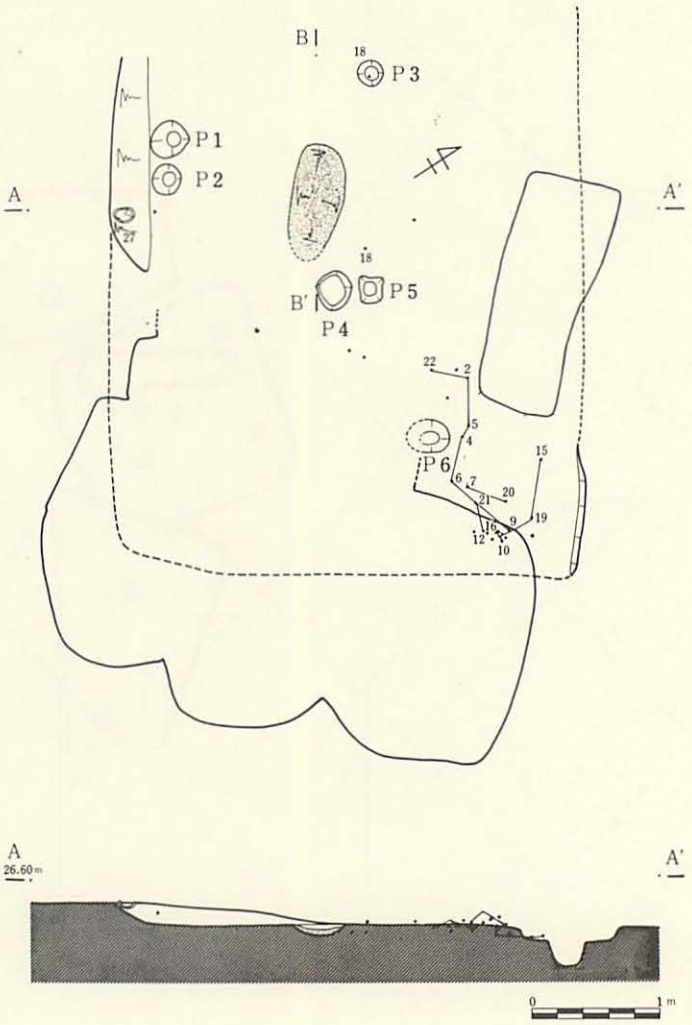
本住居跡は台地が、肩部より斜面部へ移行する部分にあり、Ｄ－６－２０、Ｄ－６－２５、Ｄ－７－１６グリッドに位置する。

住居跡の西側は調査区域外であり、東側は５号土壙群によって切られているため、正確なプランを把握するには至らなかった。

平面形は長方形を呈すると推定され、長軸４５０cm、短軸３８０cm程度であると思われる。主軸方位はN－33°－Wを示す。

北壁は斜面部にあるため流出しており、南壁と北壁の一部が確認されたにすぎない。

壁は緩やかに立ち上がり、壁高は南壁で14cm、北壁で８cmである。



第７図　　１号住居跡出土遺物状態及び実測図

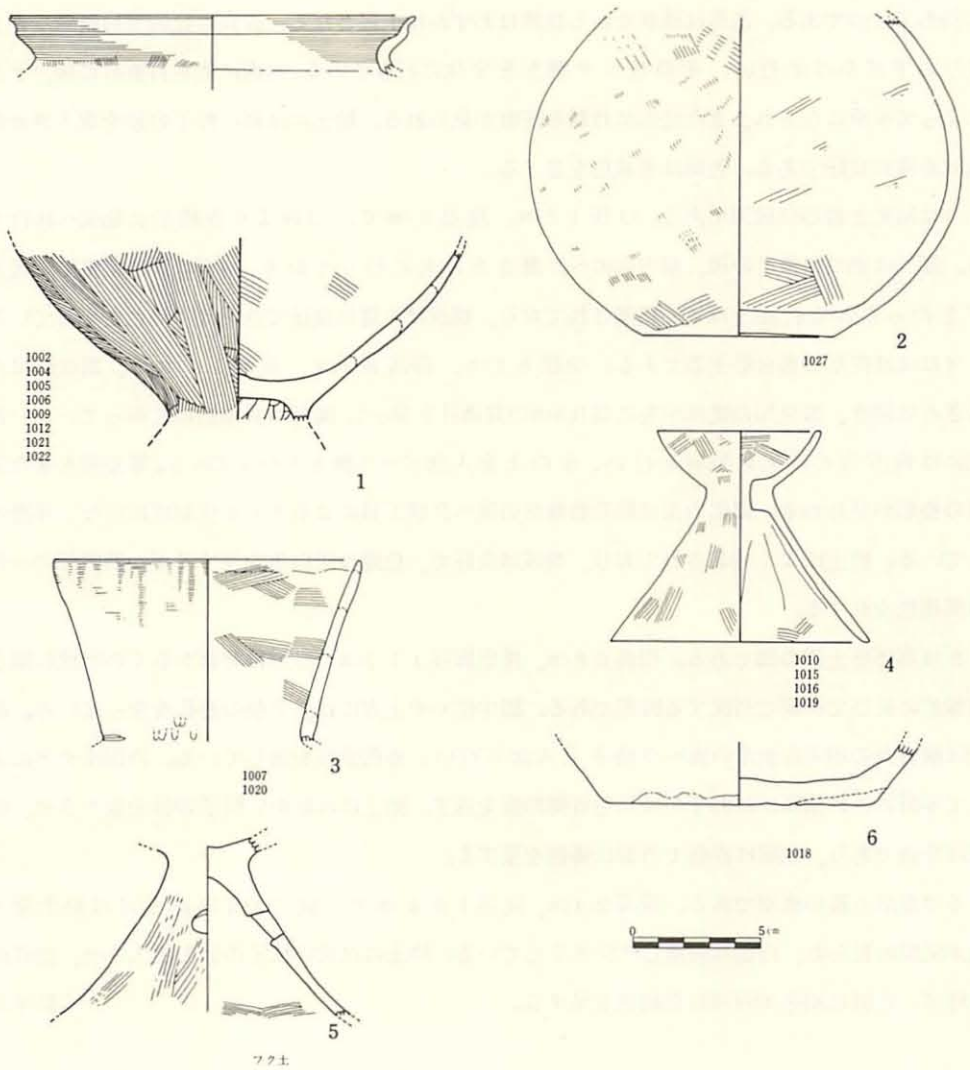
床面は平坦で堅く踏み固められているが、地形に沿って６cmほど傾斜している。

柱穴は６個検出され、主柱穴と思われるものは、その深さおよび位置から考えてP_1とP_6であり径２.６～３０cm、深さ５０～６２cmを測る。

他のピットは浅く、方形プランを持つものがある事から考えると支柱穴、もしくは後世のピットの可能性もあろう。

炉は東寄りに位置し、長楕円形を呈する地床炉である。炉の東端を5－E土壙に切られているが、長軸180cm、短軸75cm、深さ6cm で焼土は炉全体に見られ、厚さ3cmほどである。

覆土は住居跡が傾斜地にあるため流出しており、暗褐色土Ⅰ層が認められたのみである。遺物は中央から東側にかけて多く分布している。東側の床面にはおしつぶされた状態で台付甕、器台形土器が検出され、南壁に貼りついた状態で壺形土器が出土している。



第8図　　1号住居跡出土土器実測図

1　住居跡出土遺物　（第８図１～６）

１は同一個体で、台付甕の口縁部と脚部を欠損する胴下半部である。口縁部は口径１６㎝、現高2.2㎝で口縁はS字状を呈し、頸部はくの字状にくびれて肩部へと移行する。器面には内外共にナデが行われ、頸部外面に刷毛目痕がわずかに残っている。胴部下半部は径１７㎝、現高6.5㎝で強い張りを持つ胴部からゆるやかに脚へと続く。脚との接合部分の内面はヘラ状工具によって整形される。胎土には荒い粒子の砂を混入し、焼成は良好で、色調は褐色、内面は黒褐色を呈する。

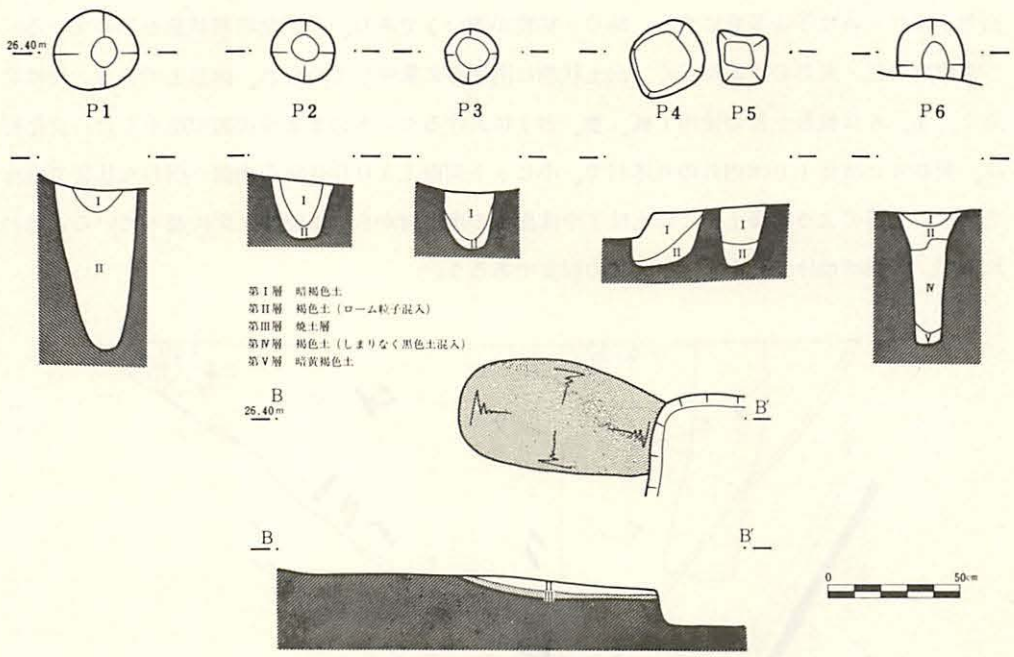
２は壺形土器で口縁部から頸部までを欠損する。現高１２㎝、底径7.4㎝で最大径を胴部中央に持ち7.4㎝である。器形は球状をなし底部はわずかに上底となる。器面には刷毛目整形を左上より右下にかけて行い、その後ヘラ磨きを全体に行っている。内面は刷毛目整形の後、ナデによって平滑になされ、また底部には籾の圧痕が見られる。胎土には細い粒子の砂を混入させ焼成は非常に良好である。色調は赤褐色を呈する。

３は坩形土器の口縁部である。口径１２㎝、現高９㎝で、口縁より直線的に頸部へ移行する。器面は刷毛目整形の後、縦方向にヘラ磨きを入念に行っており、内面は刷毛目整形の後ナデを行っている。胎土はよく精選されており、焼成は非常に良好で色調は明褐色を呈している。

４はほぼ完形の器台形土器である。受径6.4㎝、器高8.2㎝、底形１０㎝で、器受部は内湾ぎみに開き、器受部の底部中央に径0.8㎝の貫通孔を穿って、脚部は直線的に広がっている。器面には縦方向に刷毛目整形を行い、その上を入念にヘラ磨きを行っている。器受部もまた同様の整形が見られる。脚部内面は刷毛目整形の後ヘラ状工具によるナデを放射状に行ない平滑にしている。胎土はよく精選されており、焼成は良好で、色調は灰白色を呈するが、器受部の一部は黒褐色を有する。

５は高坏形土器の脚である。現高6.8㎝、推定脚径１１.２㎝で器形は坏部からくの字状に開き、直線的に延びて裾部で外反する脚部である。脚中位やや上方には、２個の透孔を穿っている。器面は縦方向の刷毛目整形の後ヘラ磨きを入念に行い、赤色塗彩を施している。内面はナデによって平滑にされ裾部にはわずかに刷毛目整形痕を残す。胎土には細かい粒子の砂を混入させ、焼成は普通であり、色調は赤色で内面は褐色を呈する。

６は壺形土器の底部である。現高2.4㎝、底径１０.４㎝で、底部および器面には粘土接合痕が明瞭に見られ、内面は剝落しザラザラしている。胎土には荒い粒子の砂を混入させ、焼成は良好で、色調は褐色で内面は黒褐色を呈する。　（鈴木）



第９図　　１号住居跡ｐｉｔ，炉跡，実測図

２号住居跡　（第１０図）

本住居跡は、Ｅ－６－３、７、８グリッドで検出され、台地の緩傾斜面上端に位置する。南壁際は後世の攪乱で切られている。住居跡の平面形は、北西側が調査域外にあるが、南東側の状況から5.3ｍの隅丸方形と推定され、主軸方向はＮ－５°－Ｗである。

本跡は表土下の褐色土を掘り込んで構築され、壁はほぼ垂直な立ち上がりを呈し、壁高は南壁で４０㎝、東壁で２０㎝である。

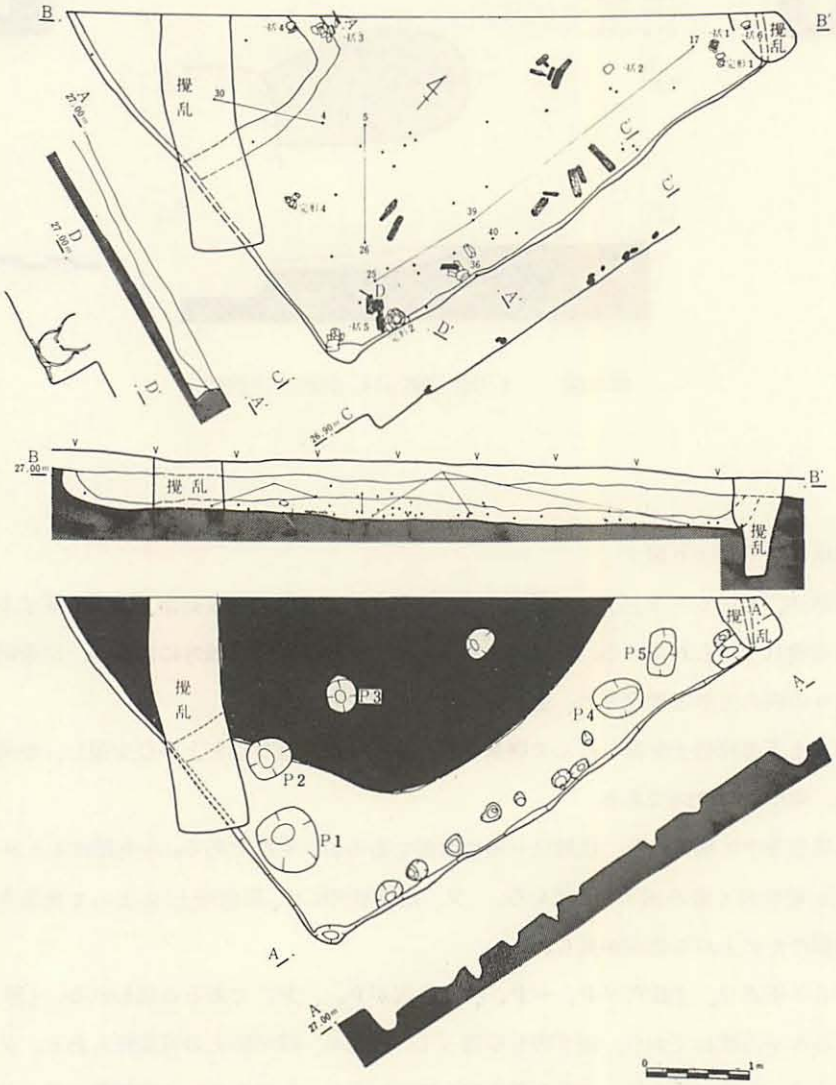
床面は黒色帯中に構築され、状態は一般に軟弱であるが、平坦である。中央部は4.5ｍ×1.9ｍの範囲で比較的良く踏み固められている。　又、南壁中央には、黒色帯土によって構築された、壁際まで緩やかに上がる施設が見られる。

柱穴は６ケ所あり、主柱穴がP_1～P_4、支柱穴がP_5、P_6であると思われる。（第１３図）主柱穴は各々が近接しており、深さ等も似通っているため、建て替えの可能性もある。又、東壁に沿って小ピット列がみられ、これを壁柱穴と想定したが、南壁あるいは未調査の西・北壁で検出されなかったため、疑問が持たれる。状態は径３０㎝～１２㎝、深さ７㎝～１７㎝であり、住居跡の内側を指向した感がある。炉は西北寄りにあるためか、検出されなかった。

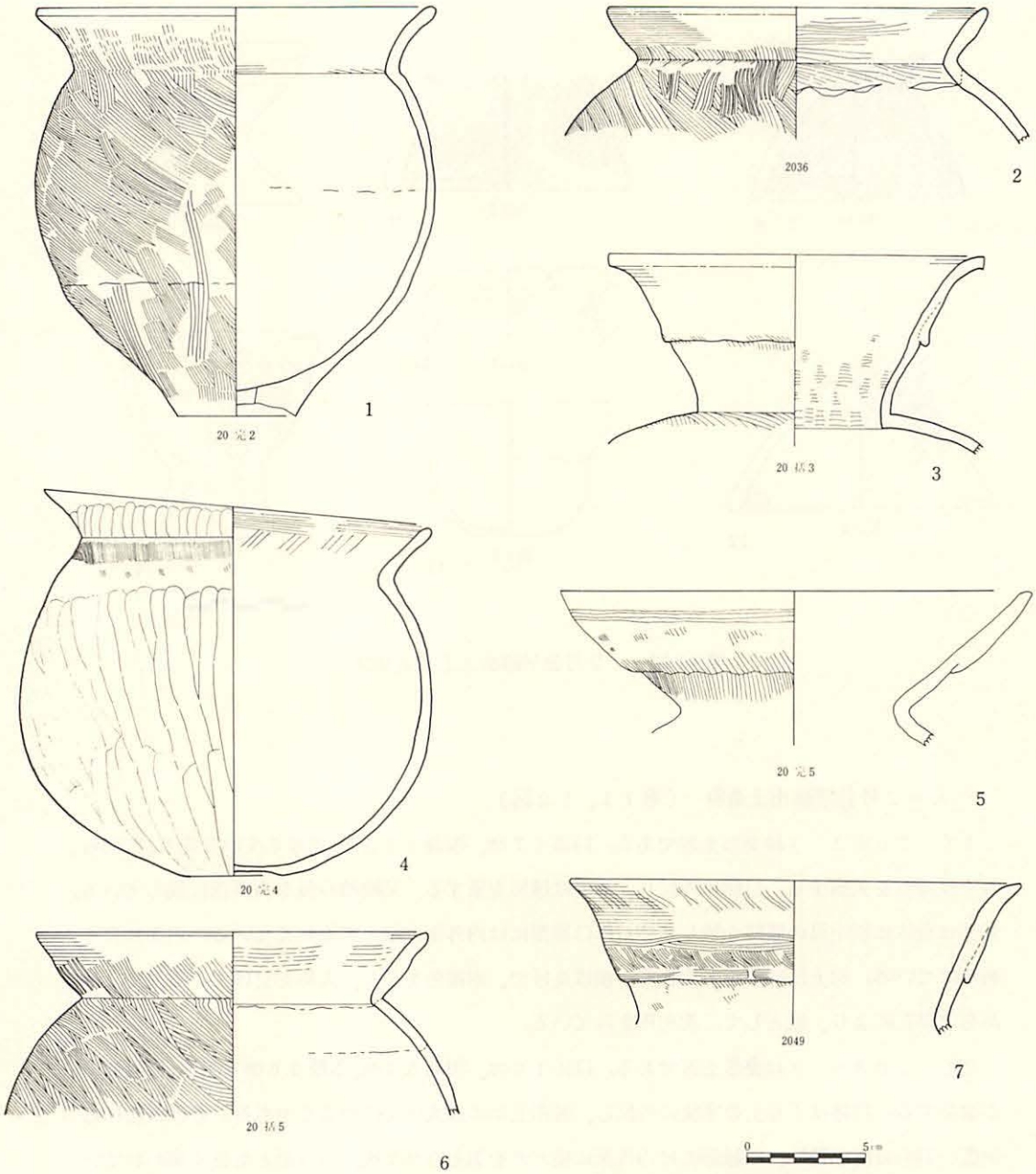
覆土は４層に区分され、第Ⅰ層が表土、第Ⅱ層が黒褐色土（ローム粒子を含み、締り・粘性な

し）、第Ⅲ層が褐色土（ローム粒子、焼土・炭化物を少量含み、締り・粘性有り）、第Ⅳ層が暗褐色土（ローム粒子を多量に含み、締り・粘性が強い）であり、自然な堆積状態を示している。

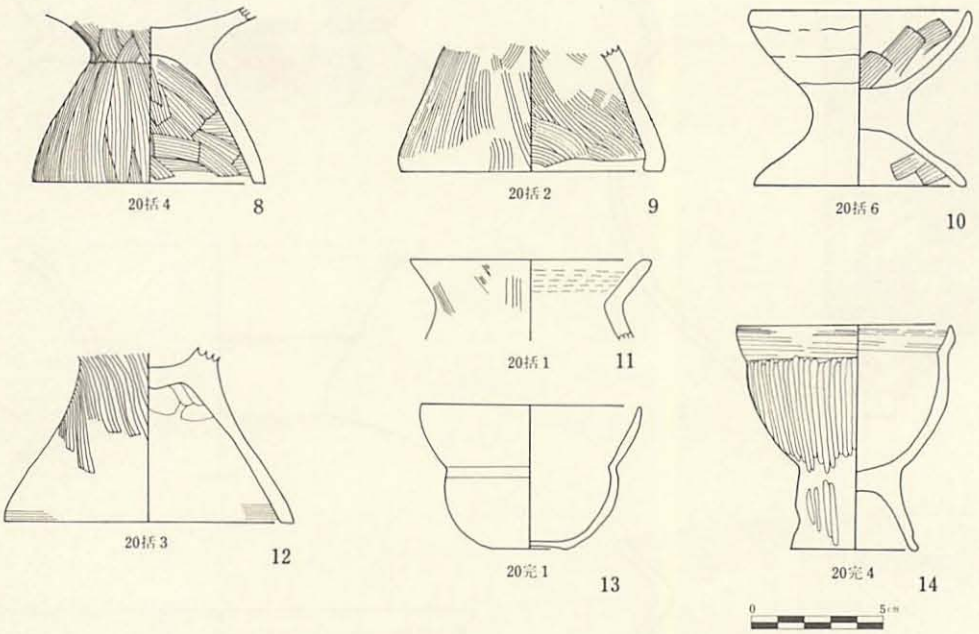
遺物は一括・完形の土器が多く、出土状態は南壁際に集中してみられ、床直上である。特に完形2、4、5は甕形土器の使用（甕、甕、台）におけるセットのままの状態で出土した。炭化材は、長さ40cm径10cm内外の丸木材で、小ピット列直上より住居跡の内側へ倒れた状態で検出された。上述のように覆土中の焼土粒子や床面上の炭化材から、本跡は火災に遭っていると思われるが、床面は焼けておらず、小火災の程度であろう。



第10図　　2号住居跡遺物出土状態及び実測図



第 11 図　　2 号住居跡出土土器実測図



第12図　　2号住居跡出土土器実測図

A－2号住居跡出土遺物　（第11、12図）

1（　20完2　）は甕形土器である。口径17㎝、現高17.2㎝、器厚0.5㎝を測り、底部もしくは脚部を欠損する。口縁は外反し、胴部は球形を呈する。又輪積み痕を内外面に残している。外面は全体に刷毛目の痕跡を残し、さらに口縁部には内外面に横ナデを加えている。内面は良く磨かれている。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好で、赤褐色を呈し、火熱を受けている。又、外からの穿孔により、甑として二次利用されている。

2（　2036　）は甕形土器である。口径16㎝、現高5.4㎝、器厚0.6㎝を測り、口縁部1/3が遺存する。口縁は「く」の字状に外反し、胴部上半に最大径を持つようである。外面は全体に副広い刷毛目痕を残し、口縁部には内外面に横ナデを加えられた後、内外面とも良く磨かれている。胎土は精選され、焼成は良好で、黒褐色を呈する。

3（　20一括3　）は壺形土器であり、口径16㎝、現高8㎝、器厚0.5㎝を測り、口縁部1/2が遺存する。口縁は大きく外反する二重口縁で、胴部は球形を呈すると思われる。外面は頸部以下には刷毛目痕を残し、頸部以上には、刷毛整形の後、ヘラ磨きが加えられている。口唇部には内外面ともに横ナデが為されている。内面は頸部付近に刷毛目痕を残している。胎土は砂質で、焼成良好で淡い赤褐色を呈する。

4（　２０完４　）は甕形土器で、口径１６.５㎝、器高５㎝、器厚０.５㎝を測り、完形である。口縁は大きく外反し、胴部は球形を呈し、胴中位に最大径を有し、底部は上げ底を呈する。外面は刷毛整形の後に、縦走のヘラ磨きを加えている。内面は口縁部に刷毛目痕を残している。胎土は砂質で、焼成良好で赤褐色を呈する。又、胴中位以上にはススが付着し、以下は加熱を受けている。

５（　２０完５　）は壺形土器で、口径２０㎝、現高６.５㎝、器厚０.６㎝を測り、口縁部のみ遺存する。口縁は大きく外反する二重口縁である。外面は斜位の刷毛目痕を有し、口唇部には横ナデが加えられ、後、内外面にヘラ磨きが為されている。胎土は砂質で焼成良好、黒褐色を呈する。５は胴部を破損した後、台として二次利用され、加熱を受けている。

６（　２０一括５　）は甕形土器である。口径１６.６㎝、現高７.７㎝、器厚０.５㎝を測り、口縁部１/２を遺存する。口縁は「く」の字状に外反し、内面は輪積み痕を残している。口縁部は内外面とも横ナデを行ない、外面には全面に斜位の刷毛整形を加えている。内面はヘラ磨きを為している。胎土は砂粒が多く、焼成良好、色調は黒褐色を呈する。

７（　２０４９　）は壺形土器で、口径１９.２㎝、現高６.２㎝、器厚０.６㎝を測り、口縁部１／５を残す。二重口縁であり、外面は口唇直下が刷毛整形の後、横ナデを為し、以下は細い斜位の刷毛整形の後、上下を横位の刷毛整形を行ない、内外面にヘラ磨きを加えている。胎土には砂粒が多く、焼成は良好で朱彩を施している。

８（　２０一括４　）は台付甕形土器で、径８.８㎝、現高６.９㎝、器厚０.６㎝を測り、台のみである。整形は内外面に刷毛目痕を有しており、胎土は小砂粒が多く、焼成良好で茶褐色を呈する。

９（　２０一括２　）は台付甕形土器の台部で、径１０㎝、現高４.９㎝、器厚０.６㎝を測る。内外面に刷毛目痕を有し、加熱を受けている。胎土は砂粒が多く、焼成良好で淡い赤褐色を呈する。

１０（　２０一括６　）は小形台付土器である。口径８㎝、器高６.８㎝、器厚０.４㎝を測り、口縁および台の一部を欠損する。口縁は内彎気味に開き、台は急激に開く。外面は粗雑な刷毛整形を行ない、輪積み痕を残している。接合部には指頭によるオサエを加えている。内面には幅の広い刷毛目痕を残しているが、全体的に粗雑な造りである。胎土は砂粒が多く、焼成は不良、淡い黒褐色を呈する。

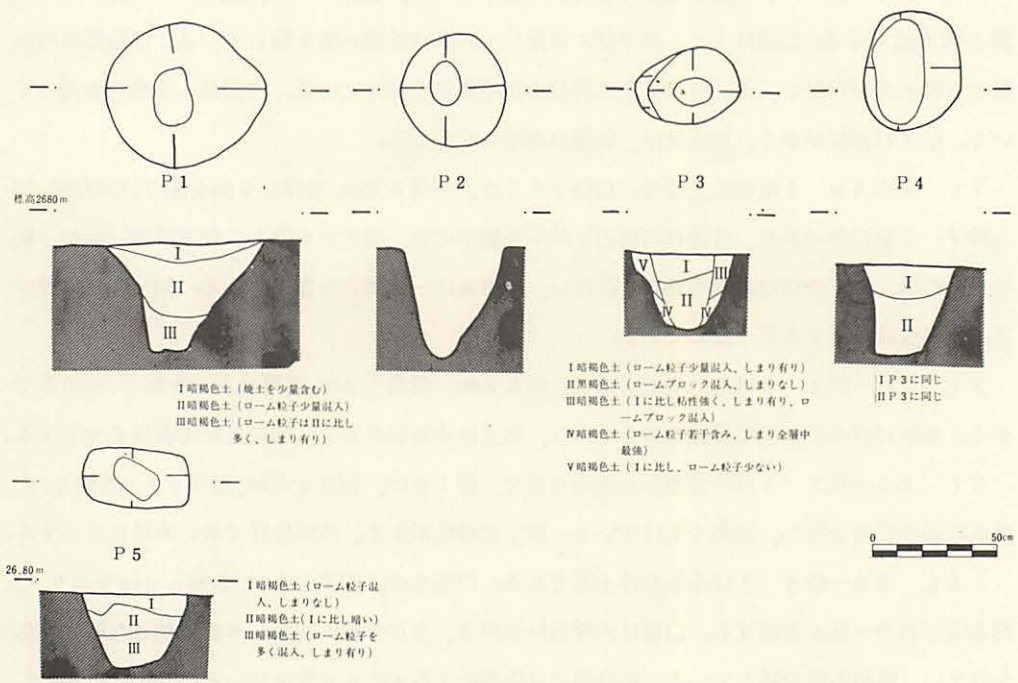
１１（　２０一括１　）は台付甕形土器の台部で１／２　を残す。径１１㎝、現高６.４㎝、器厚０.６㎝を測る。台部上位には細い刷毛目痕を有し、以下にはヘラ磨きを為している。内面には接合部にヘラ削り、以下にはヘラ磨きを行ない、朱彩が施されている。胎土は砂質で、焼成良好で淡い褐色を呈する。

１２（２０一括３　）は小形土器の１つであろう。口径９㎝、現高３.２㎝、器厚０.５㎝で口縁部のみ遺存する。口縁は「く」の字状に外反し、外面は斜位の刷毛目痕を残し、頸部には指頭によるオサエが加えられている。内面は横位の刷毛目痕を明瞭に残し、粗雑な造りである。焼成は不

良で、胎土は砂粒が多く、灰褐色を呈する。

13（２０完１　）は小坩形土器である。口径8.4㎝、器高5.6㎝、器厚0.3㎝を測り、口縁の一部を欠損する。口縁は大きく開き、頸部は沈線を有し、上げ底を呈する。内外面は単念に磨かれている。胎土は砂質で焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。

１４（２０完４　）は小形台付土器である。口径8.1㎝、器高8.7㎝、器厚0.5㎝を測り、口縁、胴部の一部を欠損する。口縁は緩く外反し、張りの弱い胴部に続き、台部下端は緩く開く。口唇直下は内外面とも横ナデが為され、外面は全面に細い刷毛目痕が残されている。胎土は砂質で、焼成良好で淡い褐色を呈する。１４は小形甕形土器とも言うべきであるかもしれないが、実用性が乏しいと思われるため、上述のような名称を用いた。　（小林）



第13図　　2号住居跡pit,実測図

3号住居跡　（第１４図）

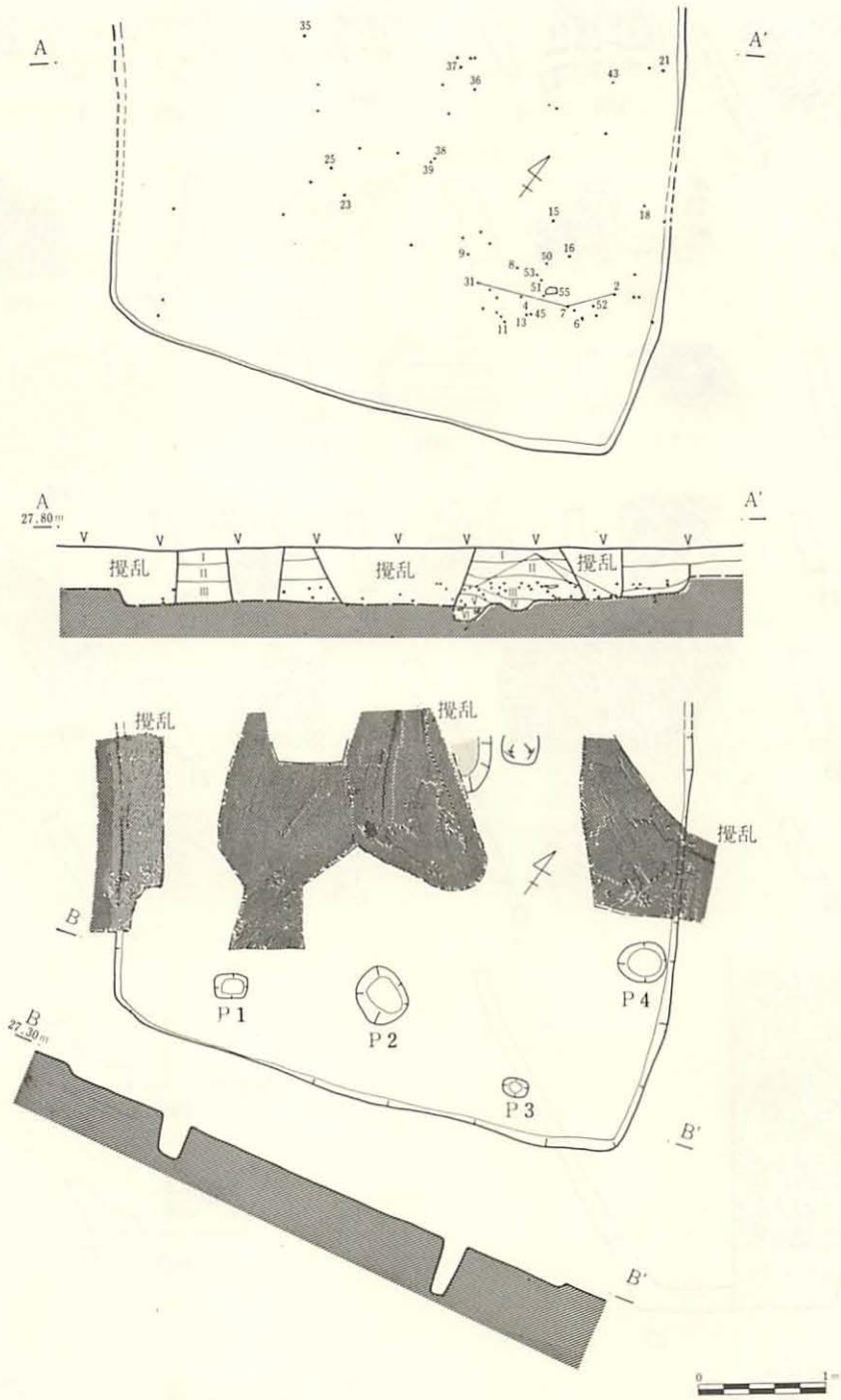
本住居は、台地の中央平坦面Ｃ－４－２３グリッドに位置する。

北西側半分は調査区域外であるため拡張はしなかった。

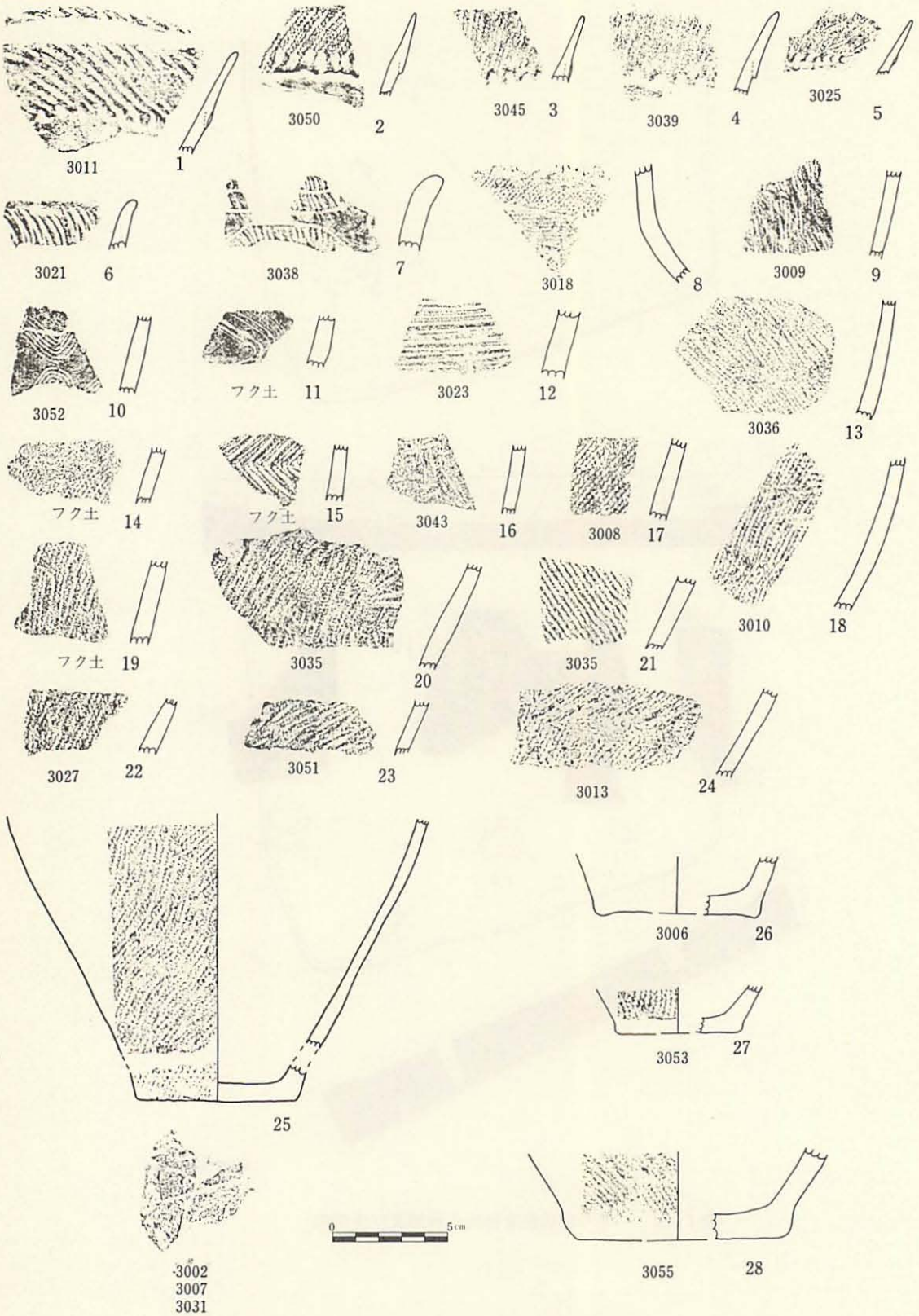
調査時の遺存状態は、大半が攪乱により失われており不良である。

平面形は偶丸胴張方形を呈すると推測され南壁は4.2ｍを測り、壁高は５㎝前後で緩らかに立ち上がる。

床面の状態は中央部付近では、堅く踏み固められた部分が見とめられるが、攪乱が著しい為、



第14図　　3号住居跡遺物出土状態及び実測図



第15図　　3号住居跡出土土器拓影

範囲は確認することができなかった。ピットは4個検出され、南壁寄りに位置している。Ｐ２、Ｐ４は径３２～４３㎝、深さは床面より３８㎝、Ｐ１、Ｐ３は径１５～２６㎝深さは床面より36～３８㎝である。

以上の事より、Ｐ２、Ｐ４は柱穴であり、Ｐ１、Ｐ３は支柱穴と思われる。

炉は床面のやや中央に位置しており、片側は攪乱のため確認する事ができなかったが、遺存状態は極めて良好である。平面形は楕円形と推測され、半径３０㎝で床面からの深さは１５㎝であり焼上の厚さは１０㎝であった。覆土は、5層に区分される。第Ⅱ層茶褐色土（しまり、粘性なし）第Ⅲ層暗褐色土（しまりややあり、粘性無し）第Ⅳ層黒褐色土（炭化物粒子混入）第Ⅴ層黒褐色土（焼土粒子混入）第Ⅵ層焼土である。堆積状態はレンズ状を呈し出土遺物は第Ⅲ層から第Ⅵ層までに含まれ、特に東壁側に多く散布している状態であった。（岡屋、山本）

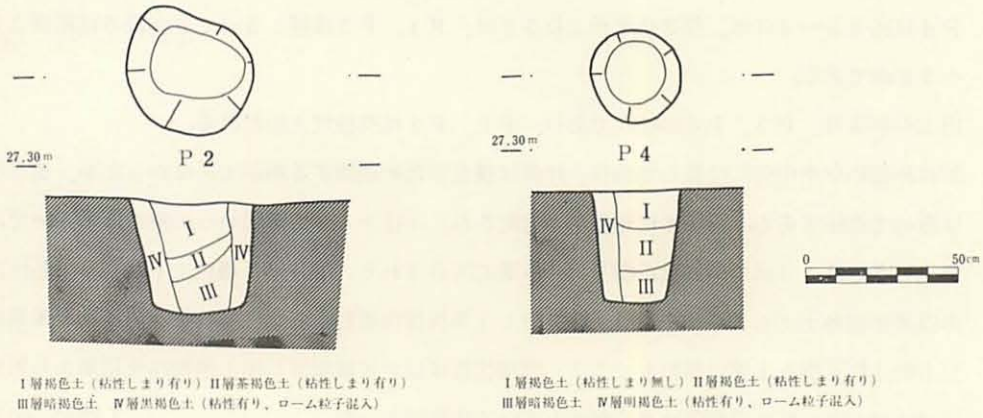
3号住居跡出土遺物（第１５図１～２８）

（１～８）はいずれも口縁部片で(1)は口唇部に縄文が施され、口縁部下端には指圧痕を押捺している。（２～５）は貼り付けによる複合口縁であり、口縁部下端には波状に指圧痕を押捺している。(6)はヘラ状工具によって縦方向に施されている。(7)は櫛状工具による刻目を沈線で区画している。沈線の区画の間には磨消が認められる。(8)は頸部片で指圧痕を押捺し、撚糸文が施されている。（９～２４）はすべて胴部片で(9)は内面にヘラ状工具により波状に整形されている。(10)は６本１組の櫛描文が施されている。(11)は数本単位の櫛状工具による波状文が施されている。(15)は羽状縄文で(12)、(17)を除くすべての器面に撚糸文が施されている。以上の器厚は0.3～0.8㎝である。（２５～２８）は甕形土器底部片で(25)は器面に撚糸文を施し、底部には木葉痕が見られる。

（長野）

番号	器厚(㎜)	胎土の観察	備考	番号	器厚(㎜)	胎土の観察	備考
1	9	胎土石粒を混入、焼成良好、色調黒褐色		15	6	胎土に少砂を混入、焼成良好色調黄褐色	
2	7	胎土石英を混入、焼成不良、色調赤褐色		16	6	胎土に少砂を混入、焼成良好色調黄褐色	
3	8	胎土石英を混入、焼成不良、色調茶褐色		17	8	胎土に雲母を混入、焼成良好色調茶褐色	
4	9	胎土小石粒を混入、焼成不良色調赤褐色		18	7	胎土に石英を混入、焼成良好色調茶褐色	
5	6	胎土小石粒を混入、焼成良好色調黒褐色		19	6	胎土に少砂、雲母を混入、焼成良好、色調茶褐色	
6	9	胎土石英を混入、焼成良好色調外面茶褐色、内面赤褐色		20	8	胎土少砂を混入、焼成良好色調褐色	
7	8	胎土少砂を混入、焼成良好色調褐色		21	7	胎土石英を混入、焼成良好色調茶褐色	
8	7	胎土少砂を混入、焼成良好色調茶褐色		22	7	胎土少砂を混入、焼成良好色調茶褐色	
9	6	胎土小石粒を混入、焼成良好色調赤褐色		23	6	胎土少砂を混入、焼成良好色調黄褐色	
10	7	胎土石英を混入、焼成良好色調茶褐色		24	8	胎土少砂を混入、焼成良好色調茶褐色	
11	7	胎土に石英を混入、焼成良好色調赤褐色		25	6	胎土石粒混入、焼成良好色調茶褐色	
12	10	胎土に少砂を混入、焼成良好色調黄褐色		26	12	胎土少砂混入、焼成良好色調褐色	
13	6	胎土に雲母を混入、焼成良好色調褐色		27	9	胎土少砂を混入、焼成良好色調茶褐色	
14	6	胎土に石英を混入、焼成良好色調茶褐色		28	16	胎土石粒を混入、焼成良好色調赤褐色	

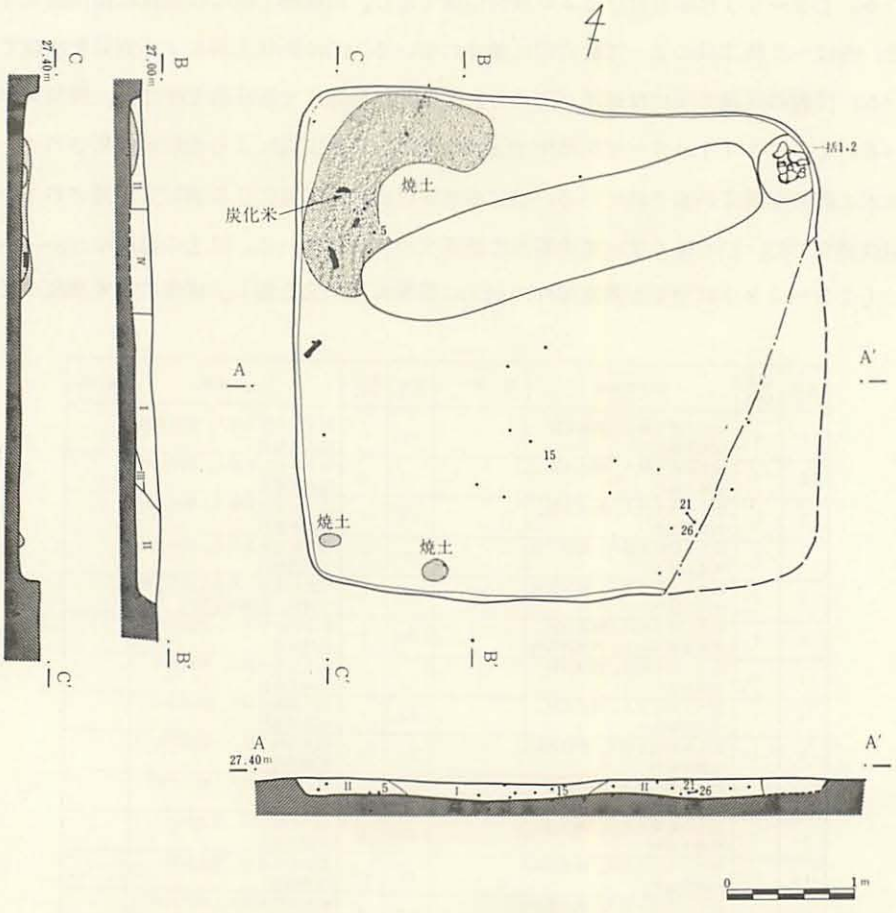
第3表　3号住居跡遺物一覧表



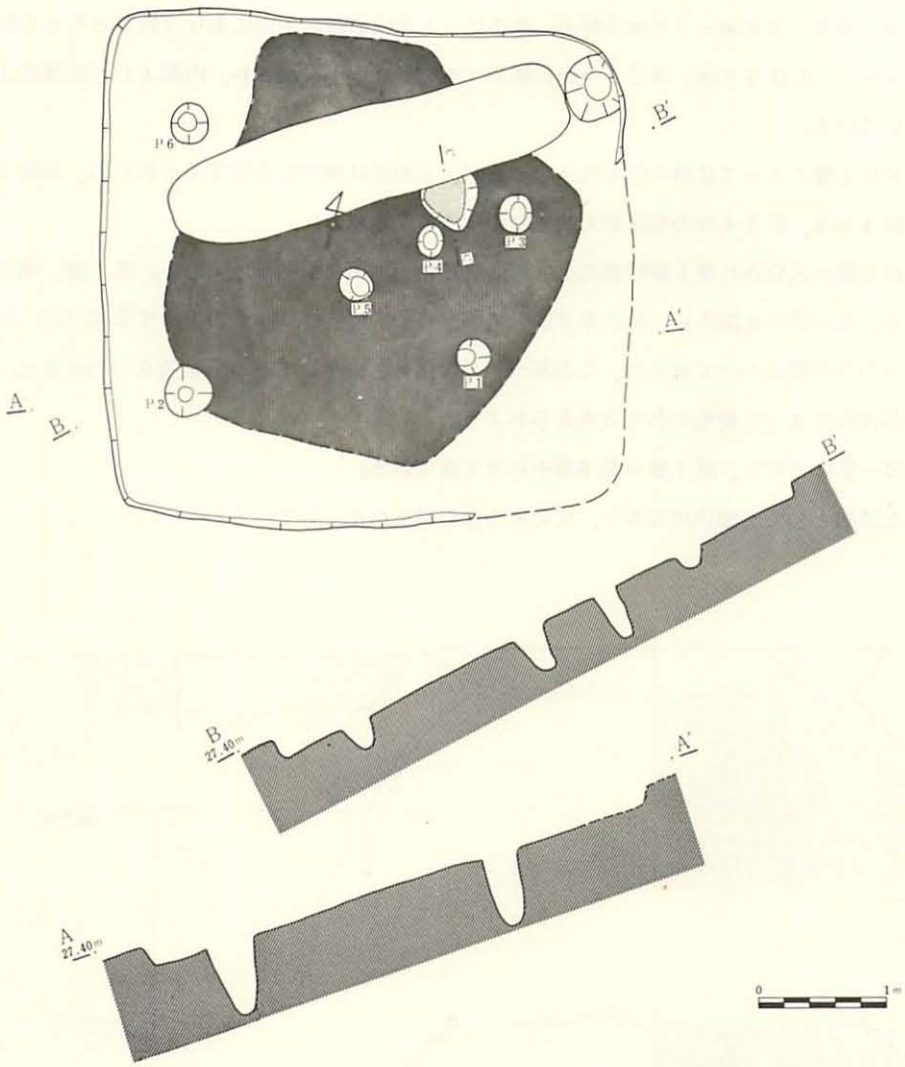
I層褐色土（粘性しまり有り）II層茶褐色土（粘性しまり有り）
III層暗褐色土　IV層黒褐色土（粘性有り、ローム粒子混入）

I層褐色土（粘性しまり無し）II層褐色土（粘性しまり有り）
III層暗褐色土　IV層明褐色土（粘性有り、ローム粒子混入）

第16図　　3号住居跡pit実測図



第17図　　4号住居跡出土遺物状態及び実測図



第18図　　4号住居跡実測図

4号住居跡　（第17図）

本住居跡はC－4－23、C－4－24、D－4－34グリッドにあり、3号住居跡と5号住居跡の間に位置する。住居跡の北東コーナーは5号住居跡に切られている。住居跡の北寄りには6号土壙が切り込んでいる。平面形は隅丸方形を呈し、長軸4.2m、短軸4mを測り、主軸方位はN－73°－Eを示す。

壁は急傾斜を持って立ち上り、壁高は最高南壁で14cm、最底北壁で8cmを測る。床面は平坦で堅く踏み固められており、特に中央部は顕著で、その範囲は3.20m×3mで北壁裾まで延びる

事が注目される。柱穴は6個所検出され、主柱穴はその位置からP_1、P_2、P_3、P_6で径27cm～34cm、深さ　38cm～58cmを測る。他のピットは住居跡の中央にあり支柱穴と考えられる。

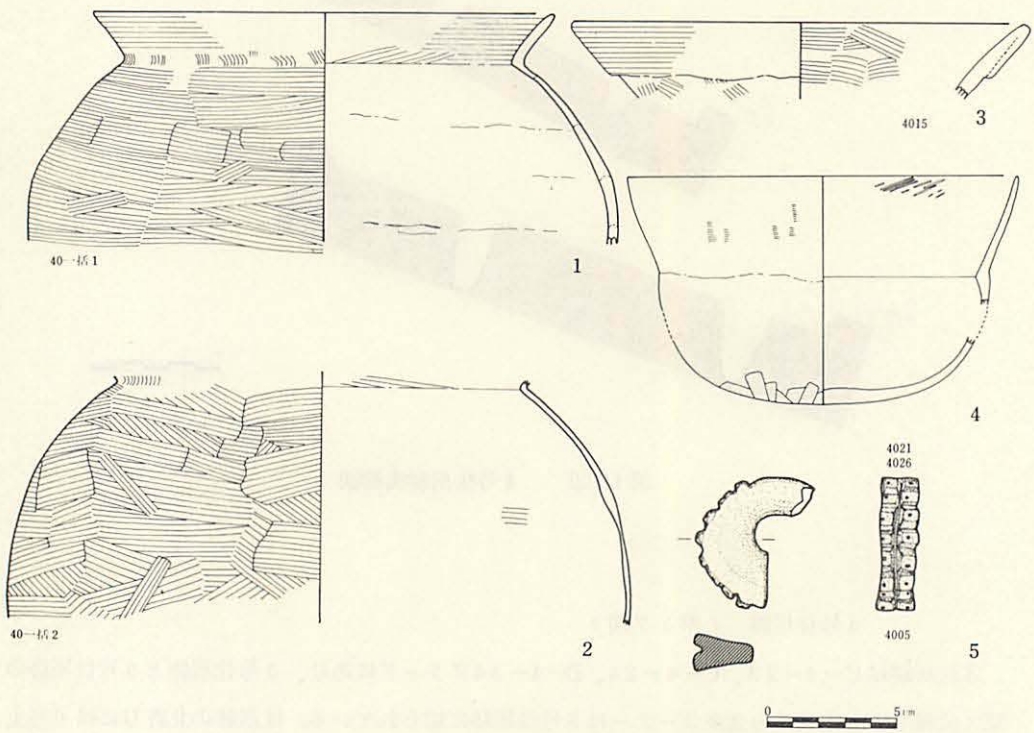
北西コーナーに径50cm、深さ10cmの極めて浅いピットが検出され、内部より台付甕が2個体出土している。

炉は6号土壙によって北側半分を失っているが、平面形は楕円形を呈すると思われ、長軸55cm、短軸48cm、深さ4cmの地床炉で焼土は炉全体に見られる。

覆土は3層に区分され第Ⅰ層暗褐色土、第Ⅱ層褐色土、第Ⅲ層明褐色である。第Ⅰ層、第Ⅱ層、共に焼土、カーボンを混入し、特に第Ⅱ層中で焼土粒子・焼土ブロックの集中する部分が　北西コーナーから西壁にかけて見られ、この部分から炭化材も出土している事を考え合わせると、本住居跡が火災によって廃絶されたと考えられよう。

遺物は一葉に分布し、第Ⅰ層～第Ⅲ層中に全て含まれる。

特殊な遺物として土製玦状耳飾り、炭化米を含む粘土が出土している。



第19図　　4号住居跡出土土器実測図

4号住居跡出土遺物　（第１８図１～５）

１は台付甕で胴下半を欠損する（４０一括１）口径１８㎝、現高９㎝、胴部最大径２３㎝を測る。器形はくの字状にくびれる頸部より強く外反する口縁部を持ち、胴部は球状に張り出している。部中位にその最大径を有する。器面は刷毛目が横走し、頸部では縦位に施される。内面は輪積み痕を明瞭に残すが、ナデによって平滑にされ、口縁も内外面共にナデが行なわれている。胎土には細かい粒子の砂を多量に混入し、焼成は普通で色調は黒褐色を呈する。

２は台付甕の胴部である　（４０一括２）

現高９㎝、頸部の径１６㎝、最大径２４.２㎝を測る。器形は強い球状を呈する。器面は刷毛目整形が施され、横および斜方向に行なわれている。内面は頸部の陵線の上部に刷毛目、胴部は指頭によるナデが行なわれている。胎土には細かい粒子の砂を混入し、焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。

３は壺形土器の口縁である（４０）

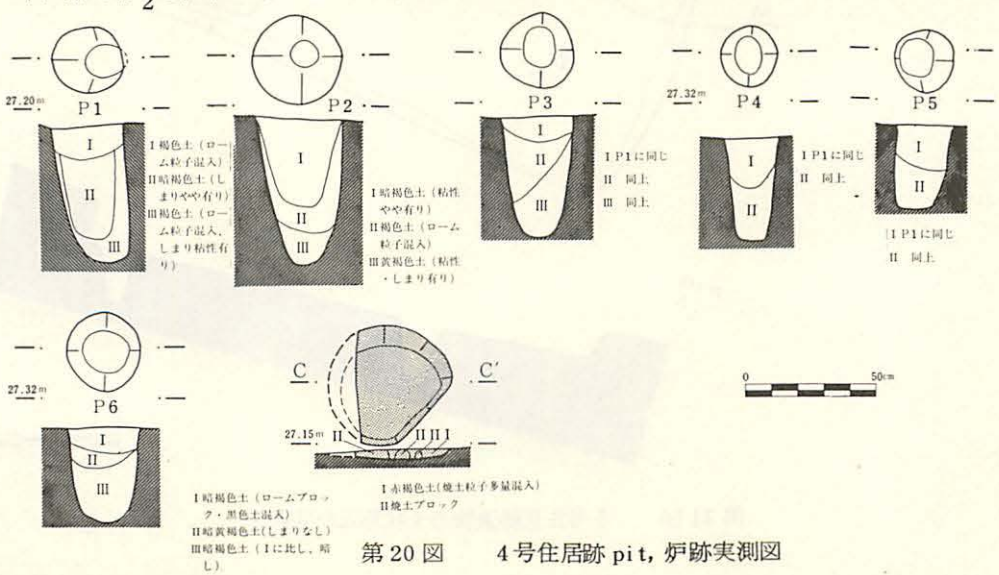
口径１８㎝、現高３㎝を測る。器形は直線的に開き、口縁部は折り返されている。器面には折り返す前に刷毛目を施し、折り返した後にヘラ磨きとナデを行なっている。内面も同様の整形が施され、胎土には細かい粒子の砂を混入し、焼成は非常に良好で、色調は明褐色を呈する。

４は坩形土器で胴中位を欠損している（４０）

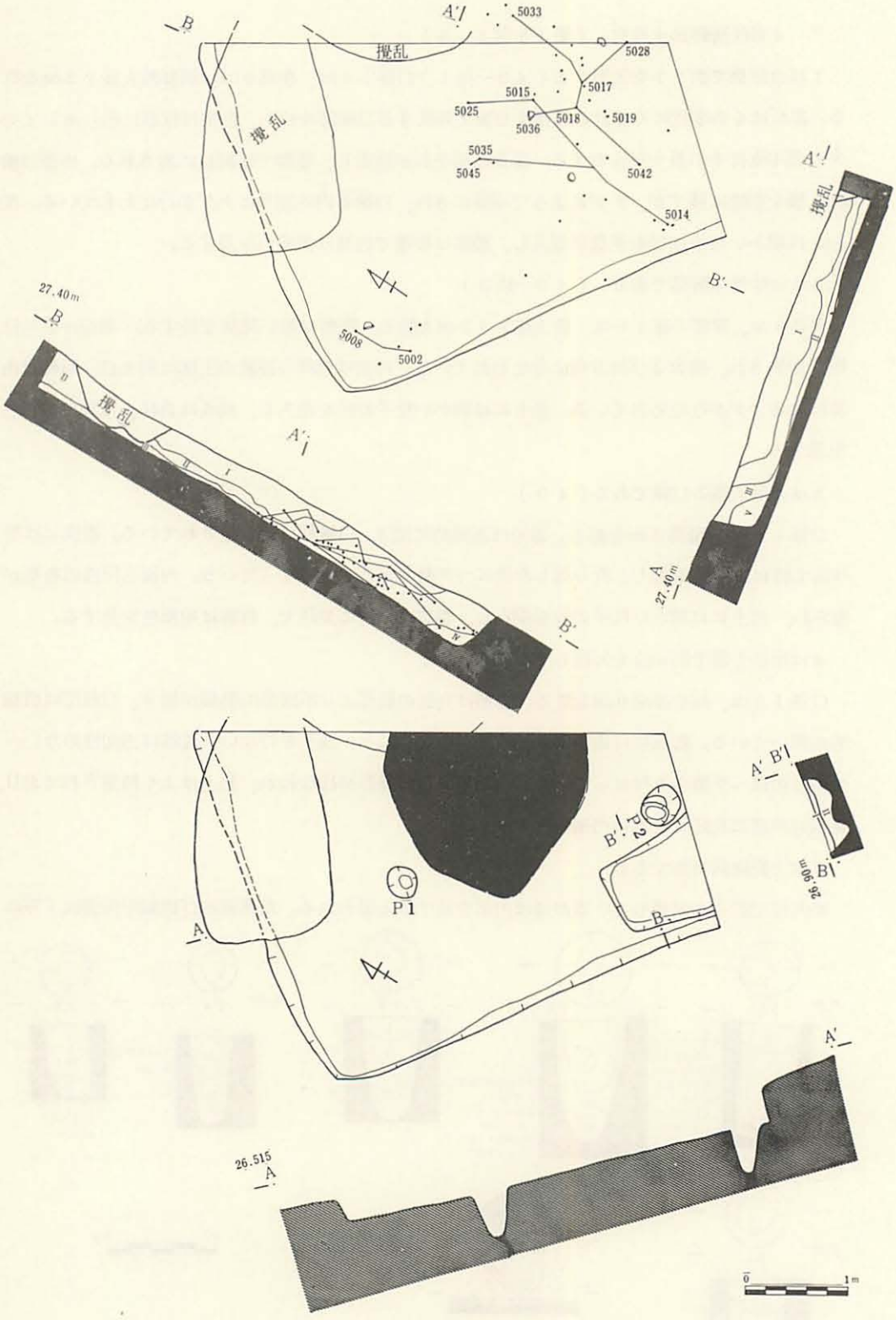
口径１５㎝、推定器高９㎝を測る。器形は丸底の底部より半球形に胴部が続き、口縁部は直線的に開いている。器面には刷毛目整形の後、念入りにヘラ磨きを行ない、底部は方向性のないヘラ削りの後ヘラ磨きを行なっている。内面も同様の整形が行なわれ、胎土はよく精選されており、焼成は非常に良好で色調は明褐色を呈する。

５は土製玦状耳飾である。

半欠品で約$\frac{1}{2}$を欠損しているがほぼ円形を呈すると思われる。表裏面及び側縁中央部は丁寧に



第20図　　4号住居跡pit，炉跡実測図



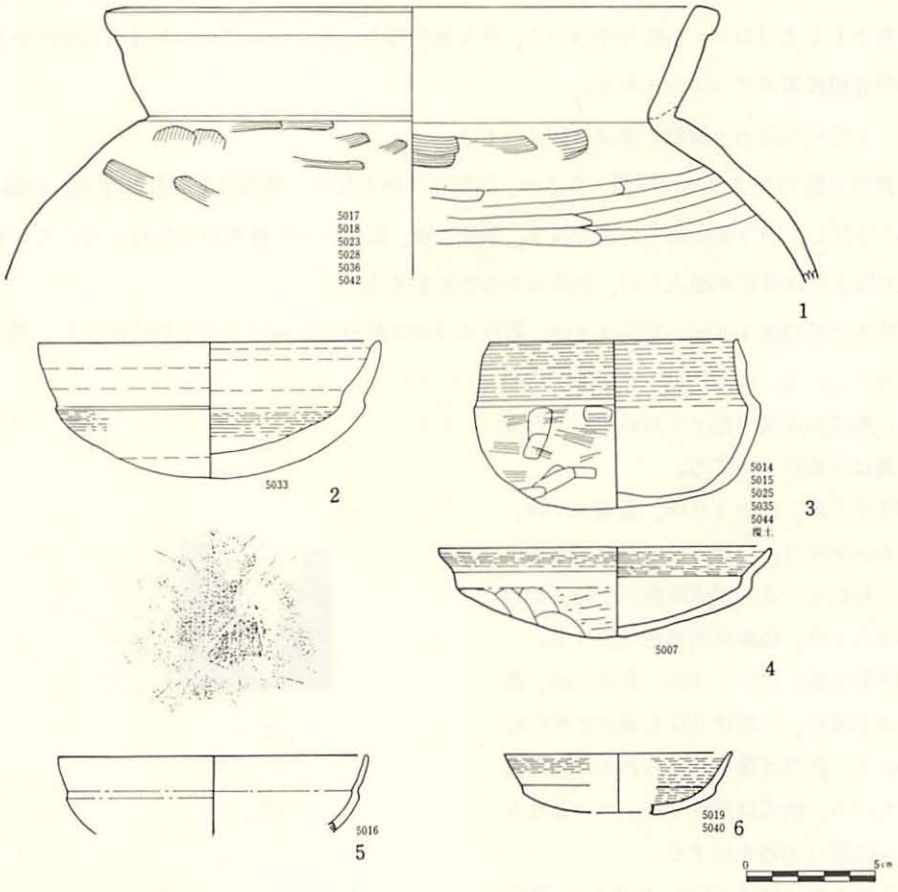
第21図　　5号住居跡遺物出土状態及び実測図

磨かれており、側縁はヘラ状工具によって１６個の方形突起物を作り出し、さらにその頂部に竹状工具で刺突している。

側縁断面は弧状にくぼんでおり、中央孔に向かって薄くなっている。

中央孔は表裏面より穿っており、ほぼ垂直である。胎土には細かい粒子の砂を混入し焼成は非常に良好で色調は明褐色を呈する。

（鈴木）



第22図　　5号住居跡出土土器実測図

5号住居跡　（第２１図）

本住居跡は、D－４－４．５．９グリットに位置し４号住居跡を切っている。平面形は、北東側が調査域外にあるが南西側の状況から4.9ｍの隅丸方形を呈していると推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上り、南壁で４４㎝、西壁で２４㎝を測る。床面は平坦で堅く踏み固められており、特に中央部は顕著であり、その範囲は1.８ｍ×1.６ｍである。柱穴は２ケ所で検出され、P_1、P_2は径３８～４０㎝で深さは４６～５３㎝を測る。南東壁付近には、９０㎝×８０㎝、深さ15㎝～２５㎝の白色粘土の範囲が確認された。この白色粘土は東西に広がりを持つものである。白色粘土には、炭火材などが混入している事から竈の灰をかき集めたものであると考えられる。覆土は５層に区分され、第Ⅰ層黒色土（スコリアを多量に含む粘性有り）、第Ⅱ層黒褐色土（スコリアを含む粘性やや弱い）、第Ⅲ層黄褐色土（ロームブロックを部分的に含む粘性やや弱い）、第Ⅳ層黒色土（しまり良し、粘性やや強い）、第Ⅴ層明褐色土（ロームブロック混入粘性やや強い）遺物は第ⅡⅢⅣ層にすべて含まれる。

5号住居跡出土遺物（第２２図１～６）

１は甕形土器口径２２㎝、現高１０.５㎝、器厚1.３㎝を測り、胴部以下を欠損する。口縁はゆるやかに外反し、内外面に刷毛目痕を残す。胴部には、斜位のヘラ整形が行なわれている。焼成は良好で胎土には砂粒が混入され、色調は茶褐色を呈する。

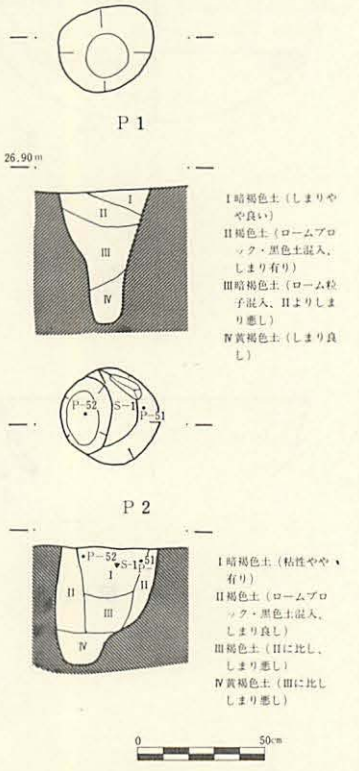
２は坏形土器口径１３㎝、器高4.５㎝、器厚1.３㎝を測り、口縁はゆるやかに外反し、横ナデが行なたれている。底部にはヘラ記号が認められる。焼成は不良で胎土には砂粒が混入され、色調は明褐色を呈する。

３は坏形土器、口径１０㎝、器高5.７㎝、器厚0.６㎝を測り、口縁はほぼ直立すも横ナデが行なわれている。焼成は良好で胎土には砂粒が混入され、色調は明褐色を呈する。

４は坏形土器、口径１４㎝、器高３㎝、器厚0.７㎝を測り、口縁は外反し横ナデが行なわれている。底部に篦削が見られる。内面は研かれている。焼成は良好で胎土には砂粒を混入し、色調は褐色を呈する。

５は坏形土器、口径１２㎝、現高３㎝、器厚0.４㎝を測り、口縁は外反し、横ナデが行なわれている。焼成は良好で胎土には砂粒を混入し、色調は茶褐色を呈する。

６は坏形土器、口径９㎝、現高2.３㎝、器厚0.４㎝を測り、口縁は外反し、横ナデが行なわれている。焼成は良好で胎土には砂粒を混入し、色調は褐色を呈する。　（初山）



第23図　　5号住居跡出土pit実測図

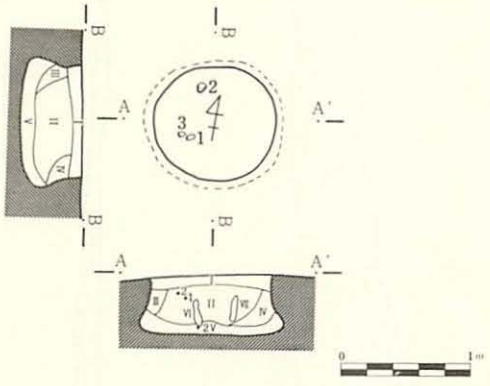
第２節　その他の遺構と遺物

第１土壙　（第２５図）

本土壙はＥ－６グリッドにあり、２号住居跡の東側に位置する。平面形は円形を呈し、径は９６×９０cmで深さ４６～４８cmを測る。

壁は床面からオーバーハングしながら立ち上上り、中位より垂直になって開口部へ至る。

床は平坦で堅くしまっており、非常に良好である。覆土は７層に区分され、第Ⅰ層暗褐色土、第Ⅱ層黒褐色土、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層暗黄褐色土、第Ⅴ層黄褐色土、第Ⅵ層褐色土ブロック、第Ⅶ層ロームブロックである。

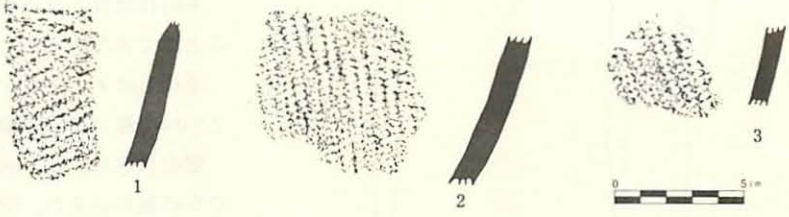


第24図　　１号土壙実測図

全体的にローム粒子を混入し、強度のしまりを有している。遺物は第Ⅱ層～第Ⅴ層に全て含まれる。

第１土　出土遺物　（第２４図１～３）

１は口縁部の破片である。口縁はわずかに外反すると思われるが、口唇部の粘土接合面より破損しており明瞭でない。



第25図　　１号土壙出土土器拓影

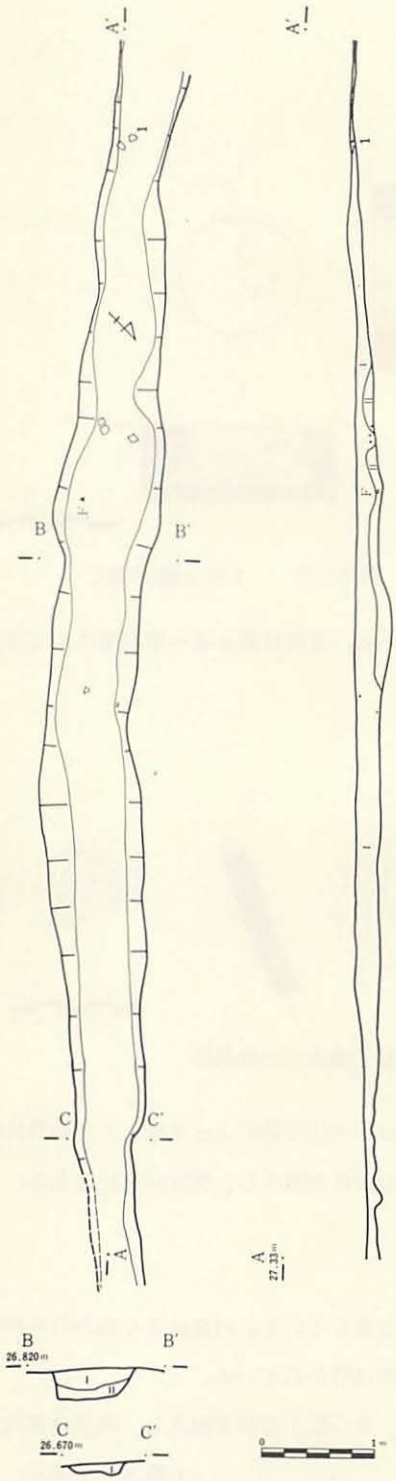
器面には横位のＬ$\lessdot^{R}_{R}$が施されるが極めて粗い。内面はヘラ状工具によって横にナデが数段にわたって行なわれている。器厚0.8cmで、胎土には繊維、小砂粒を混入し、焼成は良好である。色調は外面黒褐色、内面褐色を呈する。

２・３は胴部破片である。

２の器面には横位のＲ$\lessdot^{L}_{L}$を施し、この上方にＬ$\lessdot^{R}_{R}$を施している。内面はよく磨かれ平滑になされている。３の器面にもＲ$\lessdot^{L}_{L}$を施し、内面は磨かれている。

２は器厚1.0cm、３は0.7cmを測り共に胎土には繊維と、荒い粒子の砂を混入し、焼成は普通、色調は２が褐色、３は明褐色を呈する。　　（鈴木、渡部）

以上の土器は縄文時代前期黒浜式と思われる。



第26図　　1号遺物出土状態及び実測図

第1号溝状遺構（第26図）

台地の中央やや南寄り平坦面に位置し、東西の緩斜面に向って傾斜している。E－6－4・5・8・9グリットに位置している。長さ11m、幅1m、深さ40～30を測る。壁はなだらかな傾斜を呈し、内側へ凸凹が認められる。底面は、平坦な部分が少なく、波状を呈す。覆土は2層に区分される。第Ⅰ層暗褐色土・第Ⅱ層褐色土（ロームブロック混入）である。

溝状遺構出土遺物（第27図）

口縁部から胴下半部を欠損する土師質土器である。外面はヘラ削りされ、剝落が著しく内面はハケによる調整がなされる。

底径は9cmであり、外面からの圧力によって一部内側へふくらみ、器厚は0.7～0.9cmである。胎土に小砂を混入させ焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。　　（山本、天野）

第2号遺構　（第28図）

本遺構は台地のやや南寄り平坦面E－6－8・9・13・14グリットに位置する。

東側は調査区域外の為全貌を明らかにすることはできなかった。

平面形は不正方形を呈し長軸2.40m　短軸2.20m、深さは確認面から1.56mである。

壁の状態は、北・南壁は東側で上部から緩やかに掘り込まれ、中程から底面までは、ほぼ垂直となる。

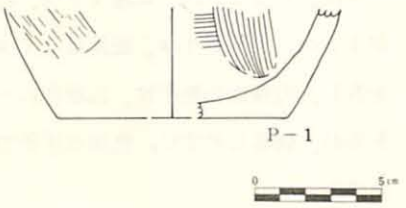
北壁西側では、中程から底面にかけて緩やかにオーバーハングする。オーバーハングの程度は、10～20cmである。

西・南壁は、南壁西コーナーでやや緩やかなほかは、ほぼ垂直である。

底面形は不正方形で西側に長方形の張り出しを有し、長軸2.40m、短軸2.14mである。底面の状態は、粘性、しまりの良いロームで平坦である。

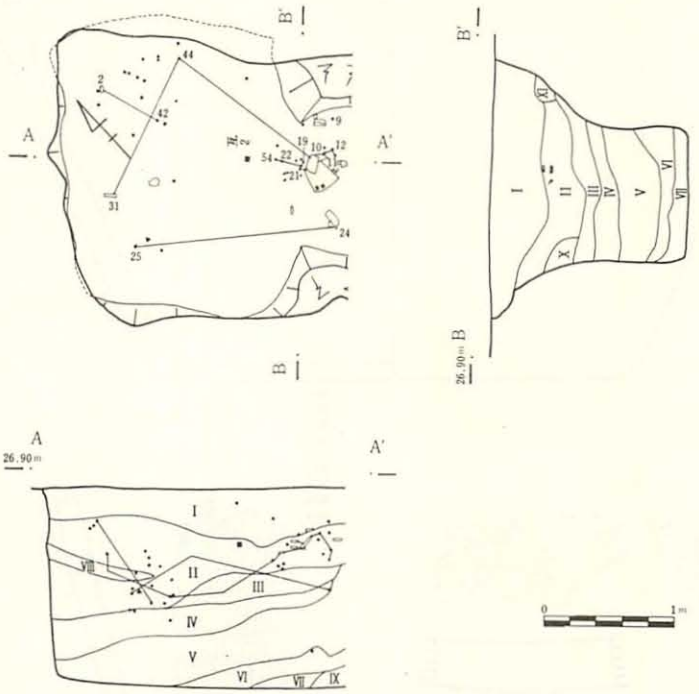
覆土は、11層に区分される。

第Ⅰ層褐色土（粘性やや有り、しまり無し）第Ⅱ層褐色土（ローム粒子混入）、第Ⅲ層茶褐色土（粘性有り、しまりなし）、第Ⅳ層明褐色土（粘性やや有り、しまりなし、ロームブロック混入）第Ⅴ層茶褐色土（粘性、しまり非常にあり）第Ⅵ層黄褐色土（粘性しまり有り）、第Ⅶ層黄褐色土（褐色土粒子混入）、第Ⅷ層褐色土（粘性しまり有り）、第Ⅸ層茶褐色土（粘性しまりあり）、第Ⅹ層茶褐色土（粘性やや有り、しまりなし）、第Ⅺ層褐色土（粘性ややあり、しまりなし、ローム粒子混入）である。



第27図　　1号溝状遺構土器実測図

出土遺物は第Ⅰ層から第Ⅲ層までに含まれ、特に西側に多く散布した状態であった。



第28図　　2号遺構遺物出土状態及び実測図

第２号遺構出土遺物　（２９図１～３）

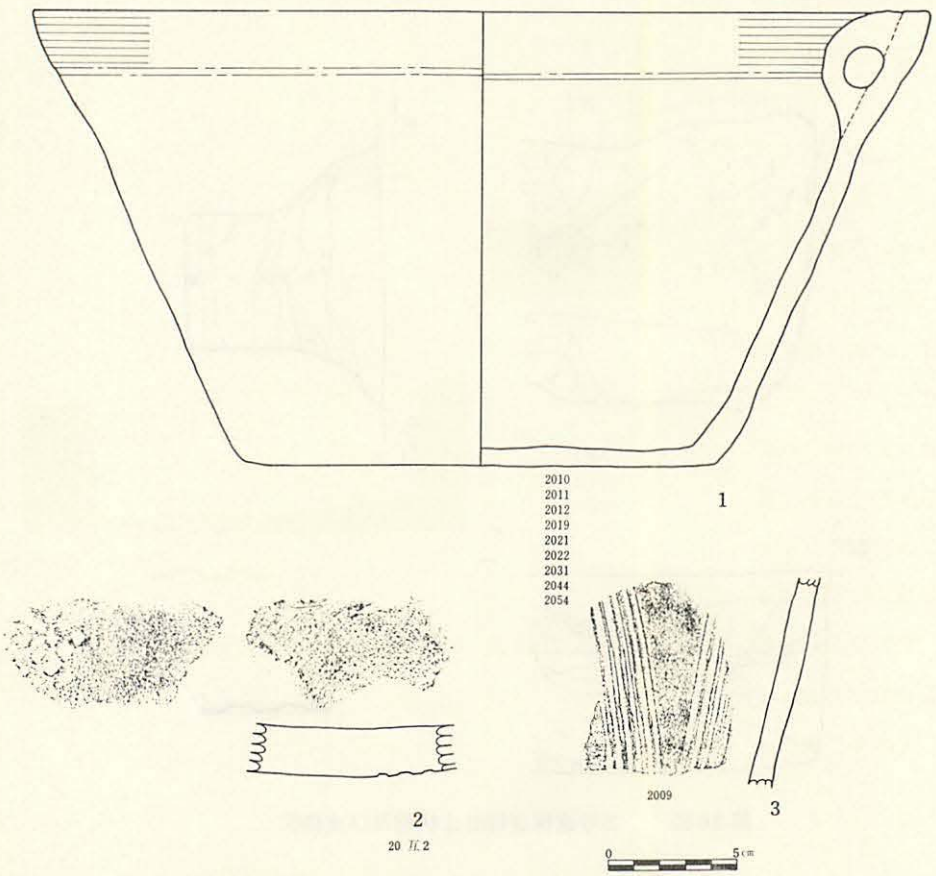
１は、口径３５㎝、底径１８㎝、器高１８㎝を計る内耳式土器の完成品である。器厚は口縁部が１３㎝、胴部が１㎝、底部は0.７㎝を計り、口縁内部に３個の取っ手を有する。胴部上端に段を有し、内外面の整形は、口縁部にハケ目整形を施す。胎土には、小砂粒を含み、焼成は良好であるが、剝落しやすい。色調は灰色で、外面および内部底面には、ススが付着しており黒褐色を呈する。

２は女瓦の破片で、表面は正格子型押が裏面には、布目痕が観察される。器厚は２㎝で、胎土は多量の粒子の粗い砂を含み、焼成は良好、色調は赤灰色を呈する。

３はすり鉢の胴部破片である。　器厚は　１㎝、胎土は小砂を含み、焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。　（岡屋、金子）

第３遺構　（第３０図）

台地の西側傾斜面でＤ－７－１１、１６グリットに位置する。平面形は、不整長方形を呈し、長軸2.６５ｍ、短軸2.１０ｍ、深さ９０～９５㎝を測る。長軸方向はＮ－７５°－Ｗである。壁の状態は良好でほぼ垂直に立ち上がる。底面は長方形を呈し、多少の凹凸は認められるが平坦であ



第29図　　２号遺構出土土器実測図及び瓦拓影

る。覆土は10層に区分される。第Ⅰ層明褐色土、第Ⅱ層暗茶褐色土（ローム粒子混入、粘性なし）第Ⅲ層暗褐色土（粘性あり、第Ⅳ層明茶褐色土（ローム粒子を多量に含む）、第Ⅴ層暗黄褐色土（ロームブロック混入）、第Ⅵ層暗褐色土（ローム粒子およびロームブロック混入、粘性あり）、第Ⅶ層茶褐色土（ローム粒子およびロームブロック混入）、第Ⅷ層黄褐色土、第Ⅸ層黄褐色土（ロームブロック混入、多少黒色粒子混入）・第Ⅹ層黒褐色土である。堆積状態は、自然堆積とは違い意識的に埋め戻した形跡を示す。第３０図の土層断面図を見ると、Ⅸ層とⅩ層に何らかの物を置いたと推測される。出土遺物は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層にすべて含まれる。

遺構内出土遺物（第３１図１～４）

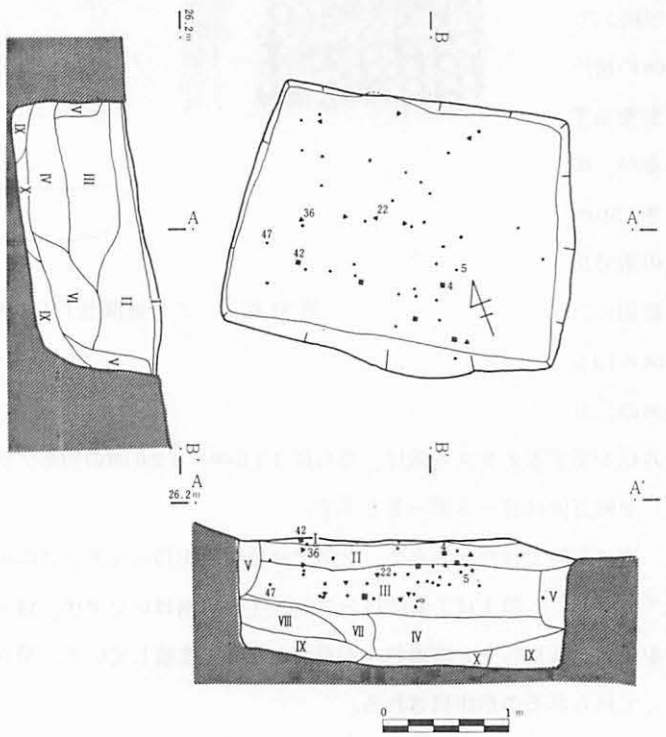
１は条痕文系土器で、外面は斜走する沈線を、内面には横走の条痕文を施し、器厚は1.2㎝である。胎土には多量の繊維を含み、焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。

２は胴部の破片である。外面にはＬ－Ｒの縄文を施している。器厚は0.7㎝で胎土には小石を含み、焼成は良好で色調は赤褐色である。

３は瓦で内面に布目痕をもつ。器厚は1.7㎝で胎土は多量の粒子の粗い砂を含み、焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。

４は女瓦で表面は正格子型押がなされ、器厚は２㎝である。胎土には多量の粒子の砂を含み、焼成は良好で色調は灰白色である。

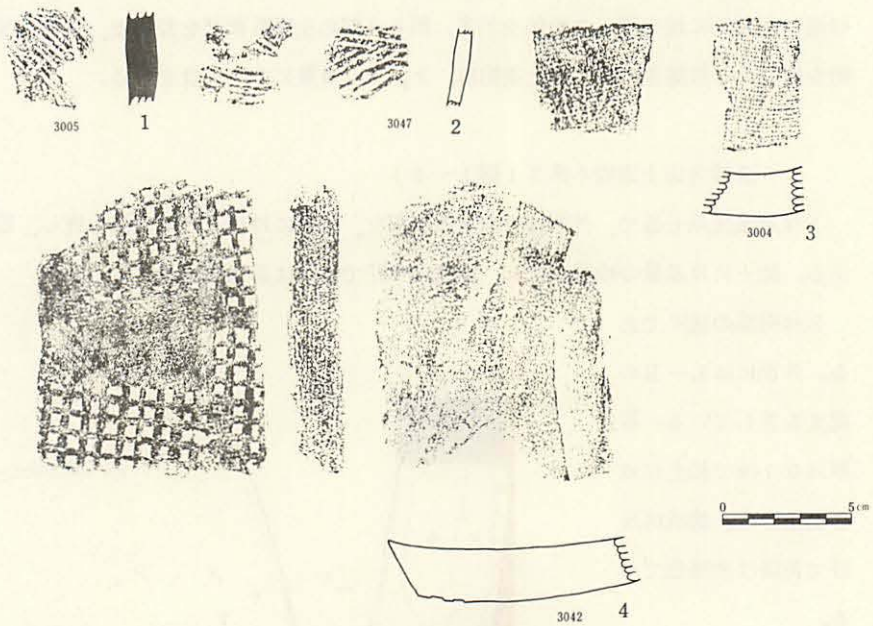
（山本、金子）



第30図　　３号遺構遺物出土状態及び実測図

4号遺構　（第３２図）

本遺構はD－６－５、E－６－５グリッドにあり、５号土壙群の西側に位置する。調査中に本遺構が井戸跡である事が　明確となったが、確認面より３ｍ掘り下げた地点で湧水があり、ボーリング棒による探査を行なった所、底面まで４ｍ以上ある事が予想され、排水等の設備も無い為、これ以上の調査は放棄せざるをえなかった。



第31図　　３号遺構出土土器及び瓦拓影

平面形は長軸３２０㎝、短軸２７０㎝の楕円形を呈するが、深さ１５０㎝の所で北壁側に７０㎝×１４０㎝の三日月状を呈するテラスを設け、さらに１３０㎝×１２６㎝の円形プランを持って掘り込んでいる。

主軸方位はN－３３°－Eを示す。

壁は南側ではなだらかで、北側では急傾斜を持ってテラスに至り、これ以下はほぼ垂直となっている。　覆土は７層に区分され、Ⅰ～Ⅵ層はレンズ状、Ⅶ～Ⅻ層は南側からの流れ込み状態を呈し、黄褐色土と暗褐色土が互層をなして堆積している。第Ⅳ層に粘土が、厚さ５０㎝にわたって見られるのが注目される。

遺物はほぼ一様に分布している状態であった。

４号遺構出土遺物　（３３図１～７）

１・２は摺鉢である。１は口径３０．７㎝、現高１０㎝、器厚１㎝を測る。口縁はふくらみを持ち、直線的に開いている。外面口縁部は横ナデを行ない、内面には一単位１５条で２㎝幅の櫛目が付けられている。胎土はよく精選され、焼成は非常に良好で色調は黒褐色を呈する。

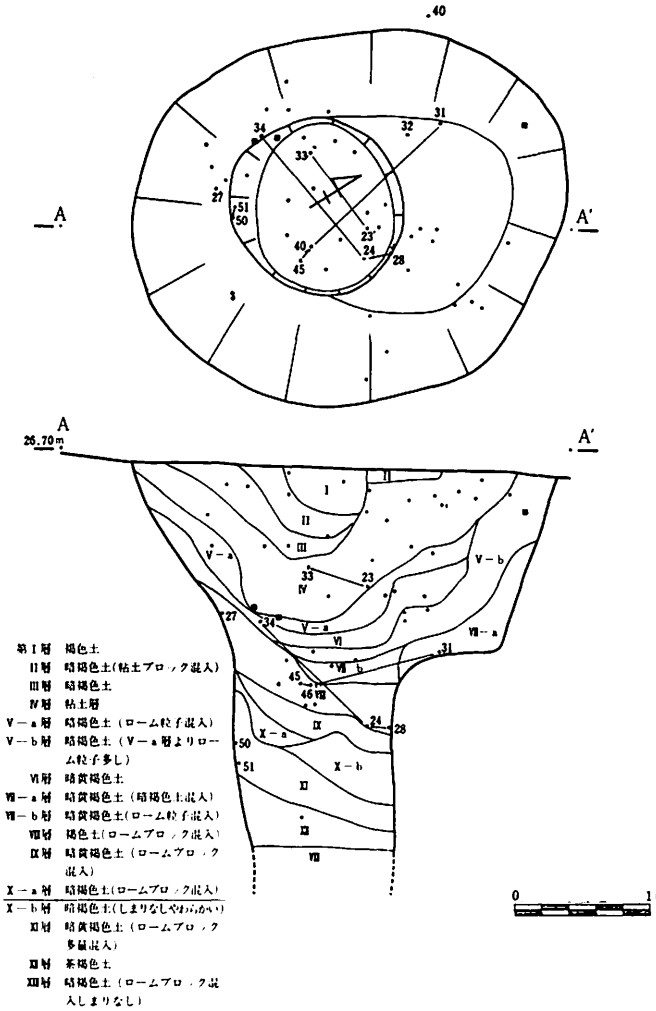
２は口径３０㎝、推定器高１４㎝、器厚0.8㎝を測る。口縁は底部より直線的に開き、やや外反

ぎみである。口縁部外面は横ナデされ、内面には一単位８条の櫛目が深く付けられ一様に摩滅している。

胎土には細かい砂粒を含み、素焼きで焼成良好、色調は灰色を呈する。

３は土師質の杯形土器で$\frac{1}{2}$を欠損する。口径１０㎝、器高3.4㎝、底径 5.2㎝を測る。ロクロ作りで、底部に糸切りを有する。胎土には細かい砂粒を含み、焼成は良好で色調は褐色を呈する。４・５は内耳形土器である。

４は口径３０㎝、現高5.6㎝、器厚１㎝を測る。口唇は平坦で、頸部で内側に陵を持つ。内外面共にナデが念入りに行なわれ、多量のススの付着が見られる。胎土は精選され、素焼きで焼成良好、色調は灰色を呈する。

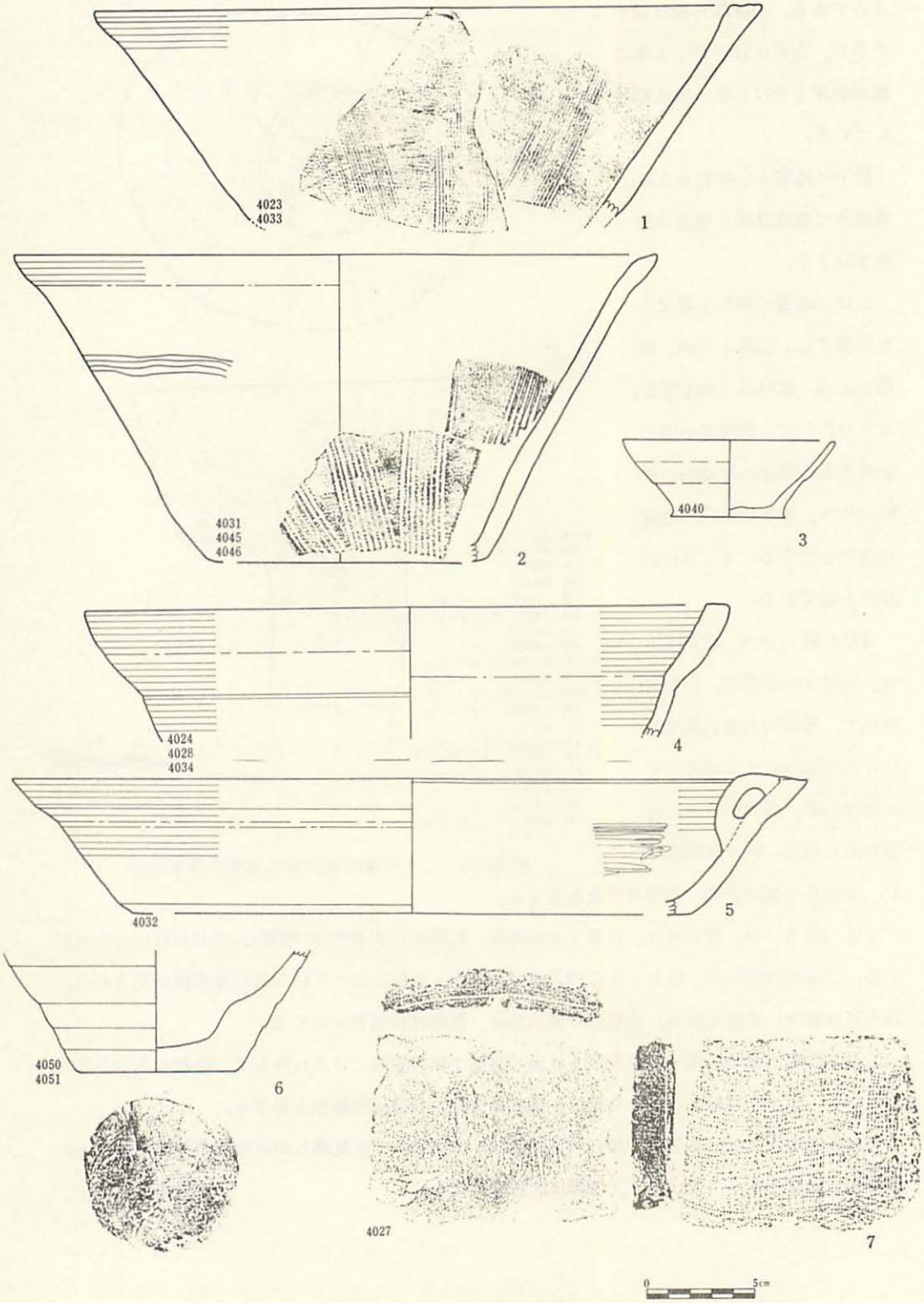


第32図　　４号遺構遺物出土状態及び実測図

５は口径３７㎝、器高６㎝、器厚１㎝を測る。底部から直線的に頸部に至り口縁はやや外反する。口縁部内側には、径3.5㎝の内耳が付けられ、中位にはヘラ状工具の整形痕が見られる。胎土には細かい砂粒を含み、素焼きで焼成良好、色調は明褐色を呈する。

６は土師質土器の底部であり現高5.5㎝、底径７㎝を測る。ロクロ作りで、底部に糸切りを有している。胎土には細かい砂粒を含み、焼成は良好、色調は明褐色を呈する。

７は瓦で内面に粗い布目痕が見られ、側縁はヘラによって化粧落しが行なわれている。胎土には細かい砂粒を含み、焼成良好、色調は灰色を呈する。　　（鈴木、掛札）



第33図　　4号遺構出土土器実測図及び瓦拓影

5号土壙群　（第３４図）

本土壙群は台地の肩部より斜面に移行する部分にあり、D－６－２２、D－６－２５、D－７－１６、D－７－２１グリッドに位置する。

調査時の状態は、遺構の中央に大木があり困難を極めたが、調査によって１号住居跡の南東部分を切って、A～Fの６個の土壙が群をなして存在する事が明確となった。

５－A土壙はB土壙によって遺構の$\frac{2}{3}$を失っているが推定プランは楕円形を呈すると思われ、現存部は７０×１００㎝で深さ２０㎝を測り、主軸方位はN－６２°－Wを示す。

壁は垂直に立ち上り、壙底は楕円形を呈し平坦で硬く、非常に良好である。覆土は１層で黒褐色土である。

５－B土壙はT字形を呈し、長軸３１０㎝、短軸１６０㎝の長方形プランの中央に１×１ｍの正方形プランを付けた形で深さ６０～１１０㎝を測る。壁は垂直に立ち上り、壙底もT字形を呈し平坦であるが、中央へ向ってやや傾斜している。覆土は９層に区分され、第Ⅰ層褐色土、第Ⅱ層黄褐色土、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層暗黄褐色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層褐色土、第Ⅶ層黄褐色土、第Ⅷ層暗褐色土、第Ⅸ層黄褐色土で、覆土全体にローム粒子の混入が見られる。遺物は殆んど覆土中よりの出土である。

５－C土壙は隅丸長方形を呈し長軸２１０㎝、短軸１５０㎝、深さ１ｍを測り、主軸方位はN－５８°－Wを示す。

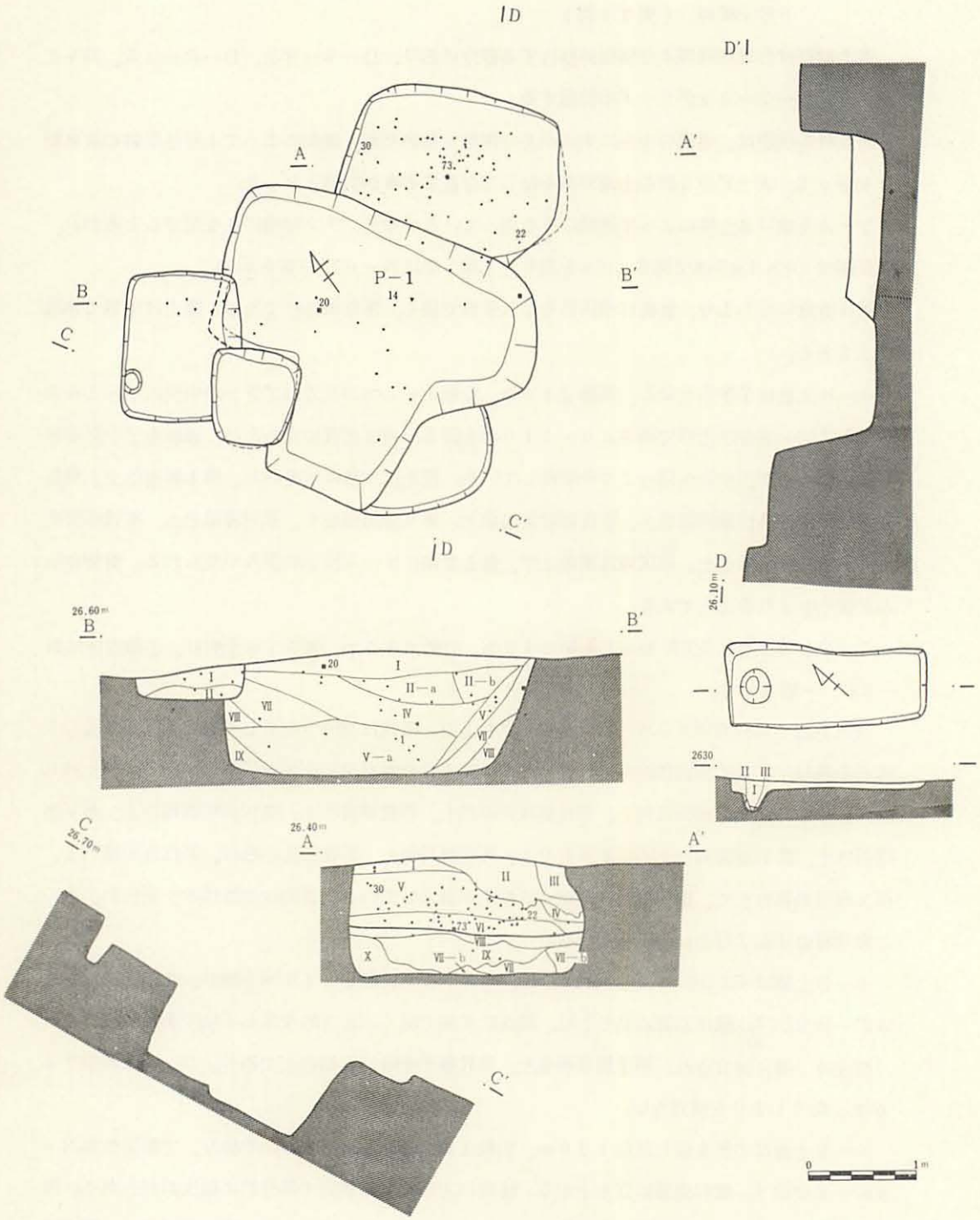
壁は垂直で部分的にオーバーハングして立ち上る。壙底は楕円形を呈し平坦であるが壙底の上に土を盛り、さらに乳白色砂を１０㎝の厚さに敷きつめた平坦な床面を構築している。覆土は10層に区分され、第Ⅰ層暗褐色土、第Ⅱ層暗黄褐色土、第Ⅲ層褐色土、第Ⅳ層暗黄褐色土、第Ⅴ層暗褐色土、第Ⅵ層暗褐色土（しまり有り）、第Ⅶ層褐色土、第Ⅷ層乳白色砂、第Ⅸ層黒褐色土、第Ⅹ層暗黄褐色土で、Ⅲ～Ⅴ層にはローム粒子が混入している。遺物は南側に多く見られ、殆んど第Ⅷ層の床面より上に含まれている。

５－D土壙は不正方形を呈し長軸９０㎝、短軸７４㎝、深さ１１０㎝を測り、主軸方位はN－３２°－Wを示す。壁は垂直に立ち上り、壙底は北側で開く不正方形を呈し平坦である。

覆土は２層に区分され、第Ⅰ層黄褐色土、第Ⅱ層やや暗い黄褐色土であり、ロームと酷似するがまったくしまりを持たない。

５－E土壙は方形を呈し長軸１３６㎝、短軸１ｍ、深さ１８～３０㎝を測り、主軸方位はN－３６°－Eを示す。壁は垂直に立ち上がる。壙底は方形を呈し軟弱で部分的に起伏が見られる。西壁に径８㎝、深さ１８㎝のピットが確認された。覆土は２層に区分され、第Ⅰ層褐色土、第Ⅱ層暗褐色土でロームブロックを多量に混入している。

５－F土壙は長方形を呈し、長軸１８０㎝、短軸７６㎝、深さ１０㎝を測り主軸方位はN－４２°－Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壙底は長方形を呈し軟弱で起伏が見られ、西壁付近に径３０㎝、深さ２０㎝のピットを確認した。覆土はⅠ層で褐色土である。



第34図　　5号A,B,C,D,E,F土壙実測図

本土壙群及び１号住居址との新旧関係は土層断面図より検討した結果、Ｄ－Ｅ－Ｂ－Ａ／Ｃ／Ｆ－１住の順で古くなる事が明確となった。

５号土壙出土遺物　（第３５図１～５）

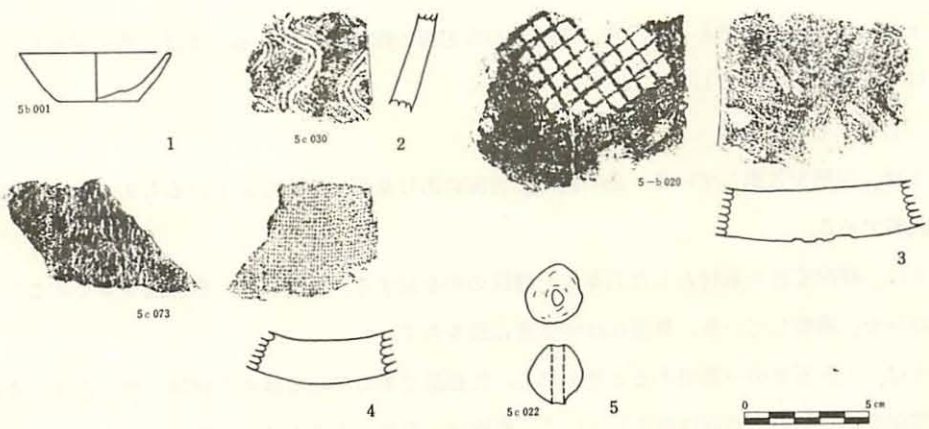
１は土師質の土器である。口径６㎝、器高２㎝で極めて小形の土器である。底部には糸切りを有し、胎土は良く精選され、焼成は良好、色調は明褐色を呈する。

２は胴部の破片である。器面には５条を１単位とする波状櫛描文が見られ、内面はよく磨かれている。器厚0.8㎝で胎土には粒子の粗い砂を含み、焼成は良好、色調は褐色を呈する。

３．４は瓦の破片である。３は表面に格子文を持ち、内面は布目のやや細かい麻布痕を持つが、明瞭ではない。胎土には粗い粒子の砂を多量に含み、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。

４は表面に縄文を持ち、　内面には細い布目を有する。胎土には細かい粒子の砂を含み、焼成は非常に良好で、色調は暗褐色を呈する。

５は土玉である。径2.5㎝の中ぶくらみの球形を呈する、中央には径0.5㎝の孔を穿っており、胎土には細かい粒子の砂を含み、焼成は良好、色調は褐色を呈する。　（鈴木、野口）

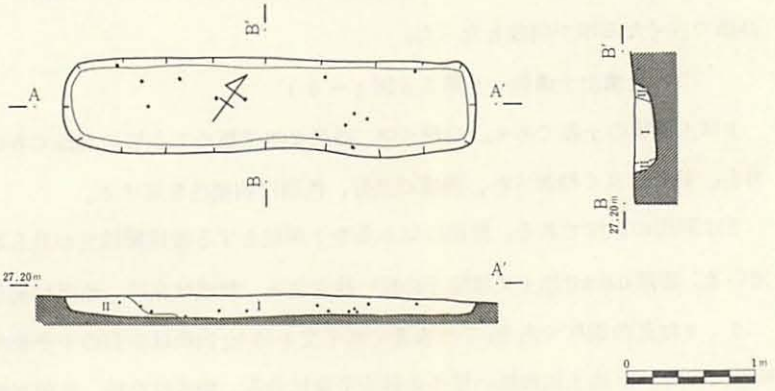


第35図　　５号土壙出土土器実測図及び瓦拓影

Ｂ６号土壙　（第３６図）

本土壙は４号住居跡を切って構築しており、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸３２４㎝、短軸８０㎝を測り、主軸方位はＮ－５４°－Ｅを示す。壁高は１２～１４㎝とほぼ同様で、壁は急傾

斜で立ち上っている。床は平坦で硬くしまっており、良好である。覆土は2層に区分され、第Ⅰ層暗褐色土、第Ⅱ層褐色土（ロームブロック混入）である。第Ⅱ層は台地の傾斜に沿って、流れ込んだ層と思われる。遺物は第Ⅰ層、第Ⅱ層より出土しているが、その殆んどが流入と考えられる、小破片のみであった。（鈴木、青木）



第36図　6号土壙実測図

不定形石器、石製品（第37図　1）

1は、凝灰岩を素材として、表、裏両面から刃部を作り出している。ほぼ三角形る呈し、裏面には一部自然面をのこしている。

石斧　（第37図　2～4）

2は、刃部を欠損している。最大径が、刃部にあり基部が細くなっているものである。石材は玄武岩である。

3は、緑泥変岩を素材とした石斧で、鎌状の形を呈する。表面には、自然面を多くのこし、刃部のみを、調整している。裏面には中央部に段を有す。

4は、大形石斧の一部であると思われる。欠損品であるため全体の形状は不明である。表面は自然面をのこし刃部のみ調整をしている。裏面は、自然面をのこさず調整している。

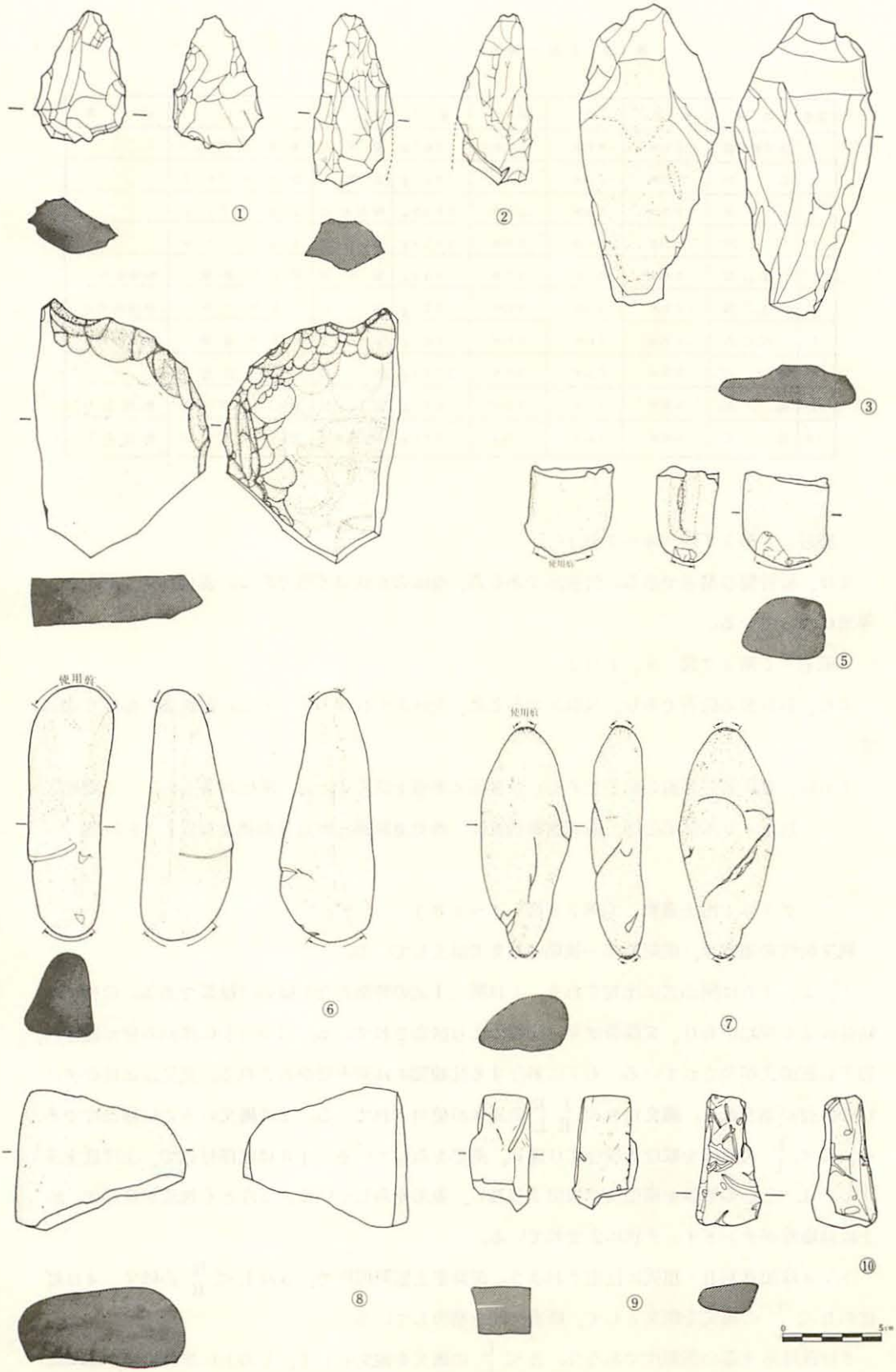
台状石器　（第37図　5～7）

本遺跡では、断面がほぼ台形をなし、平坦面を有し、両先端に使用痕のある物を、台状石器として分類した。[註1]

5は、凝灰岩製の台状石器で、3号遺構から出土した。欠損品である為、形状は不明であるが、平坦面を3面有し、先端部に使用痕がある。

6は、砂岩製の台状石器で、5号住居跡から出土した。完形品で、平坦面を3面有し、両先端部に使用痕がある。

7は、砂岩製の台状石器で、3号遺構から出土した。完形品で、平坦面を2面有し、両先端部に使用痕を有す。



第37図　石器実測図

第４表　石器一覧表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	出土区	備考
1	不定形石器	6.5cm	4.7cm	2.7cm	76.8g	凝灰岩	A－6－20グリッド	
2	石斧	8.5cm	4.0cm	2.5cm	92 g	玄武岩	D－7－9 グリッド	
3	石斧	15.0cm	7.0cm	2.0cm	286.9g	緑泥変岩	C－4－20グリッド	
4	石斧	12.7cm	7.8cm	2.4cm	345.9g	凝灰質砂岩	B－6－3 グリッド	
5	台状石器	4.6cm	4.5cm	3.0cm	90.5g	凝灰岩	第３号遺構	使用痕有り
6	台状石器	12.4cm	3.5cm	4.1cm	277.5g	砂岩	5号住居	使用痕有り
7	台状石器	11.4cm	4.6cm	2.8cm	170 g	砂岩	第３号遺構	使用痕有り
8	磨石	7.0cm	8.5cm	4.0cm	287.1g	砂岩	3号住居	
9	砥石	5.8cm	3.1cm	3.5cm	67 g	砂岩	D－7－13グリッド	擦痕有り
10	砥石	6.6cm	3.4cm	1.5cm	37.5g	凝灰質泥岩	E－6－9 グリッド	擦痕有り

磨石　（第３７図　８－１０）

８は、砂岩製の磨石である。欠損品である為、全体の形状は不明である。表面はよく磨かれ、平坦になっている。

砥石　（第３７図　９、１０）

９は、砂岩製の砥石であり、欠損品である為、全体の形状は不明である。表裏面に擦痕をのこす。

１０は、凝灰質泥岩製の砥石である。表裏面に擦痕を良くのこし、風化が著しい。　（岡屋）

註１　日本住宅公団、西菅遺跡調査団「西菅遺跡第三地点発掘調査報告」１９７６年

グリット出土遺物　（第３８図　１～１８）

縄文時代の遺物は、前期前半～後期中葉まで出土している。

１、２、１０は関山式に比定される。１は関山Ⅰ式の特徴的な平縁の口縁部である。口唇には貼付による突起が有り、文様帯は平行沈線により区画されている。口唇直下には刻み目が施され、以下に鋸歯文が為されている。右下に斜行する沈線間には刻み目が為される。交叉点にはボタン状の貼付が為される。縄文は$R<\frac{L}{R}\frac{R}{L}$の原体が使用されている。２は縄文のみの口縁部片である。$R<\frac{L}{L}$の原体を縦位と横位より施し、菱形を為している。１０は底部付近で、上げ底を呈する。$L<\frac{R}{R}$の原体を縦位及び横位より施し、菱形を為している。３片とも焼成が良好で、胎土には繊維がサンドイッチ状に含まれている。

３・４は加曾利Ⅱ・Ⅲ式に比定されよう。深鉢形土器胴部片で、３は$L<\frac{R}{R}$の縄文、４は縦位の$R<\frac{L}{L}$の縄文を地文として、縣垂文間を磨消している。

５は深鉢形土器の胴部片であろう。$R<\frac{L}{L}$の縄文を地文として、その上に半截竹管状工具に

よって連続瓜形文を波状に施し、直下に沈線による波状文を描く。中期前半に比定できよう。

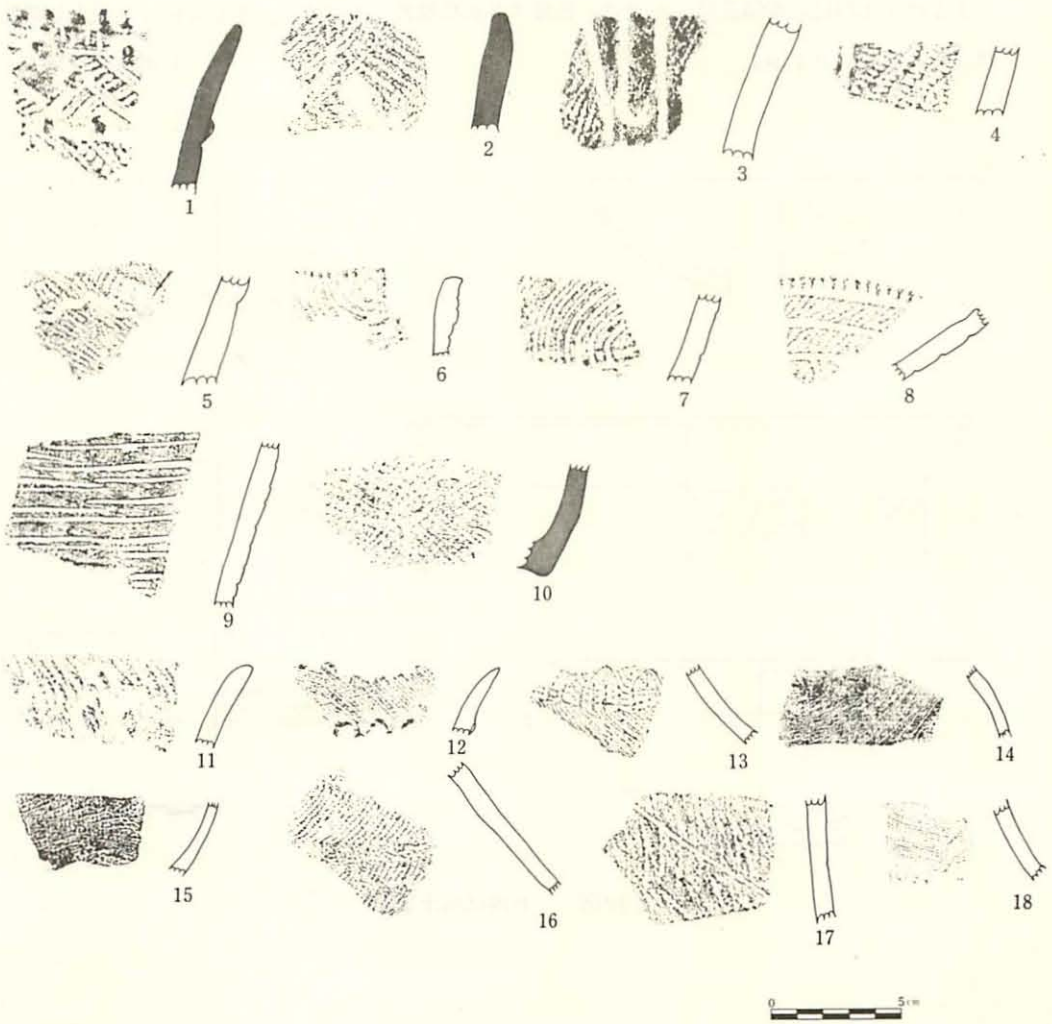
6・7は中心に数条の沈線を持ち、半同心円的文様を描き、6は口縁部で、口唇付近でやや外反している。7は深鉢形土器の胴部片である。堀之内式に比定できよう。

8は浅鉢形土器の胴部片であろうか。上端に刺突文が並び、原体L＜$\frac{R}{R}$の縄文の地文の上に平行沈線を施文し、沈線間に弧線文を描いている。9は粗製土器の胴部片で、内外面ともヘラナデを行ない、外面には幅広い平行沈線を加えている。加曾利B式に比定できよう。

弥生時代の遺物は後期前半～後期中葉まで出土している。

11は口縁部。口縁下端に貝殻による押圧を有する。口縁部に撚糸を施す。色調は茶褐色、胎土に石英を混入し焼成は良好。

12は口縁部。口唇部に刻み目を有し、弱いうねりを呈する。折返し口縁を呈し、折返し面にRLの撚糸を施す。下端に押捺を有す。色調は黄褐色、胎土に少砂を混入し焼成は良好。



第38図　グリッド出土土器拓影

１３は頸部。４本単位の櫛びき文を施し、その上に波状文、下にＲＬの縄文を施す。色調は茶褐色、胎土に少砂を混入し焼成は良好。

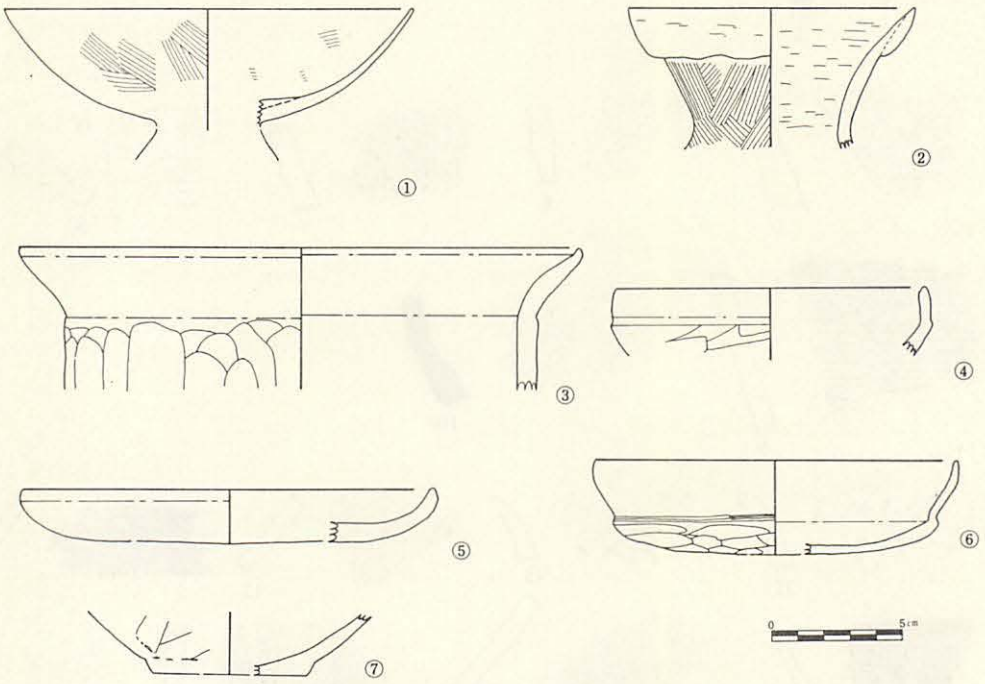
１４は口縁部。口辺部内面に輪積痕が認められ、器面に細い撚糸文を施す。口辺部外面に朱塗りが認められる。色調は褐色、胎土に石英・火山滓を混入し焼成は良好。１１～１４の器厚は0.3㎝～1.0㎝である。

１５は器面に細い撚糸を施す。両端に朱塗りが施されている。色調は褐色、胎土に石英・火山滓を混入し焼成は良好。器厚は1.0㎝。

１６は２条のＳ字状結節文を施し、その間をＬＲの撚糸を施す。色調は外面褐色で内面に朱塗りが施されている。胎土に少砂を混入し焼成は良好。器厚は0.8㎝

１７は縦方向への貝殻による施文を有する。色調は外面茶褐色で内面は赤褐色、胎土に石英を混入し焼成は良好。器厚は0.7㎝。

１８は９本単位の櫛描波状文を施す。色調は外面黒褐色で内面褐色、胎土に少砂を混入し焼成は良好。器厚は0.7㎝。　　（小林、長野）



第39図　　B地区出土遺物

B地区グリッド出土遺物　（第３９図１～７）

１は高杯形土器脚部である。現高4.6㎝、口径１5.8㎝、器厚　0.7㎝を測る。　丸味を帯びて湾曲し、脚部との接合部において剝落している。器面には斜位方向に５本単位による刷毛目整形を施す。胎土に少砂を混入し焼成は良好であり、色調は褐色を呈する。

２は壺形土器であり、胴部以下を欠損する。現高5.5㎝、口径１１㎝、器厚を測る。口縁部は折り返しを呈し、無文で下端に押捺を施し緩やかなうねりを呈する。頸部には斜位に６本単位の刷毛目整形を施し、一部に朱塗りの痕が認められる。胎土に少砂を混入し焼成は良好であり、色調は内外面とも褐色を呈する。

３は甕形土器であり、胴中央部以下を欠損する。現高5.6㎝、口径２1.8㎝、器厚　0.8㎝を測る。口縁部は稜を有し、大きく外反して直線的な胴部に移行する。胴部には篦削りを施す。胎土に少砂を混入し焼成は良好であり、色調は内外面とも褐色を呈する。

４は杯形土器であり、底部以下を欠損する。現高2.7㎝、口径１２㎝、器厚0.6㎝を測る。口縁部はやや内湾し頸部に段を有し、胴部以下に移行する。胴部に篦削りを施す。胎土に少砂を混入し焼成は良好であり、色調は褐色を呈する。

５は杯形土器である。器高2.1㎝、口径１６㎝、器厚0.7㎝を測る。　口縁部から頸部は丸味を帯び平らな底部に移行する。胎土に少砂を混入し焼成は良好であり、色調は赤褐色を呈する。

６は杯形土器である。器高は3.6㎝、口径１４㎝、器厚0.２～0.5㎝を測る。頸部に段を有し内湾する口縁を有する。底部には篦削りを施し、全体に良く研磨されている。胎土は良好で精選され焼成も良好であり、色調は茶褐色を呈する。

７は杯形土器底部である。現高は2.4㎝、底径6.2㎝、器厚0.9㎝を測る。胴下部に斜位の篦削りを施す。胎土に少砂を混入し焼成は良好であり、色調は暗茶褐色を呈する。

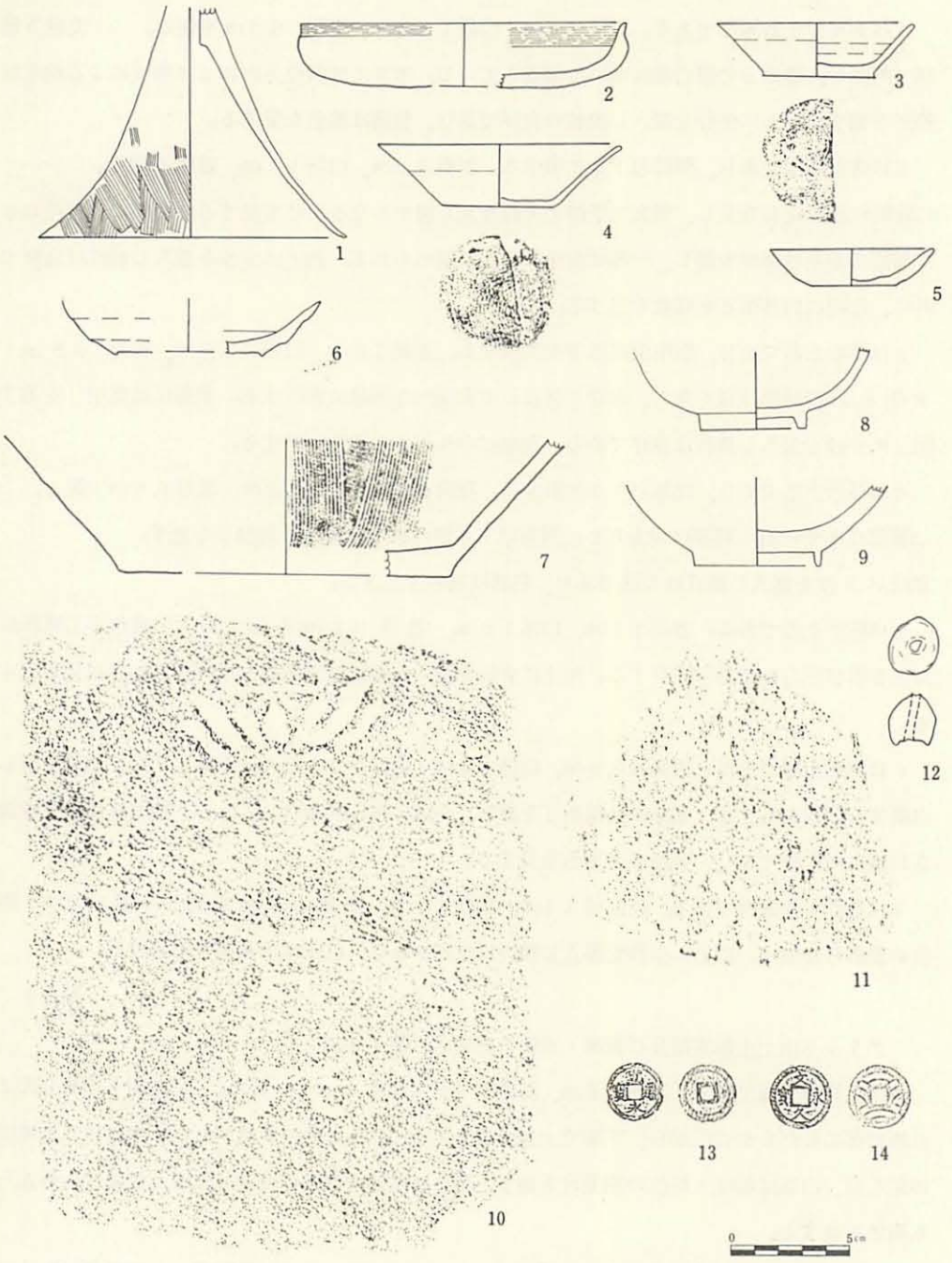
（長野）

グリッド出土土器実測及び板碑・古銭　択影。（第４０図　１～１２）

１は高杯形土器である。現高9.5㎝、底径１3㎝、器厚１㎝を測る。　杯部との接合部より脚裾部になだらかに広がり、下端で大きく外反する。外面に縦位の篦削り、下部には５本単位の刷毛目、内面は横位・斜位の刷毛目を施す。胎土に少砂を混入し焼成は良好、色調は内外面とも褐色を呈する。

２は杯形土器である。器高2.7㎝、口径１3.4㎝、器厚0.9㎝を測る。　口縁部は短くほぼ直立し、湾曲し丸味を呈す頸部から底部へと移行する。口縁部・頸部および内面に横ナデを施し、全体に良く研磨されている。胎土に石英・少砂を混入し焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。

３は土師質土器である。器高2.2㎝、口径8.3㎝、器厚0.3㎝を測る。底部に糸切痕を有する。胎土は精選され良好で焼成も良好、色調は茶褐色を呈す。



第40図　グリッド出土土器実測及び板碑・古銭拓影

4は土師質土器である。器高2.6㎝、口径10.4㎝、器厚0.3㎝を測る。底部に糸切痕を有す。胎土は精選され良好で焼成も良好、色調は乳褐色を呈す。

5は土師質土器である。器高1.6㎝、口径6.9㎝、器厚0.3㎝を測る。底部に糸切痕を有す。胎土は精選され良好で焼成も良好、色調は乳褐色を呈す。

6は陶磁器（茶碗）である。器高2.3㎝、口径10.9㎝、底径6.1㎝、器厚0.9㎝を測る。胎土は精選され良好で焼成も良好、色調は灰色を呈し釉薬を塗ってある。

7は摺鉢である。現高5.6㎝、底径14㎝、器厚0.9㎝を測る。表面は剝落が著しい。胎土は精選され良好で焼成も良好、色調は灰色を呈す。

8は陶磁器（茶碗）である。現高3.3㎝、底径5.4㎝、器厚1.0㎝を測る。胎土は精選され良好で焼成も良好、色調は緑灰色を呈し釉薬を塗ってある。

9は陶磁器（茶碗）である。現高3.3㎝、底径5.3㎝、器厚1.1㎝を測る。胎土は精選され良好で焼成も良好、色調は緑灰色を呈し釉薬を塗ってある。

10は現高27㎝、幅22㎝、厚さ2.5㎝を測り上部下部を欠損する。碑面には右に「文永□□（　　）」、中央に蓮台・華瓶、左に「十月□日」を刻む。石材は緑泥片岩である。

11は現高13.5㎝、幅14㎝、厚さ1㎝を測り上部下部を欠損する。碑面には「キリーク」を刻み、石材は緑泥片岩である。

12は球形を呈し、色調は茶褐色。胎土に少砂を混入し焼成は良好。　　（長野）

第５．６．７．８表は、地質調査・土質試験の結果をまとめたものである。この調査は、小山市乙女土地区画整理事業に伴ない、当地区の土性を調べ舗装設計に必要な基礎資料を得ることを目的として、オーガーボーリング調査およびＣＢＲ試験（物理試験も含む）を行ったのを参考にしたものである。この調査に関しては、小山市乙女土地区画整理組合、須田地下工機株式会社の御協力を願った。註1 第５表は、７－Ｃ－５ グリット を２ｍの深さまで、ハンドオーガーボーリング調査を行った土質柱状図である。層序は５層に区分される。表土は２０㎝を測る。黒褐色土（含水多くシルト質土）層厚は４０㎝を測る。青灰色土（砂質と粘土質で含水多く、総体的に砂混る。）層厚は２０㎝を測る。暗緑灰色土（粗砂で、含水多く粒子不均一である。）層厚は３０㎝を測る。黄青灰色土（粘土質で、粘性あり。）層厚は90㎝を測る。以上のことから不動原亀田遺跡はＤ－７－５．９グリットから７－Ｃ－５まで遺跡全体に粘土質の土層があることが確認された。直粘土は、空気中に触れている間は、黄青灰色土を呈しているが、２～３分ほど手で揉んでいると白灰色を呈してくる。粘土質としては、非常に良質なもので、砂粒が含まれていない状態であった。

土質柱状図

深度 m	水位 m	土質記号	土質分類	色調	土性観察記事
				黒褐色	含水多いシルト土質
			砂質粘土	青灰色	含水多い総体的に砂混る
			粗砂	暗灰緑色	含水多く、粒子不均一
			粘土	黄青灰色	粘性あり

第５表

土質試験結果一覧表

採取深度				0.5ｍ～0.7ｍ
粒度試験	試料の種類			
	礫　分	%		0
	砂　分	%		29
	シルト分	%		45
	粘土分	%		26
	最大粒径	㎜		2.0以下
	60%粒径	D10	㎜	0.036
	10%粒径	D10	㎜	
自然状態	自然含水	W	%	65.77
	土粒の比重	GS		2.527

第６表

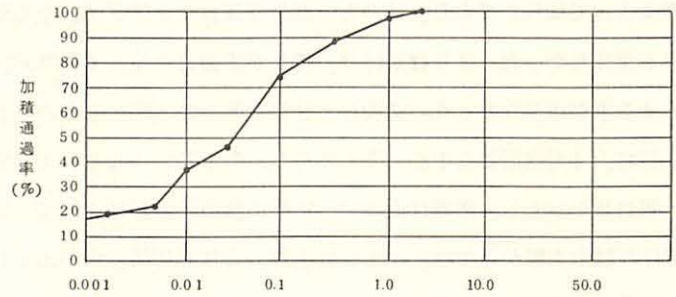
註１　「小山市乙女土地区画整理事業土質試験報告書」　須田地下工機株式会社　　1975年

（三沢）

土の粒度試験結果

粒径加積曲線を図示するのに用いた粒径とその粒径より小さな土粒子重量の百分率とその関係表

フイル	粒径 mm	50.8	38.1	25.4	19.1	9.25	4.76	2.00	0.84	0.42	0.25	0.105	0.074
	重量百分率(%)								97.5	94.2	89.1	76.2	71.9
比浮ヒョウ重	粒径 mm	0.051	0.036	0.023	0.013	0.010	0.0072	0.0036	0.0015				
	重量百分率(%)	65.4	61.3	50.4	41.9	38.1	29.8	23.0	20.3				



第7表

粒子の径	%
4.7mm以上の粒子	0
4.76～2mmの粒子	0
2～0.42mmの粒子	6
0.42～0.074mmの粒子	23
0.074～0.005mmのシルト分	45
0.005mm以下の粘土分	26
0.001mm以下のコロイド分	17

最大粒径	2.0以下mm
60%	0.036
30%	0.0073

第8表

第４章　遺構・遺物の総括

乙女不動原遺跡第二次調査は、乙女地区の集落跡の把握が目的であったが、第一次調査、第二次調査では、集落跡の把握が不可能であったため第三次調査以降に期待するものである。今回は、住居跡の、住居空間の利用を検討するために住居内における、堅く踏み固められた部分と軟い部分を分けた。又、住居内における遺物出土状態を「原位置」で平面的にとらえて調査を行った。特に対象となった住居跡は、１号住居跡、２号住居跡、４号住居跡、５号住居跡である。尚、１号住居跡は、時期不明の土壙群によって切られており、床面も一部分確認したにすぎず、堅く踏み固められた範囲をとらえる事が出来なかった。３号住居跡は、攪乱が床面まで及んでいた為、堅く踏み固められた範囲をとらえる事が出来なかった。遺物出土状態を第９表に図示したのは五領住居跡、１号住居跡、２号住居跡、４号住居跡を中心に考えて見た。第９表によると、１号住居跡の東隅付近には、台付甕・器台坩が出土し、南隅付近には、底部に籾の圧痕が付着している壺形土器が出土している。２号住居跡の東隅付近では、小形台付土器、台付甕脚部、坩が出土し、南隅付近には、甕形土器、壺形土器、小形台付甕、甑甕。台とセットのままの状態で出土している。堅く踏み固められた部分からは、台付甕脚部、小形土器が出土している。４号住居跡の北東隅付近からは、甕形土器が出土し、南東隅付近からは、坩が出土している。北西隅付近には炭化米、土製玦状耳飾りが出土している。このように住居内の出土遺物は、東隅付近、南隅付近に多くの土器の出土が見られる。以上の事から、床面の堅く踏み固められている部分からは、遺物の出土が少ない事を考え合せると、本来遺物等を置くような場所ではないと考えられ、生活の中心は、あくまでも堅く踏み固められた部分であったと思われる。４号住居跡のように北西隅付近から炭化米、土製玦状耳飾りの出土例を考え合せて見ると土器の置く場所・他の遺物（炭化米、装身具等）の置く場所もある程度決まっていたと考えられる。

内耳土器、土師質土器、すり鉢、陶磁器について。

２号遺構・４号遺構出土の内耳土器（内耳土鍋、ホウロク）は県内で、御門遺跡[註1]、畳岡遺跡[註2]、神明西遺跡[註3]、下野薬師寺[註4]、石那田館跡[註5]で知られている。内耳土器の使用法は『土器内側に橋状の耳を付着し、そこに紐を通して釣下げ、火にかける際、紐が燃え切ることを防ぐ仕組をもつ土鍋をいう。』[註6]実際２号遺構出土の内耳土器に紐を通して釣下げてみた結果非常に安定性があり、釣下げるには適していた。２・４号遺構出土の内耳土器は、３種類に分類する事が出来る。２号遺構出土の内耳土器（第２９図１）は、多くのススが付着して、器高は１８㎝あり鍋に適している。４号遺構出土の内耳土器（第３３図５）は、ススが付着せず、器高は６㎝でフライパン的要素を示す。４号遺構出土の内耳土器（第３３図４）は、２号遺構出土の内耳土器とほぼ同じ種類であるが、内耳が付着していないものである。

土師質土器は、表土中と4号遺構から出土しているが、県内の出土例は、下野薬師寺、神明西遺跡、畳岡遺跡等で知られている。すり鉢は、表土中と2号遺構、4号遺構で出土している。以上の事から本遺跡では、内耳土器、土師質土器、すり鉢、陶磁器（茶碗）が出土しているが、年代を限定する事は、資料不足のため即断できないが、2号遺構、4号遺構付近から鎌倉時代の板碑が出土している事から、内耳土器、土師質土器、すり鉢はほぼ同時期の所産であると思われる。陶磁器は、B地点表土中から出土したものであるが、寛永通宝、文久永宝（第40図12 13）の古銭が出土している事から同時期のものであると考えられる。いずれにしても日常生活にかかせない物であったと考えられる。

（三沢）

註1　川原由典「御門遺跡」栃木県教育委員会　1974年

2　大川清他「畳岡遺跡発掘調査報告書」栃木県教育委員会　1976年

3　川原由典、橋本澄郎「神明西遺跡」栃木県教育委員会　1973年

4　斉藤忠他「下野薬師寺跡発掘調査報告書」栃木県教育委員会　1973年

5　橋本澄郎他「石那田館跡」栃木県教育委員会　1975年

6　註3と同じ

第9表　住居跡内遺物

住居跡	東隅付近	西隅付近	南隅付近	北隅付近	堅く踏み固められた部分	備考
1	台付甕　1 器台　1 坩　1		壺形土器　1			
2	小形台付土器1 台付甕脚部　2 坩　1		甕形土器　4 壺形土器　2 小形台付甕　1		台付甕脚部　1 小形土器　1	
4	北東隅付近 甕形土器　2		南東隅付近 坩　1	北西隅付近 炭化米 土製玦状耳飾り		

第１０表は、各住居跡のピットをまとめたものであるが、第１１表は、五領の住居跡、１・２・４号住居跡のピットを中心にしたものである。第１グループは長径×短径は８００㎠以内で、深さが６０㎝以内である。第２グループは長径×短径は、２０００㎠以内で深さが７０㎝以内となるが、ただし、長径×短径が３０００㎠以上を越えるものは柱の用途としてではなく、別な用途が考えられる。

住居跡ピット番号	平面形	規模 ㎝	深さ ㎝	備考
1号住居跡 P_1	円形	32×32	63	
P_2	円形	24×24	22	
P_3	円形	20×20	22	
P_4	楕円形	33×28	20	
P_5	楕円形	20×12	23	
P_6	楕円形	20×？	54	
2号住居跡 P_1	楕円形	65×60	44	
P_2	円形	43×43	45	半分堅い部分に位置する。
P_3	楕円形	43×31	20	堅い部分に位置する。
P_4	楕円形	50×38	37	堅い部分に位置する。
P_5	楕円形	43×25	30	
3号住居跡 P_1	楕円形	26×18.5	30	
P_2	円形	43×43	38	
P_3	楕円形	20×15	43	
P_4	円形	32×32	38	
4号住居跡 P_1	円形	22×22	56	
P_2	円形	35×35	58	半分堅い部分に位置する。
P_3	円形	28×28	48	
P_4	円形	22×22	40	堅い部分に位置する。
P_5	楕円形	25×22	38	堅い部分に位置する。
P_6	円形	28×28	38	堅い部分に位置する。
5号住居跡 P_1	楕円形	38×32	53	
P_2	円形	40×40	46	

第１０表　各住居跡ピット一覧表

第5章　ま と め

最後に小山市は、近年開発ブームの波に乗り、埋蔵文化財の発掘調査関係が、昭和５１年２月頃から急に多くなり始めた。当初は、乙女地区の土地区画整理事業にともなう集落跡、古墳等の発掘調査であった。乙女地区では、昭和５１年２月に乙女不動原遺跡第一次調査、同５１年8月には二次調査が行なわれ、同５２年２月には三次調査を行う予定である。

乙女不動原二次調査の結果、弥生時代後期の住居跡１軒、古墳時代の住居跡4軒、縄文時代前期の袋状土壙１基、時期不明の溝状遺構１、井戸１基、土壙７基、性格不明遺構１基、粘土溜と思われるものである。以上の遺構と異にする遺物は、瓦、鎌倉時代の板碑、江戸時代の陶磁器、古銭が出土している。

本遺跡縄文時代袋状土壙は、埋没土壌の観察および記録にとどめて、今後の乙女不動原遺跡発掘調査の進展によって袋状土壙群として把握して行き、各県出土の袋状土壙群の比較、検討を行ない、袋状土壙群と集落の関係[註1]・機能[註2]・形態上の分類および自然科学分野[註3]との提携を行ない、袋状土壙群の性格[註4]を明らかにして行きたい。

本遺跡の弥生時代後期は、二軒屋式に比定されるものであるが、県内の弥生時代後期の集落跡は、長堤遺跡[註5]、井頭遺跡[註6]、瑞穂野団地遺跡[註7]、柳久保遺跡[註8]等で確認されている。

本遺跡弥生時代後期の住居跡は、約1／2　確認されたにすぎず、埋没土壌の観察および遺物出土状態の記録にとどめた。ただし古墳時代前期五領式住居内から、ある程度の土器セット関係や炭化米の出土や籾の圧痕土器が認められる事や砥石の出土によって稲作農耕を示唆するものであるが、弥生時代後期の住居内出土遺物は、すべて破片であり、セット関係をとらえる事が出来ず又、五領式住居跡と同じ台地に位置しながら、稲作農耕を示唆する遺物が確認出来なかった。以上の事を考え合せると弥生時代後期末～古墳時代初頭の歴史的変遷の中で、生業の変化、生活用具の変化の在方が若干見られる。しかし集落跡の単位、種々の生活用具の在方等については、今後検討を加えて行く。

今回の発掘調査によって当台地には、弥生後期の集落跡および古墳時代の集落跡が占有していることが判明した。今後乙女地区第三次・第四次と発掘調査を行う事によって、より正確に集落跡の把握をおこなって行きたいと思う。

（三沢）

註１　八幡一郎他「高根木戸」船橋市教育委員会　１９７１年

２　塙　静夫、中村紀男「添野遺跡の研究」下野古代文化研究会　１９７４年

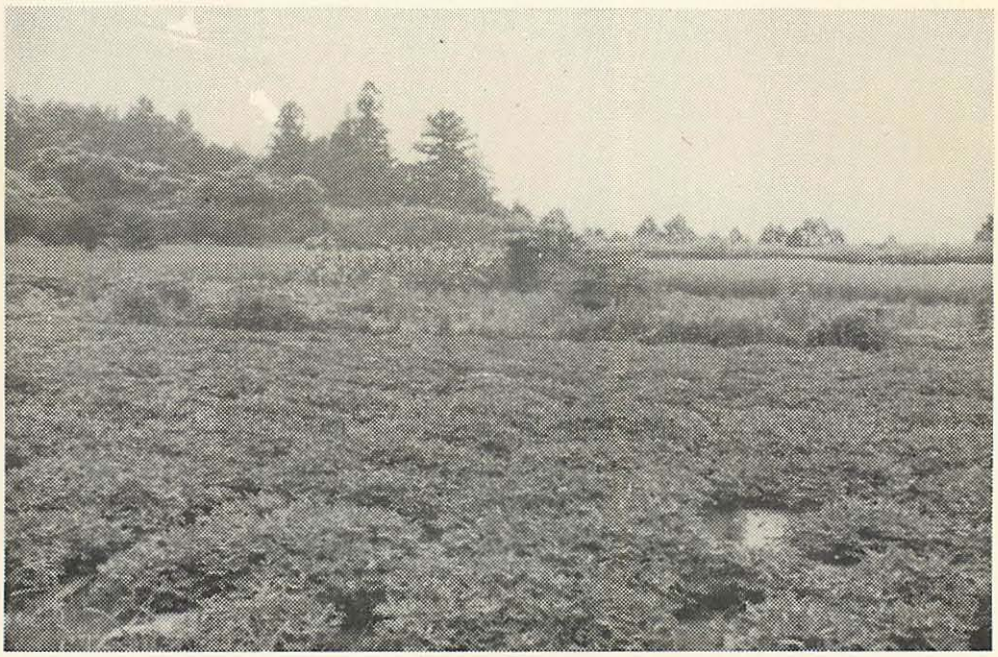
３　塙　静夫他「鹿島神社裏遺跡」鹿沼市教育委員会　１９７４年

４　海老原郁雄「梨木平遺跡」上河内村教育委員会　１９７５年

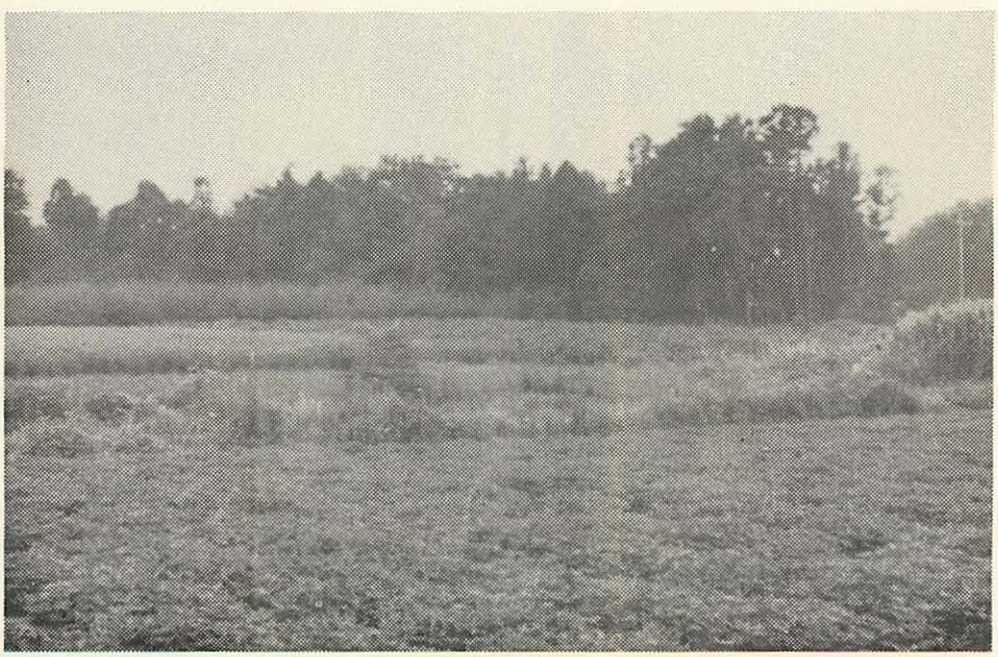
５　柳川　　宏「長堤遺跡」栃木県史編さん委員会　１９７６年

註6　大金宣亮「井頭」栃木県教育委員会　１９７４年
7　塙　静夫「瑞穂野団地遺跡」栃木県史編さん委員会　１９７６年
8　塙　静夫、田代　寛「栃木県史研究３」栃木県史編さん専門委員会編　１９７２年

図版1



遠景

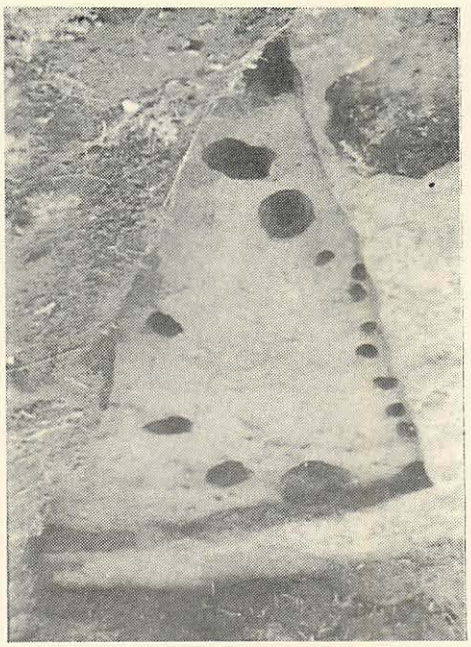


近景

1号住居跡と5号土壙群

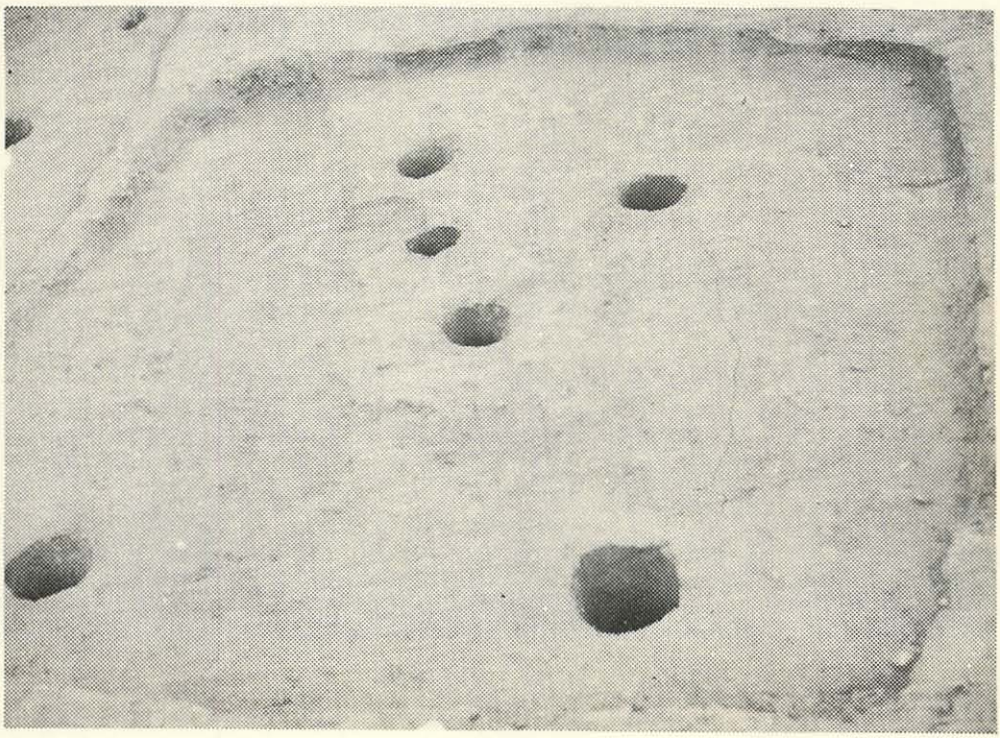
2号住居跡遺物出土状態

2号住居跡遺物出土状態



2 号住居跡

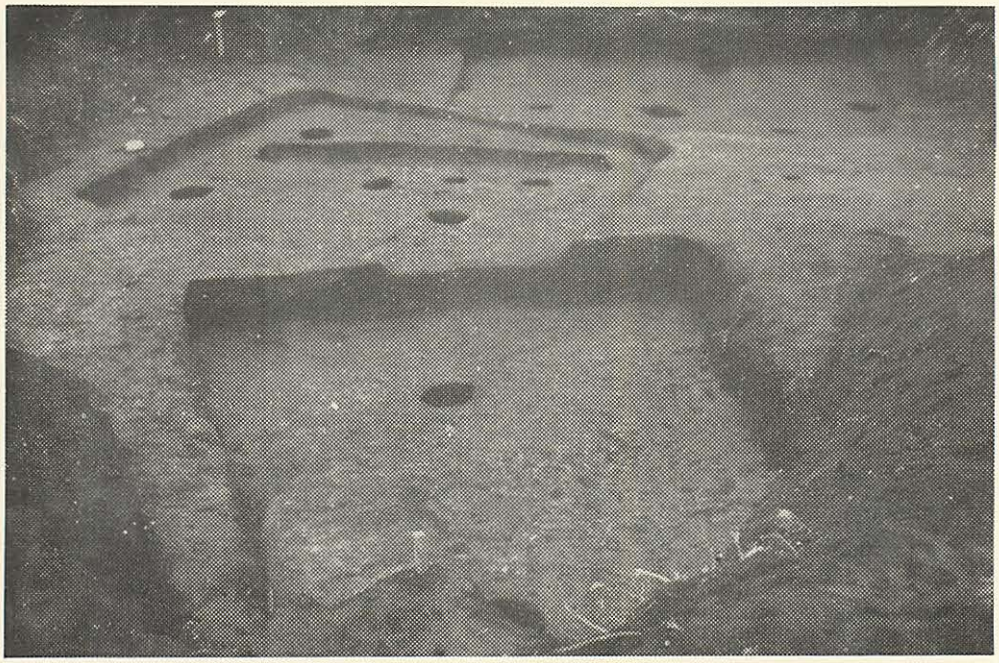
3 号住居跡



4 号住居跡

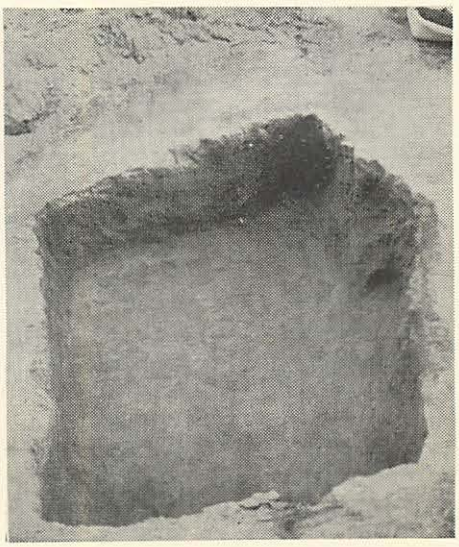
4 号住居跡遺物出土状態

5 号住居跡



3・4・5 住居跡

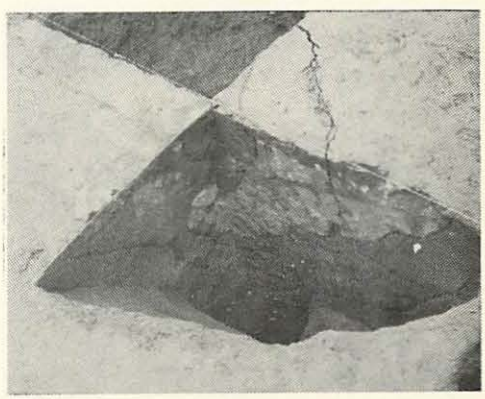
1 号土壙



3 号土壙

2 号住居跡，溝状遺構，2・4 号遺構

2 号遺構物出土状態

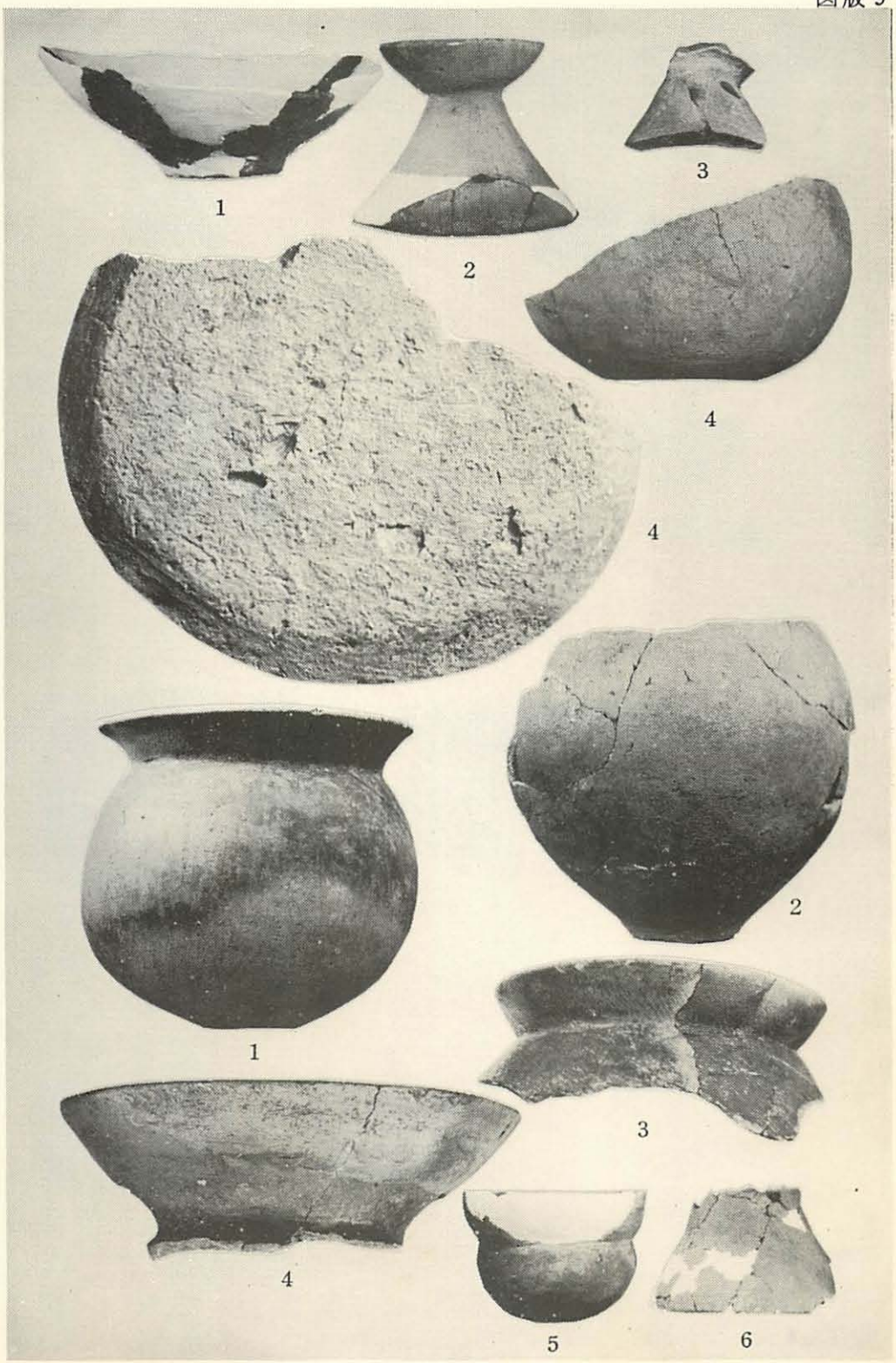


4 号遺構土層断面

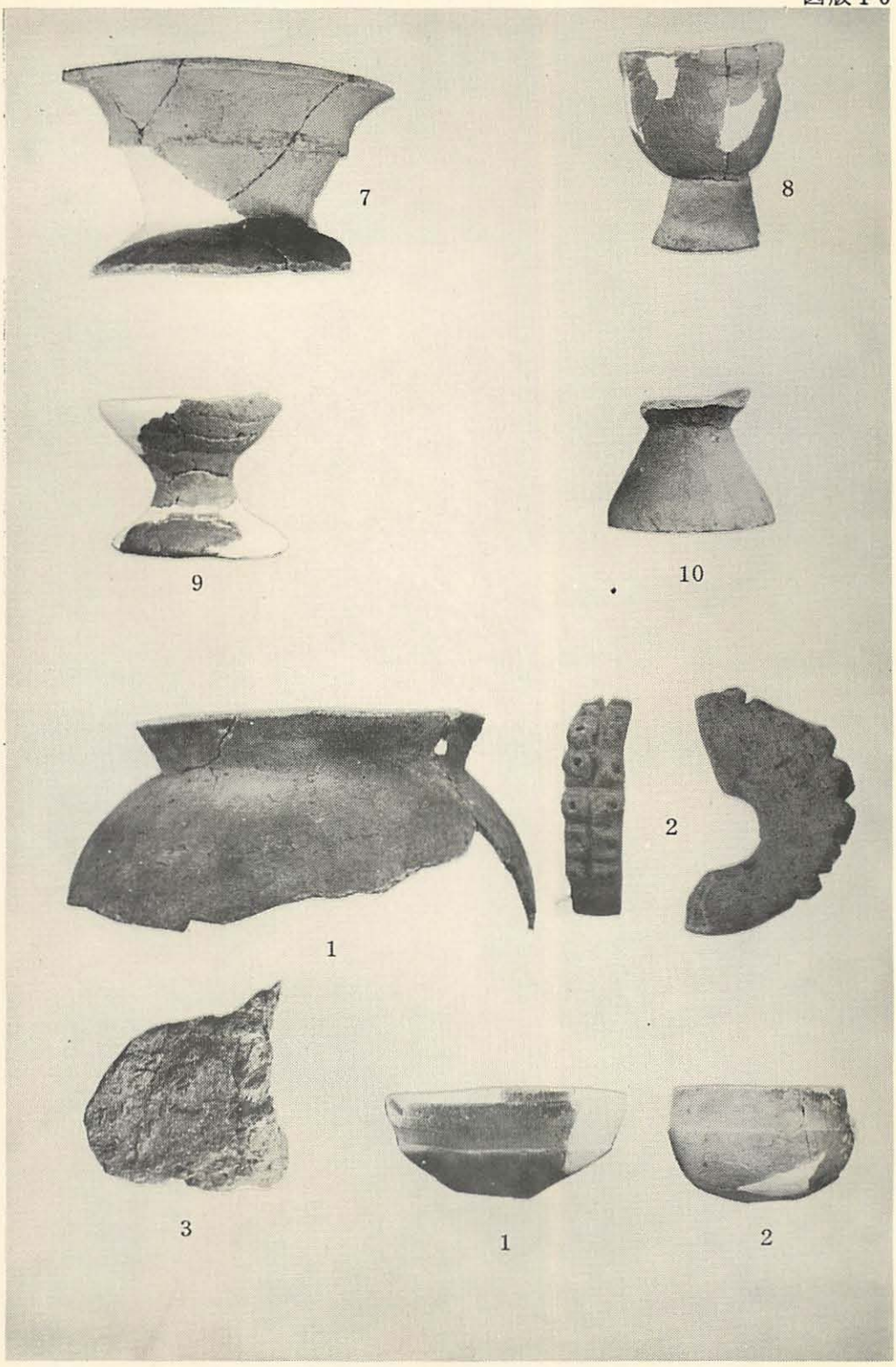
5 号土壙群

5 号 C 土壙

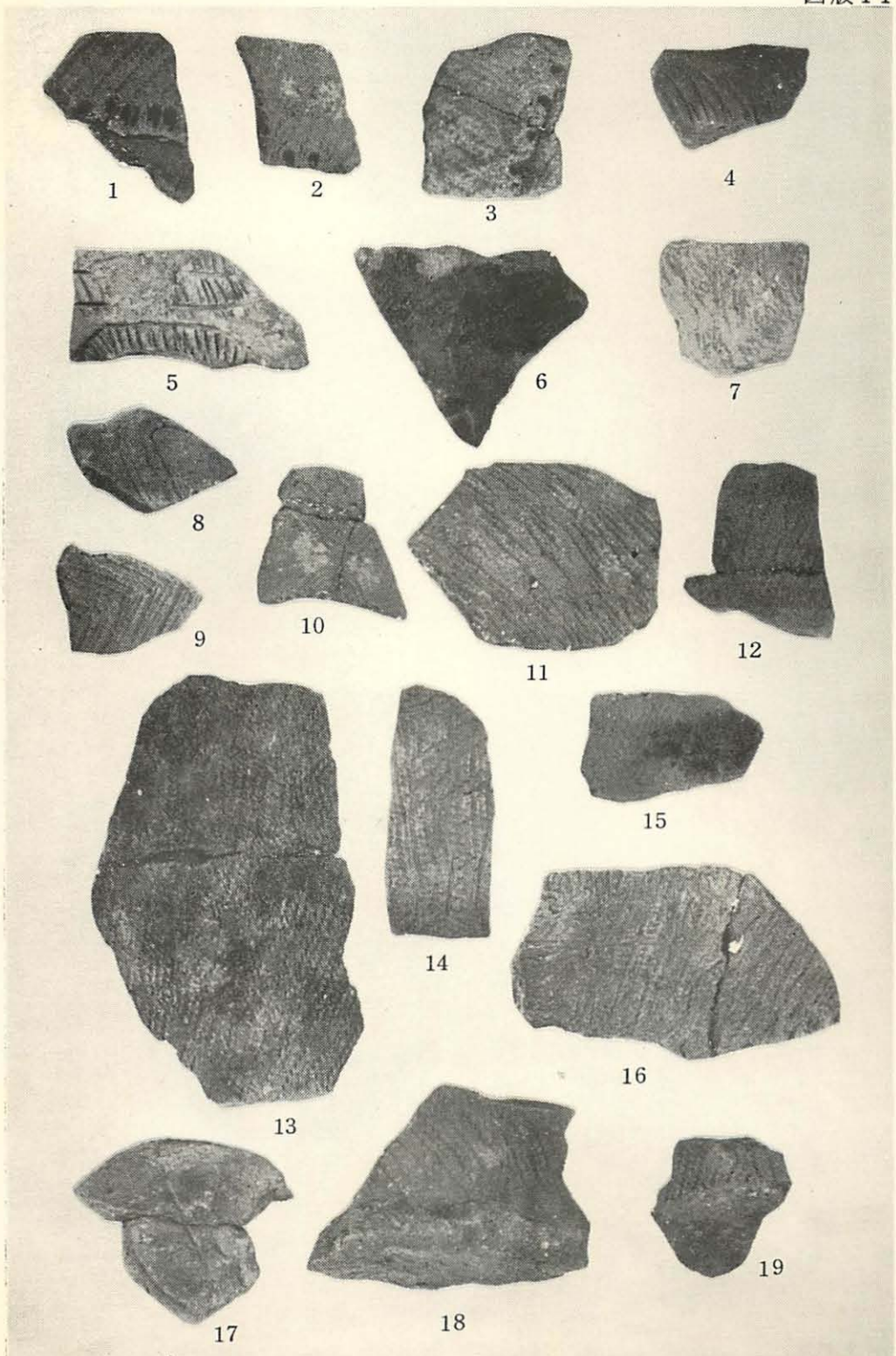
6 号土壙



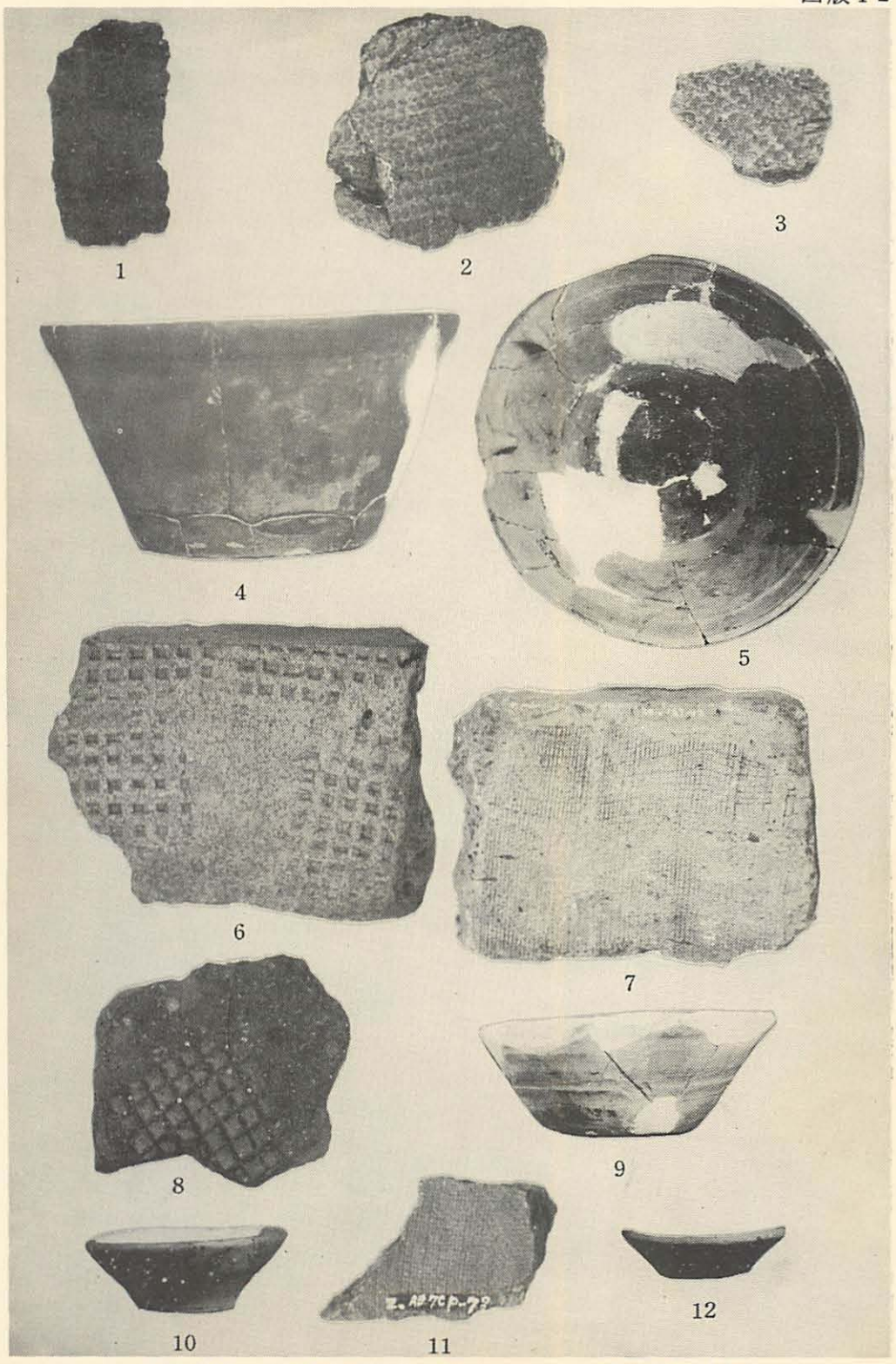
1・2号住居跡出土土器



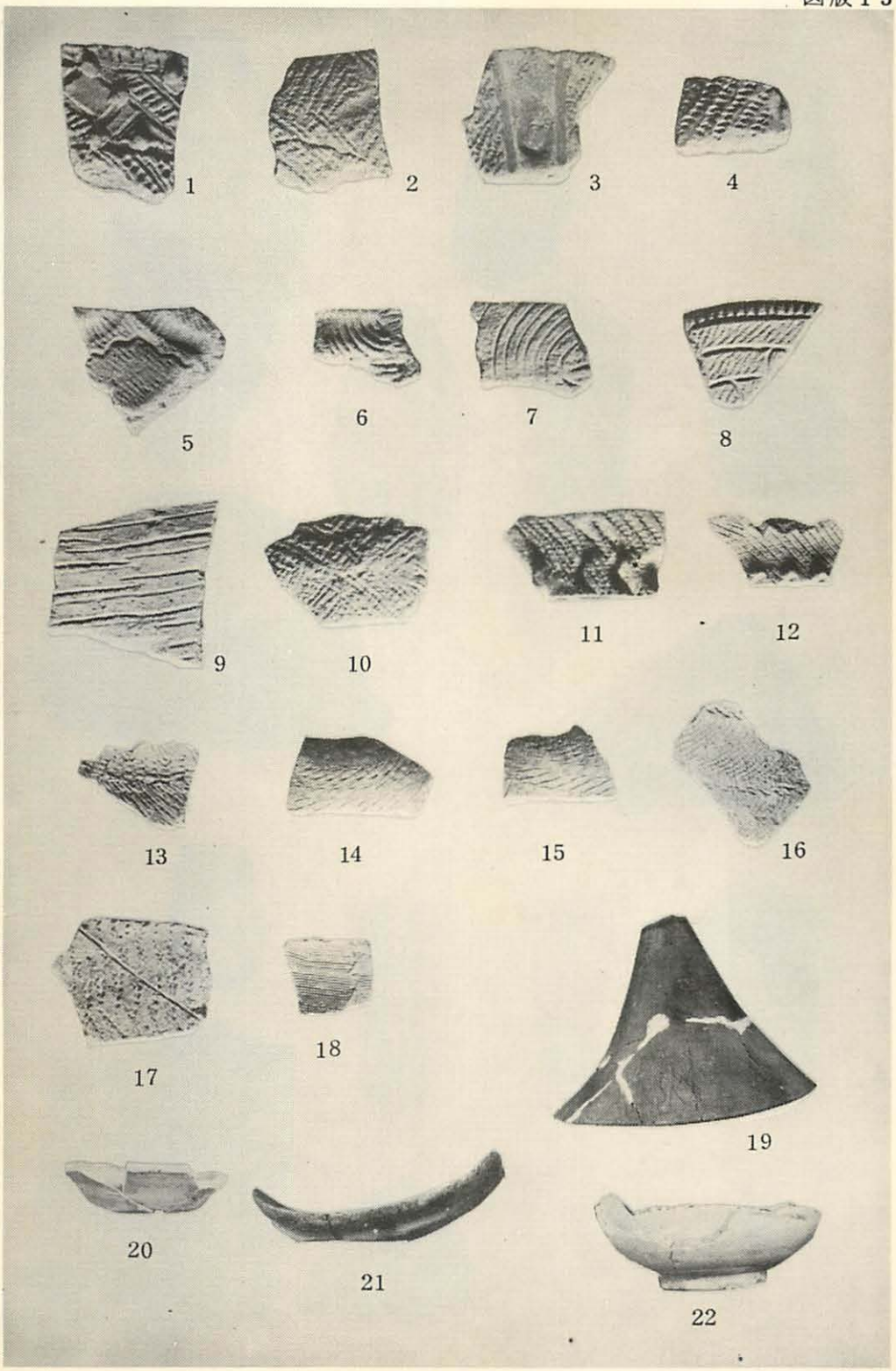
２・４・５号住居跡出土土器



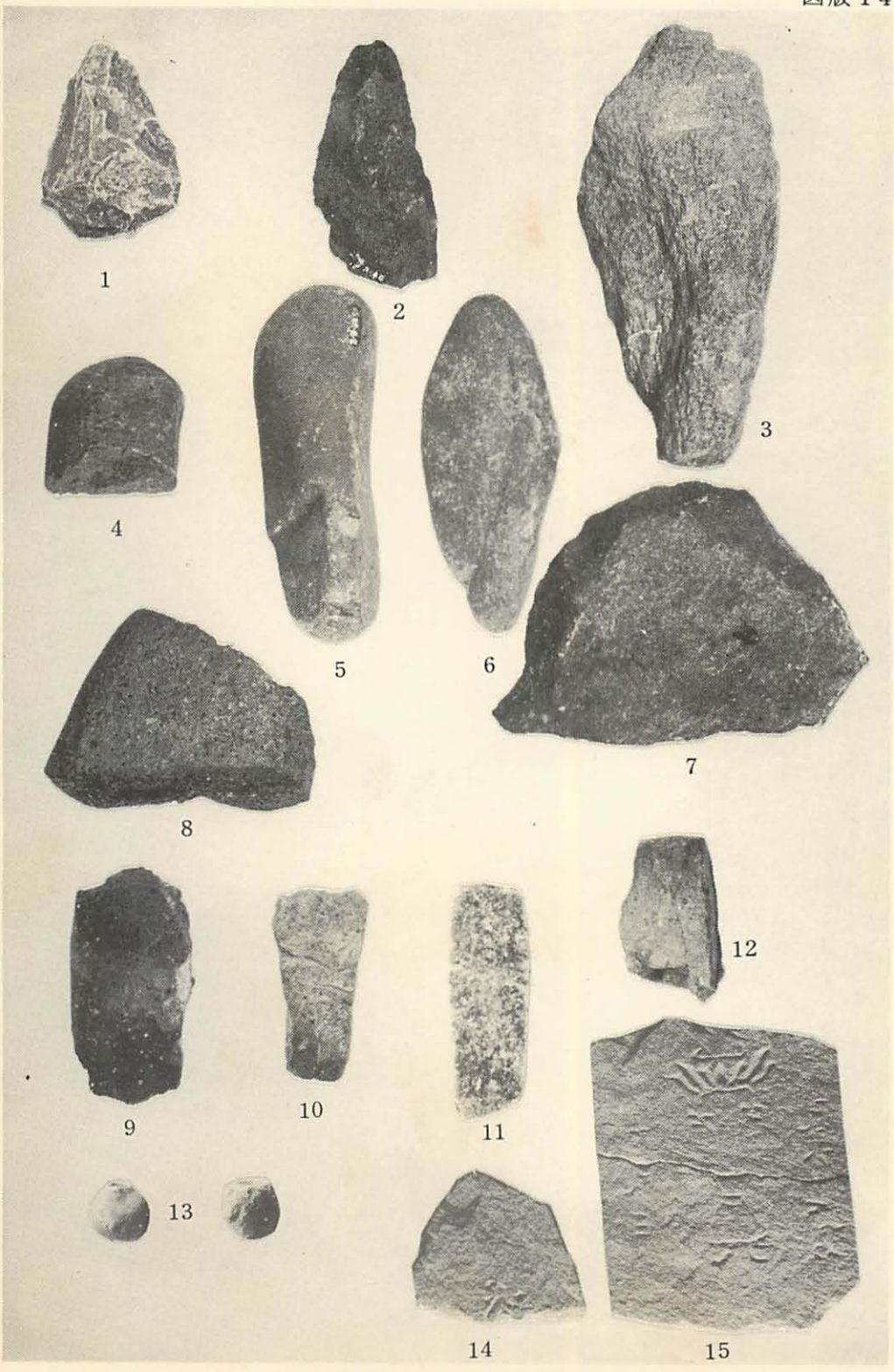
3号住居跡出土土器



１号土壙，２号遺構出土土器，２・３・４号遺構出土瓦



グリット出土土器



グリット出土石斧・砥石・板碑・土玉

乙女不動原亀田遺跡第二次発堀調査
——小山市文化財調査報告書——

１９７７年５月

発行　小山市教育委員会
印刷　共同印刷株式会社